

福重稻木遺跡 2

—第1次・2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1006集

2008

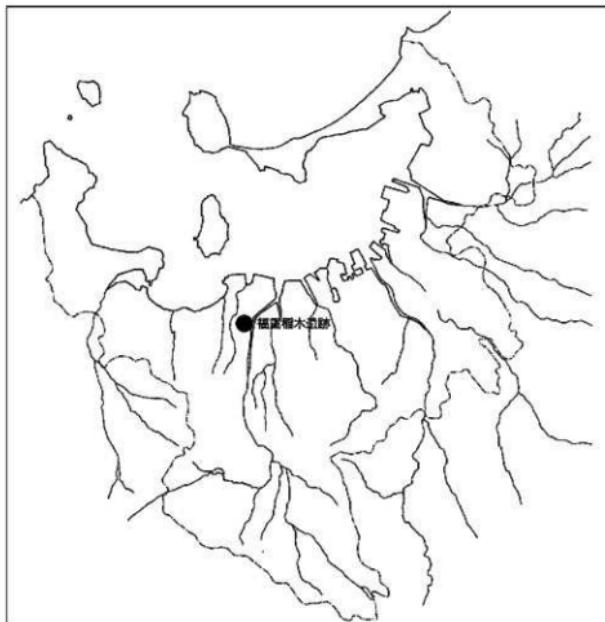
福岡市教育委員会

FUKU SHIIGE INA GI

福重稻木遺跡 2

—第1次・2次調査報告—

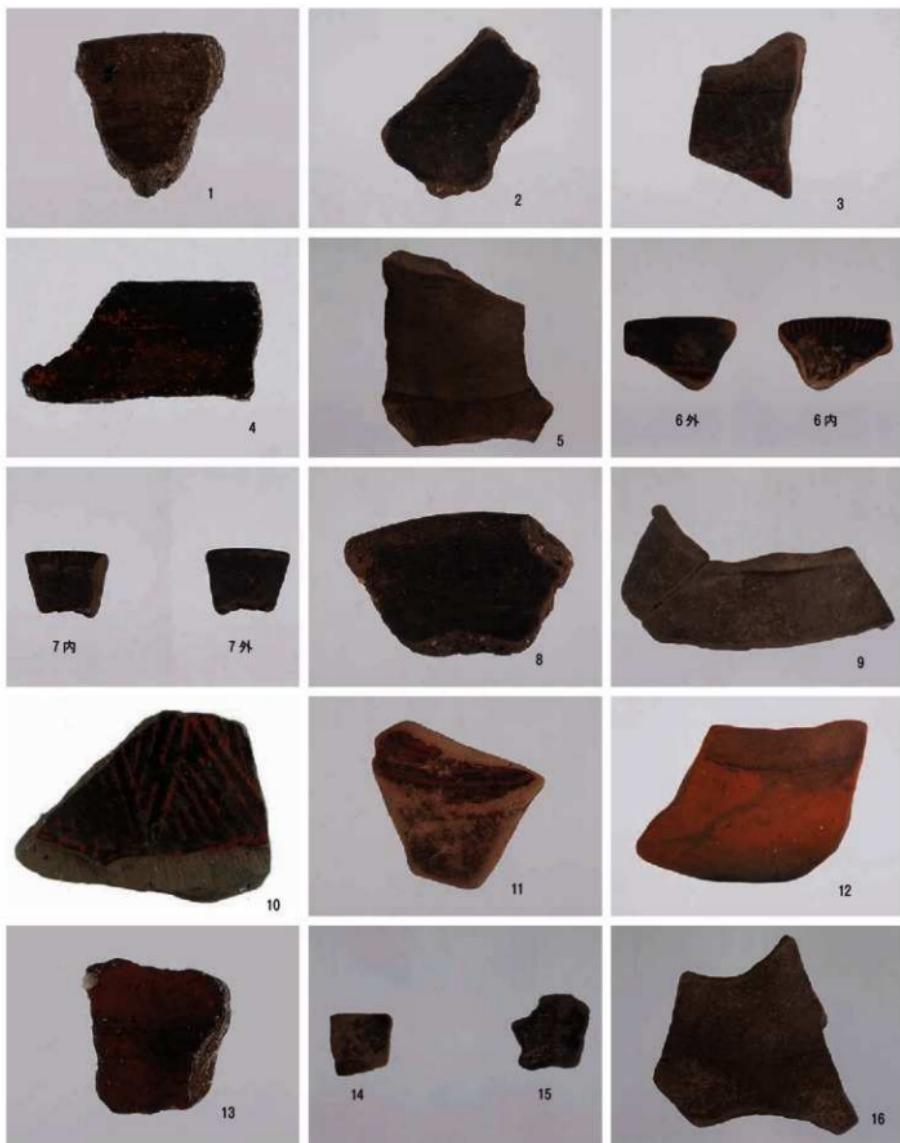
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1006集



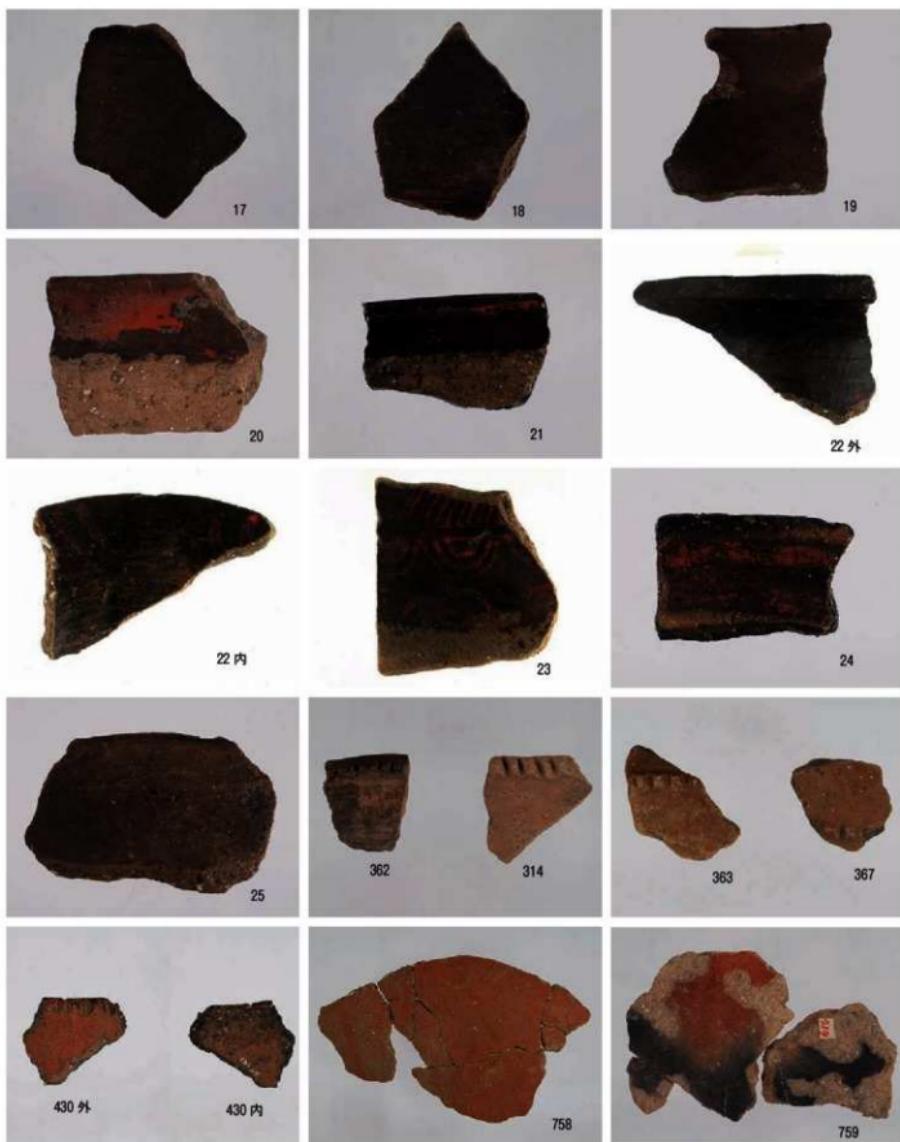
調査番号 1次 7723
2次 0344
遺跡略号 FSI-1, 2

2008

福岡市教育委員会



顏料分析遺物（1）



顏料分析遺物（2）

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な努めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、昭和52年度、平成15年度に実施した福重塙木遺跡第1次、第2次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として利用頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

凡　例

- 本書は福重稻木遺跡地内における開発に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助事業で実施した発掘調査の報告書である。
- 本書には昭和52年度の1次調査、平成15年度の2次調査を収録している。
- 1次調査は力武卓治が、2次調査は池田祐司が調査、報告を担当し、池田が編集にあたった。
- 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6°21'西偏する。
- 1次調査の構造、遺物の実測、製図、写真撮影は力武が行った。
2次調査の構造、遺物の実測、写真撮影は池田が、製図は山崎賀代子が行った。
- 2次調査出土彩文土器他の顔料分析を本市埋蔵文化財センターの北佐陽一郎が行い、その結果を37頁の表に示した。
- 国立歴史民俗博物館の藤尾慎一郎・遠部慎両氏により、2次調査出土土器に付着した炭化物について放射性炭素年代測定が実施され、その報告、論考を附編として掲載することができた。
また、出土炭化物の放射性炭素年代測定をパリノサーヴェイ株式会社、株式会社加速器分析研究所が行い、結果のみを91頁に示した。
- 土器の図でアミかけ部分は赤色顔料が施されていることを示す。
- 本書の作成にあたり上田保子、窪田慧、窪早苗、前田みゆき、安永令子の協力を得た。
- 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

1次

遺跡調査番号	7723	遺跡略号	FSI-1	分布地図番号	90(石丸)		
所在地	西区福重二丁目283-21、外		事前審査番号	77-13			
開発面積	1,889.90m ²	調査面積	31.35m ²				
調査期間	昭和52年11月9日～11月16日 771109～771116						

2次

遺跡調査番号	0344	遺跡略号	FSI-2	分布地図番号	90(石丸)		
所在地	西区福重四丁目283-6		事前審査番号	15-2-467			
開発面積	204.54m ²	調査面積	116m ²				
調査期間	平成15年9月24日～10月14日 030924～031014						

目 次

I. 福重稻木遺跡の立地	1
II. 1次調査の記録	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査組織	4
3. 調査の記録	4
1) 調査の概要	4
2) 層位	5
3) 檢出遺構	5
4) 出土遺物	7
5) 小結	23
III. 2次調査の記録	29
1. 調査に至る経緯	29
2. 調査組織	29
3. 調査の記録	29
1) 調査の概要	29
2) 層位	31
3) 檢出遺構	33
4) 出土遺物	35
5) 小結	90
附論 福岡市西区福重稻木遺跡・第2次調査出土の 弥生早期～前期土器に付着した炭化物の年代学的調査 (国立歴史民俗博物館研究部 篠尾慎一郎・遠部慎)	92

挿図目次

Fig.1 周辺の遺跡分布図 (1/25000)	1
Fig.2 福重稻木遺跡調査地点 (1/4000)	2
Fig.3 福重稻木遺跡調査区位置図 (1/800)	2
Fig.4 福重稻木遺跡と周辺のようす (昭和53年撮影 南西から)	3
Fig.5 分譲後の福重稻木遺跡 (昭和53年撮影 南から)	4
Fig.6 福重稻木遺跡 1次調査区位置図 (1/500)	4
Fig.7 調査開始風景 (昭和52年11月9日 東から)	5
Fig.8 発掘作業風景 (掘り下げ作業 東から)	5
Fig.9 杭列と土層 (東より)	6
Fig.10 1次調査平面図と土層図 (1/60)	6
Fig.11 I～Ⅲ層出土土器実測図1 (1/3)	7
Fig.12 I～Ⅲ層出土土器1 (1/2)	7
Fig.13 I～Ⅲ層出土土器実測図2 (1/3)	8
Fig.14 I～Ⅲ層出土土器2 (1/2)	8
Fig.15 I～Ⅲ層出土土器実測図3 (1/3)	9
Fig.16 I～Ⅲ層出土土器3 (1/2)	9
Fig.17 I～Ⅲ層出土土器実測図4 (1/3)	10
Fig.18 I～Ⅲ層出土土器4 (1/2)	10

Fig.19	I～III層出土土器実測図5 (1/3)	10
Fig.20	I～III層出土土器5 (1/2)	10
Fig.21	I～III層出土土器実測図6 (1/3)	11
Fig.22	I～III層出土土器6 (1/2)	11
Fig.23	I～III層出土土器実測図7 (1/3)	11
Fig.24	I～III層出土土器7 (1/2)	11
Fig.25	III層出土土器実測図1 (1/3)	12
Fig.26	III層出土土器1 (1/2)	12
Fig.27	III層出土土器実測図2 (1/3)	12
Fig.28	III層出土土器、土製品2	13
Fig.29	III層出土土器、土製品実測図3 (1/3)	13
Fig.30	III層出土石器実測図 (1/2)	13
Fig.31	III層出土石器 (1/2)	13
Fig.32	IV層出土土器実測図1 (1/3)	14
Fig.33	IV層出土土器1 (1/2)	14
Fig.34	IV層出土土器実測図2 (1/3)	15
Fig.35	IV層出土土器2 (1/2)	15
Fig.36	IV層出土土器実測図3 (1/3)	16
Fig.37	IV層出土土器3 (1/2)	17
Fig.38	IV層出土土器実測図4 (1/3)	18
Fig.39	IV層出土土器4 (1/2)	18
Fig.40	V層出土土器実測図1 (1/3)	19
Fig.41	V層出土土器1 (1/2)	20
Fig.42	V層出土土器実測図2 (1/3)	21
Fig.43	V層出土土器2 (1/2)	21
Fig.44	V層出土石器実測図 (1/1, 1/2)	22
Fig.45	V層出土石器 (1/1, 1/2)	23
Fig.46	2次、3次調査区全体図 (1/200)	30
Fig.47	土層図略	30
Fig.48	土層水平分布図 (1/200)	30
Fig.49	土層図 (1/80)	32
Fig.50	炭化物分布図 (1/40)	34
Fig.51	8、9層遺物出土状態 (1/40)	34
Fig.52	彩文土器実測図 (1/3)	36
Fig.53	3層出土土器実測図 (1/3)	38
Fig.54	4層出土土器実測図1 (1/3)	39
Fig.55	4層出土土器実測図2 (1/3)	40
Fig.56	5層出土土器実測図1 (1/3)	42
Fig.57	5層出土土器実測図2 (1/3)	43
Fig.58	5層出土土器実測図3 (1/3)	45
Fig.59	5層出土土器実測図4 (1/3)	47
Fig.60	5層出土土器実測図5 (1/3)	48
Fig.61	5層出土土器実測図6 (1/3)	49
Fig.62	6層出土土器実測図1 (1/3)	50
Fig.63	6層出土土器実測図2 (1/3)	51
Fig.64	6層出土土器実測図3 (1/3)	53
Fig.65	6層出土土器実測図4 (1/3)	54
Fig.66	6層出土土器実測図5 (1/3)	56
Fig.67	6層出土土器実測図6 (1/3)	57
Fig.68	6層出土土器実測図7 (1/3)	58
Fig.69	6層出土土器実測図8 (1/3)	60
Fig.70	6層出土土器実測図9 (1/3)	61
Fig.71	6層出土土器実測図10 (1/3)	62
Fig.72	6層出土土器実測図11 (1/3)	64
Fig.73	6層出土土器実測図12 (1/3)	65
Fig.74	6層出土土器実測図13 (1/3)	66
Fig.75	6層出土土器実測図14 (1/3)	67
Fig.76	7層出土土器実測図 (1/3)	67
Fig.77	8層出土土器実測図1 (1/3)	68
Fig.78	8層出土土器実測図2 (1/3)	69
Fig.79	8層出土土器実測図3 (1/3)	70
Fig.80	8層出土土器実測図4 (1/3)	71
Fig.81	8層出土土器実測図5 (1/3)	72
Fig.82	8層出土土器実測図6 (1/3)	73
Fig.83	8層出土土器実測図7 (1/3)	74
Fig.84	8層出土土器実測図8 (1/3)	75
Fig.85	8層出土土器実測図9 (1/3)	76
Fig.86	9層出土土器実測図1 (1/3)	77
Fig.87	9層出土土器実測図2 (1/3)	78
Fig.88	出土層位不明土器1 (1/3)	80
Fig.89	出土層位不明土器2 (1/3)	81
Fig.90	出土層位不明土器3 (1/3)	82
Fig.91	出土層位不明土器4 (1/3)	83
Fig.92	土製品実測図 (1/2)	84
Fig.93	石器実測図1 (1/2)	86
Fig.94	石器実測図2 (1/2)	87
Fig.95	石器実測図3 (3/4)	88
Fig.96	石器実測図4 (3/4)	89

I. 立地と環境

福重稻本遺跡は、早良平野西部の室見川と十郎川に挟まれた沖積扇状地上に立地する。周辺の標高3.5mから4.5m付近では、西から下山門敷町、石丸古川、拾六町平田、福重稻本遺跡が分布し、突帯文期から弥生時代等の遺構、遺物が確認されている。北側は後背湿地となり、特に名柄川から東では姪浜遺跡がのる砂丘上までは、独立丘陵上に位置する五島山古墳を除いて遺跡は確認されていない。

福重稻本遺跡の周辺は標高4m前後の水田が広がり、特に昭和50年代の埋め立て以降、旧地形を何うことが困難になっている。また試掘等の調査例が少なく詳細な遺跡分布、古環境の把握は進んでいない。西に近接する拾六町平田遺跡との境も便宜的なものである。拾六町平田遺跡第2次調査地点では地質、地形の検討が行われ（下山正一、磯望1993）、縄文時代前期・中期には海岸砂丘後背の塩性湿地で、縄文晩期頃は旧干潟の縁辺に位置し、弥生期までには陸化したとされる。福重稻本遺跡でも同様の状況が想定される。

福重稻本遺跡の本調査は4次を数え、3次調査については報告済みである（Fig.2）。今回報告する1次、2次調査地点は3次調査地点と近接する。1次調査では突帯文、弥生時代前期の土器、杭列等が出土し、3次調査でも同様の知見を得ている。2次調査地点は3次調査地点の西側に接し、河川より弥生前期を主体とした中期前半までの土器が出土し、河川の西岸では突帯文土器等が主に出土する包含層を確認した。第4次調査地点は遺跡の西端に位置し、拾六町平田遺跡第2次調査地点に近い。共同住宅建設に伴う調査で、突帯文から前期の土器が出土する浅い不整形の遺構を検出している。

福重稻本、拾六町平田遺跡は、わずかな微高地に集落が立地し、水田等の耕作地が広がると考えられるが、その実体については今後の調査に期待される。

拾六町平田遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第305集 1992：1次調査

拾六町平田遺跡2 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第349集 1993：2次調査

福重稻本遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第961集 2007：3次調査

十郎川 福岡市早良平野 石丸・吉川遺跡 住宅・都市整備公団 1982

下山正一・磯望 1993 「拾六町平田遺跡の周辺の地質と地形」『拾六町平田遺跡2』

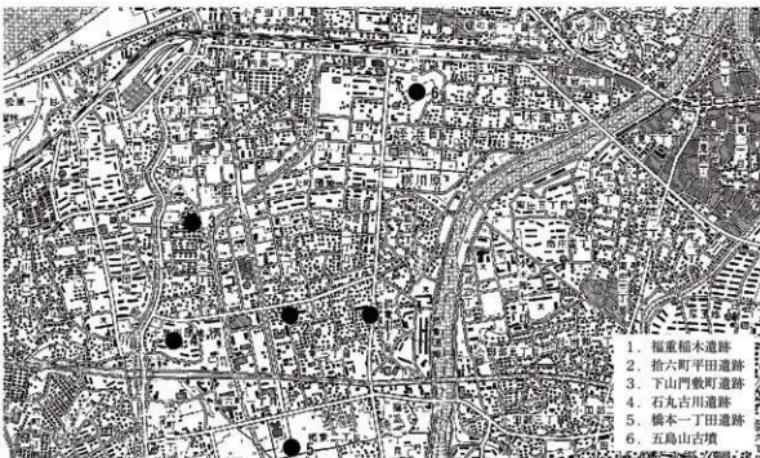


Fig. 1 周辺の遺跡分布図 (1/25000)

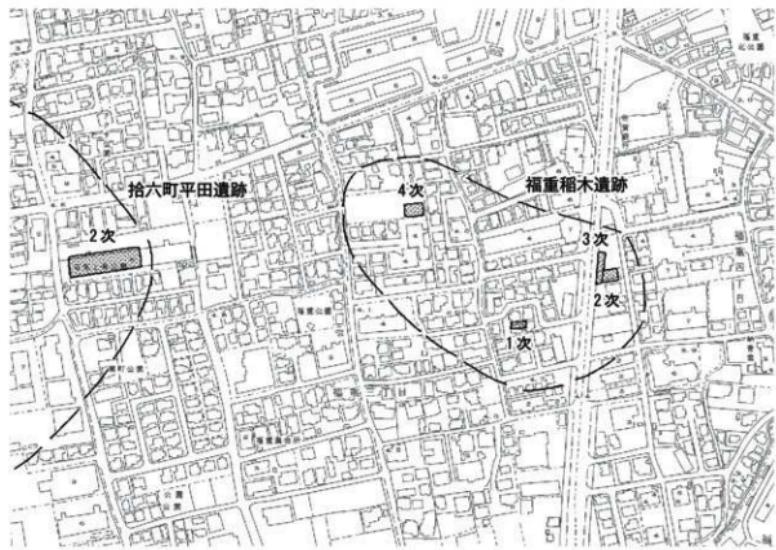


Fig. 2 福重稻木遺跡調査地点 (1/4000)

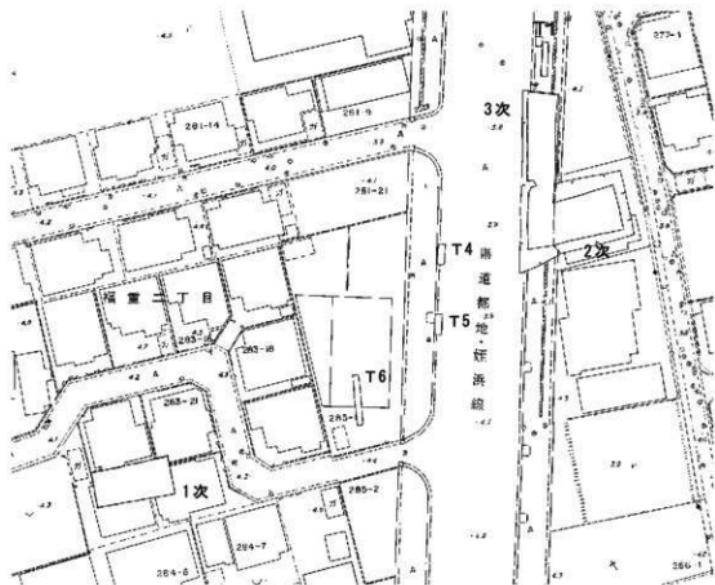


Fig. 3 福重稻木遺跡調査区位置図 (1/800)

III 1次調査の記録

1. 調査に至る経緯

1977年（昭和52年）5月27日付けで株式会社新栄住宅より西区大字福重字稻木283（現 西区福重二丁目283）の水田1,889.90m²について埋蔵文化財事前審査の申請が提出（受付番号77-18）された。申請地は、かつて早良平野の水田地帯であったが、202号線バイパスに近く、筑肥線姪浜駅に通じる県道にも面し交通至便であることから昭和40年代後半から大型団地や民間住宅地化しつつあった。加えて昭和50年には姪浜駅と博多駅を結ぶ市営地下鉄の建設が決定し、住宅地として一層賑わいを浴びていた。

地形的には、東側約400mに早良平野を北流してきた室見川が北東方向に屈曲し博多湾に注いでおり、その氾濫原、あるいは低湿地と予想され、実際に遺物の散布もなく、また周辺部での発掘調査例も皆無であった。しかし、それまで早良平野の低平地で調査した鶴町遺跡（昭和48年）や石丸古川遺跡（昭和51年）などでは、私たちの予想を覆して弥生時代開始期の土器や遣構が出土し、早良平野における水稻耕作が板付遺跡や那珂、比恵遺跡が所在する福岡平野と同様に早くから始まり、しかも早良平野の全面にわたって展開している可能性が出てきた。

文化課ではこのような経験を通して、それまでの遺物散布や地形などいわば表面的な判断に加え、昭和50年代からは可能な限り試掘を行い、土層資料の検討によって遺跡の範囲、時期、内容把握に努めるようにした。全市域における土層情報の蓄積は、遺跡保存や正確な開発事前審査に直結したが、遺跡分布図の市民への周知方法、あるいは開発者側への計画変更、費用負担などについてどのようにして理解や協力を求め、発掘調査を実施するかが次の大きな課題となった。

地表情報や調査例のない当該地においてもまず試掘によって判断することにし、申請者の同意を得て同年7月9日にパワーショベルでの試掘を実施した。梅雨時期のため水田は灌水しており困難な状況であったが、北西隅より時計回りにA～Cトレンチを設定し、土層観察と遺物採集を行った。各トレンチとも水田耕作土、床土の下部約40cmに2層とした黒褐色粘質土があり、この層（発掘調査ではⅢ～V層）から突窓文土器や板付式土器、須恵器などが混在して出土した。また対象地南西側のCトレンチでは、2層下の粗砂（本調査ではVI層）中に打ち込まれた杭を確認し、周辺部に弥生時代以降の集落や水田が広がっているものと推測した。開発計画によると、すぐにでも水田を埋め立て造成し、10区画を分譲するということから早急な調査着手を前提にして協議を重ねたが、建設計画と調査費用負担、調査期間確保などの調整がつかず、また文化課調査担当職員12人の調査計画も詰まっており即応が出来ない状況であった。11月4日にになってどうにか1週間以内の調査が決定した。



Fig. 4 福重稻木遺跡と周辺のようす（昭和53年撮影 南西から）

2. 調査組織

調査主体 福岡市教育委員会文化課
調査総括 文化課長 清水義彦
係長 三宅安吉
事前審査 塩屋勝利 柳沢一男
調査担当 飛高憲雄 力武卓治
調査作業 山下才一郎 持田久 百武謙治
百武勝博 米島ハツネ 清水文代
真鍋政江
整理作業 宮崎まり子 渡辺敦子

3. 調査の記録

1) 調査の概要

調査決定を受けて飛高、力武は、当時担当していた消防学校建設地の西区(現 早良区)清末遺跡の発掘を一時中断し、本遺跡の調査に11月9日より着手した。すでに造成と分譲区画工事が終わり、ガス管、水道敷設も完了していることから、全面調査は不可能であった。しかし厚さ1m以上の盛り土は、逆に遺跡を保存する結果となり、調査目的である水田、水利構造や土層観察などを果たすには、小範囲のトレーナー調査でも十分に成果を得ることが出来るものと判断した。そこで試掘時の杭を再検出してその延長部と遺跡の時期確認に調査目的を定めた。このため試掘Cトレーナー付近に東西方向 $3.3 \times 9.5\text{m}$ の発掘区を設けパワーショベルで盛り土を掘削した。翌11月10日より発掘作業員7名を導入し、まず発掘区南側(Sトレーナーと呼んだ)の一部を掘り下げて地層堆積状況を掴み、北側は各層位ごとに出土遺物をレベリングしながら慎重に掘り下げた。

この結果、突帯文土器や板付式土器、石器などコンテナ8箱の遺物が出土し、弥生時代前期と考えられるN-11°-E方向の2列の杭列を検出した。ほぼ所期の目的を果たせたことから、11月16日に埋め戻しを行い、11月18日に機材を清末遺跡に撤収し調査を完了した。



Fig. 5 分譲後の福重稻木遺跡(昭和53年撮影 南から)



Fig. 6 福重稻木遺跡1次調査区位置図(1/500)

2) 層位

厚さ1.3~1.5mの造成土を取り除くと水田面が現れた。水田面より下部は造成工事の影響ではなく、またほぼ水平に堆積し、水稻耕作開始以降の状況をよく留めているものと思われた。調査区北壁の土層を実測したが、同一土層による縦のわずかな変化はⅢ層-a、b、c、同じように横の変化はⅢ層-1、2、3のように区別して表記している。

Fig. 7 調査開始風景 (昭和52年11月9日 東から)

I層 下部の2層は水田床土と思われることから1層を造成前の水田耕作土と判断した。調査区西寄りで約1m幅で溝状に造成時に削平されている部分があるが、20cm前後の厚さではほぼ水平を保っている。 II層 水田床土で鉄分などが堅く縮まり黄褐色を呈している。 III層 暗茶褐色粘質土。試掘時の2層(黒褐色粘質土)の上部に当たる土層で、今回は上下にⅢ、Ⅳ層に分けた。Ⅲ層-aは発掘区の東側で見られ、植物根状に鉄分がある。乾燥すると約20cm幅で縦のクラックが入る。Ⅲ層-bはⅢ層の中でも特に遺物を多く含んでいる。なお杭列部の位置では白灰色がかった砂となる。Ⅲ層-cとⅢ層-dは発掘区西側部寄りにあり、Ⅲ層-cはより鉄分の沈殿が多い。Ⅲ層-dはⅢ層-aとほとんど大差ない。 IV層 (淡灰) 茶褐色土。幅約4cmで鉄分が草根状に密に入る。西側寄りで砂質土から粘質土に変化しておりⅣ層-1、2に分けた。 V層 灰色砂質土。IV層より漸移し明瞭な境はないが、鉄分が少ない部分をIV層との境とした。この層まで遺物が出土する。 VI層 砂層。中央部ほど粒子小さく、間に薄い植物層が水平に堆積している。この下部は次第に粗砂となる。さらに約1.5m下まで掘り下げたが変化はなく、泥炭層や礫層には達していない。



Fig. 8 発掘作業風景 (掘り下げ作業 東から)

3) 検出遺構

杭列 発掘区の東寄りのIV層で検出した。杭列は東西2列あり、東列の杭数は14本(東に90cm離れてもう1本ある)で南北端の長さは3.2m。西列の杭数は6本で長さは1.3mを測る。両列とも直線ではないが、おおよそN-11°-Eの方向である。両端がさらに南北方向に延びるのかは不明。杭の

多くは一部樹皮を残した割材で先端部は粗い削りで尖らせ、ほぼ直に打ち込んでいる。杭の平均長は、東列が19.4cm、西列が53.4cm。西列は長さ60cm前後の杭が5割を占めており、東列に比べて明らかに長い杭が使われている。一方東列は長さ20cm前後の杭が圧倒的に多い。両列の幅は約30cmで、挟まれた部分に地層的な変化はない。両杭の使用目的としては、水田の畦畔や農道の補強、溝や河川の護岸、さらには堰の構築などが想定出来るが、発掘区内では水田や流路を積極的に示すような遺構や土層堆積もないことから、使用目的を特定出来ない。時期についても本来の杭頭部の高さが分からず推測にすぎないが、先に西列が打ち埋没し、その後堆積が進んで地表が上がり東列が打ち込まれ、さらに近年になって堆積土の上部が耕地区画などの理由で削平された可能性もある。しかし列になっている事からするとやはりほぼ同時期の杭列と考えるべきだろう。杭列は突帯文土器や板付式土器を包含する土層(IV～V層)に打ち込まれており、またその頭部を覆う土層(III層)の出土遺物もほぼ同時期であることなどから、弥生時代前期後半頃と考えている。

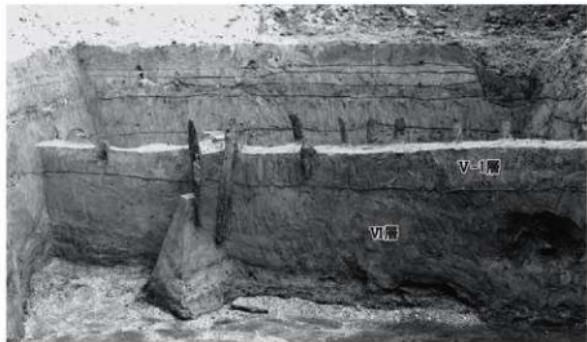


Fig. 9 杭列と土層（東より）

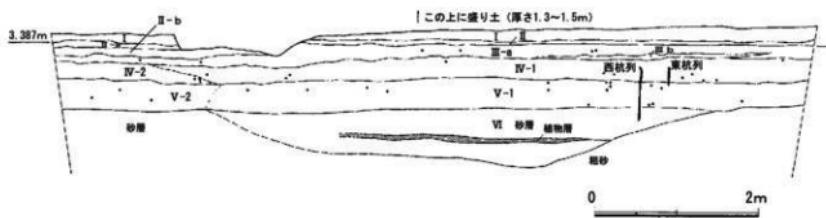
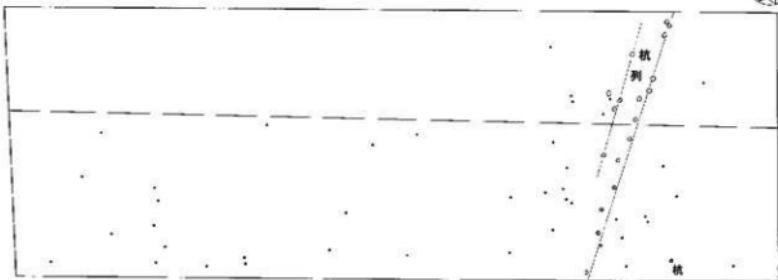


Fig. 10 1次調査平面図と土層図 (1/60)

4) 出土遺物

土器類154点、石器類5点を図示した。土器類のほとんどは細片になっているが、可能な限り実測に努めた。ただしあまりの小片のために傾きや径が不確かな土器もある。図示した石器以外にも黒曜石の剥片類が約75点出土したが、今回は、実測出来なかった。遺物実測図の挿図レイアウトは、土器類、石器類を土層ごとに分け、時期、器種の順に並べている。それぞれの形状、調整などの特徴については、観察表を作成したので本文では分類や器種のおおまかな記述に留めている。

I、II層と層位不明の遺物 発掘後に出土時の荷札やナンバリングにやや混乱し、出土層位が不明になった遺物があり、これにI、II層の耕作土と床土出土遺物を加えて先に一括報告する。

Fig.9、11は口縁部に粘土紐を貼り付けて刻み目を施したいわゆるに突帯文土器の甕。口縁部の傾きで外傾（Fig.11）、直立（Fig.13 1～9）、内傾（Fig.13 10～13）の3分類し、次に突帯の貼り

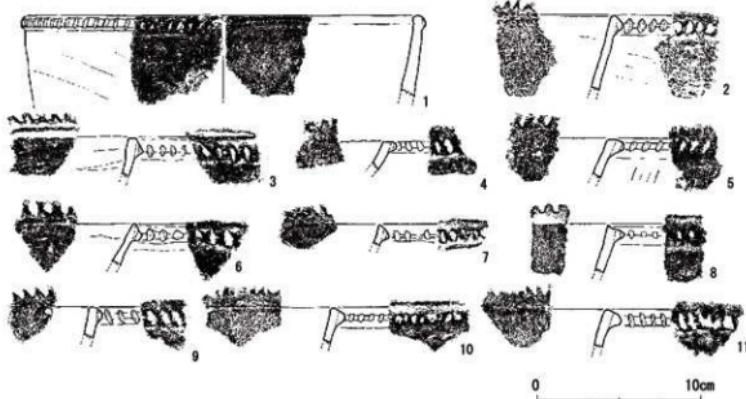


Fig. 11 I～III層出土土器実測図1 (1/3)

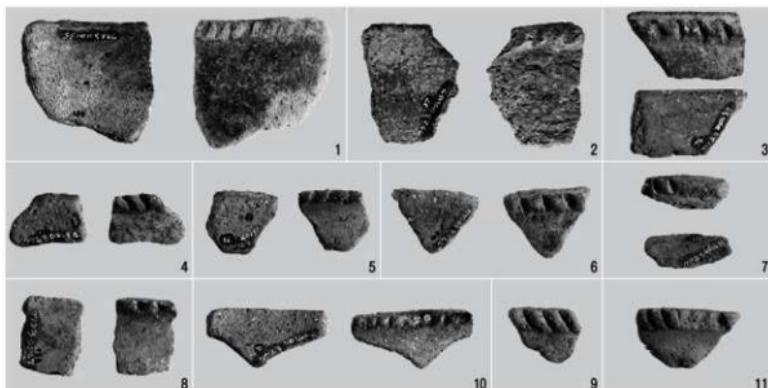


Fig. 12 I～III層出土土器1 (1/2)

付け位置とその断面形状によって、口縁外端より下方に貼り付けたもの、突帯上面が水平のもの、ほぼ接して貼り付けているが断面は下方に傾斜し、丸みがあるか三角形に尖っているものに小分類している。Fig.11の1～3は外傾する口縁部のわずかに下方に突帯を貼り付けており、その断面は丸く蒲鉾形（1は低く、2は高い）のものと三角形（3）の3様がある。4、5は外傾口縁で突帯は三角形であるがその上面は水平に近い。6～8は口縁に接した突帯は断面が三角形に尖っており、9～11は断面に丸みがある。

Fig.14の1～9は、甕の口縁部がほぼ直立し、突帯が口縁下方につく1～3と接してつく4～9がである。さらにその断面に上面が平坦（4～6）、三角形断面で上面が下傾する（7、8）がある。9は丸みのある突帯が口縁の上方に覆い被さるように盛り上がり、特徴的である。10～13は、口縁部が内

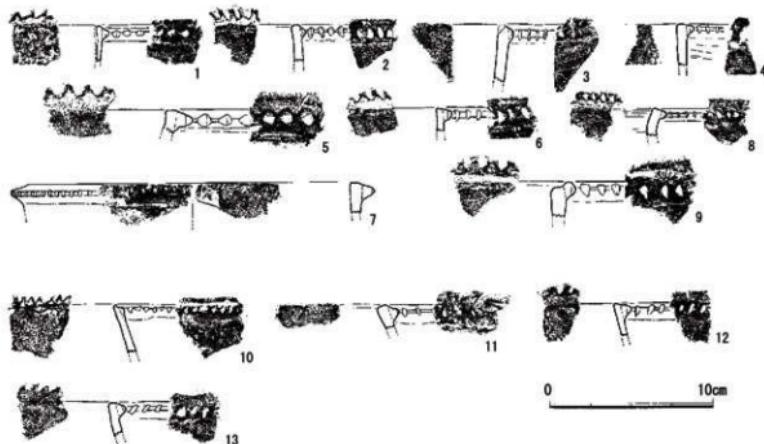


Fig. 13 I~III層出土土器実測図2 (1/3)

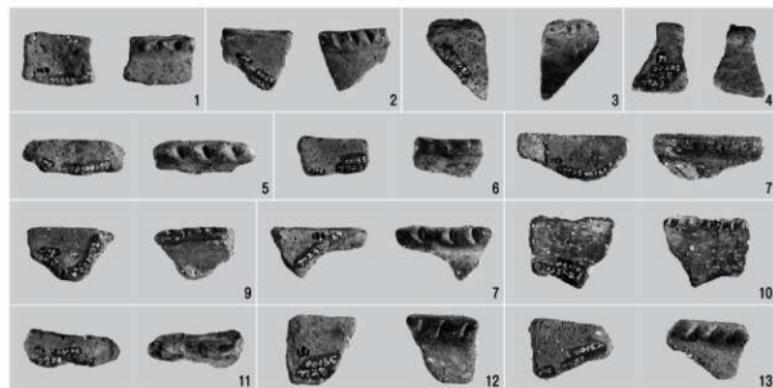


Fig. 14 I~III層出土土器2 (1/2)

傾しており、体部が屈曲するのである。10は器壁が薄く、口縁端が先細の作りである。

Fig.15は甕の口縁部が小さく外に湾曲した弥生時代前期板付式土器のいわゆる如意形の口縁部。口縁端部の断面には、丸みがある1~8と方形に近い9~17がある。また端部の刻み目は、ほとんどが中程から下端に施され、また切れ込みも弱く細いものが多い。11、12の外面には縱方向の細かなハケ目の調整痕が見られる。17は厚めの器壁で口縁部の外湾が弱くやや特異な器形となっている。

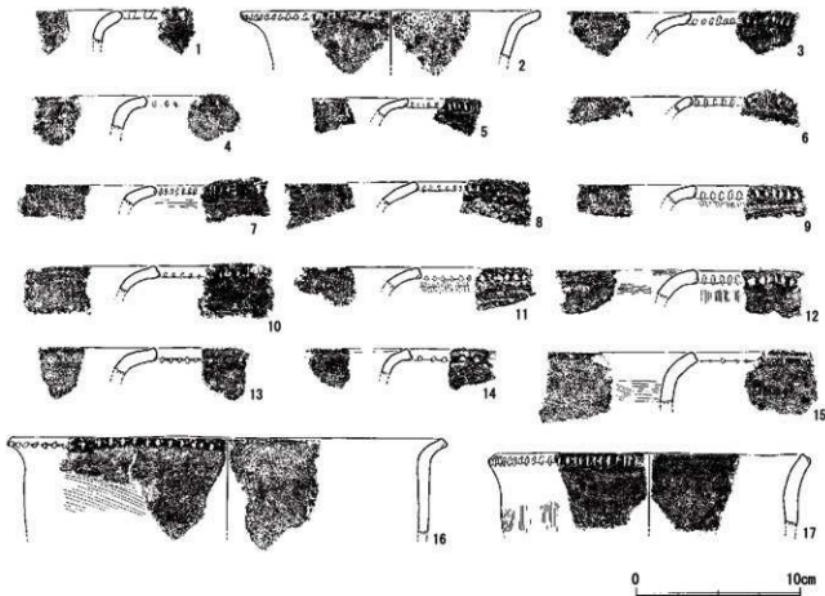


Fig. 15 I ~ III層出土土器実測図3 (1/3)

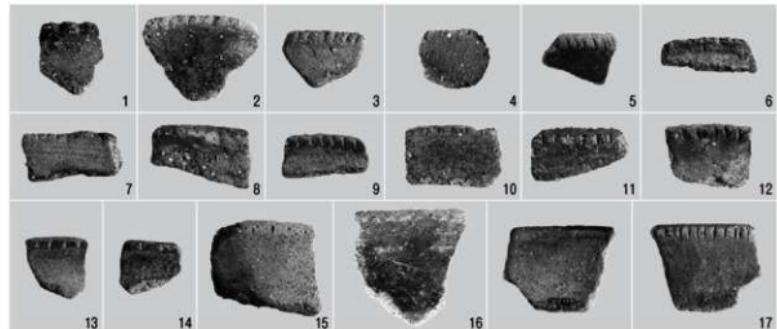


Fig. 16 I ~ III層出土土器3 (1/2)

Fig. 17は甕体部に貼付された突帯部の破片。その位置で屈曲する1と直線的な2～7の2様がある。突帯の断面には鉢形状に丸みのある1、2、三角形の3、台形の4～6があり、6以外は刻み目を入れている。1の上方は内傾し、他はわずかに外に開く口縁部となるのであろう。7の突帯上下には縱方向のハケ目調整で板付式土器後半の特徴を持つ。4の三角形突帯は背が高く、また刻み目も右方向から鋭利に加えている。

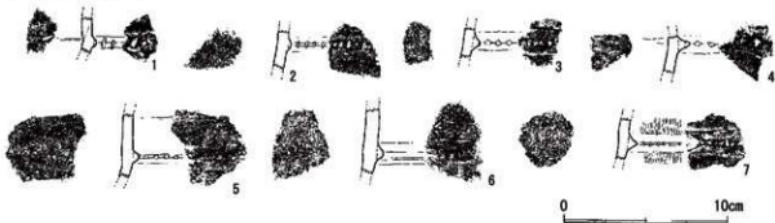


Fig. 17 I～III層出土土器実測図4 (1/3)

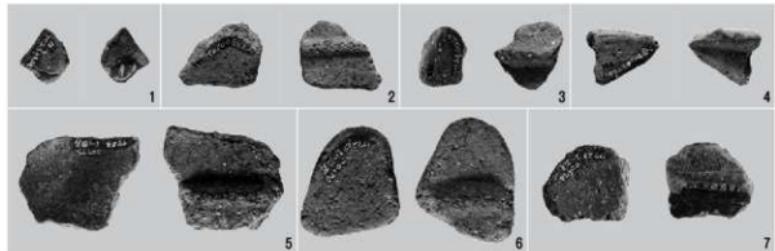


Fig. 18 I～III層出土土器4 (1/2)

Fig. 19は鉢と壺。I～III層の出土土器の器種は圧倒的に甕が占めており、図示した他の器種は鉢(1、2)と壺(3、4)の各2点にすぎない。1は破片であるがその湾曲から直径16.6cmの口縁部を復元した。口縁部は小さく外反しており、浅鉢の器形となるのであろう。器面は内外面とも丁寧な横ミガキを施し滑らかな器面となっている。2は鉢としたが、口縁上面がやや波打って傾きが確定しにくい。

口縁端部は外側に小さく折り曲げている。3は小さく外溝して先細の口縁部となる。4は壺胴部中位の文様帶で下方の区画線であろう。3本の沈線は整っているが平行線ではない。

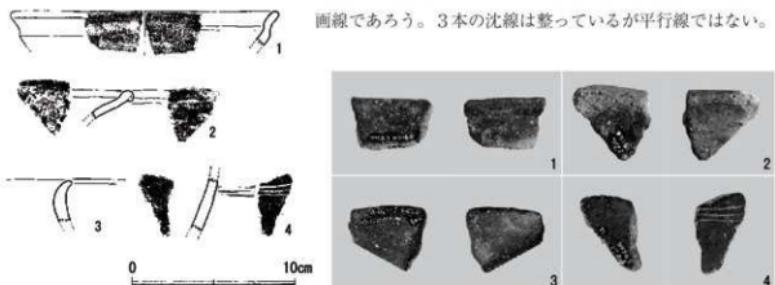


Fig. 19 I～III層出土土器実測図5 (1/3)

Fig. 20 I～III層出土土器5 (1/2)

Fig.21は底部で、1は底部外縁が外に丸く張り出す。2は張り出しが弱く、直に立つ厚みがある。これ以外は平坦な底部から体部へ直線的に延びている。探査した2、5、6、8の底部は粗いナデを加えている。小片のために甕、壺、鉢など器種を決めがたが、1～6を甕、他を壺の底部とした。9は底径12.5cmで中型の壺であろう。底部近くの外面は細かな継ハケ目でその上部はヘラ工具のナデ。

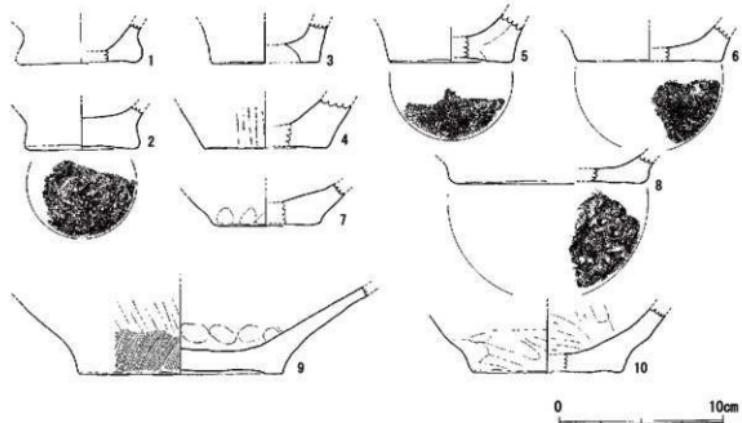


Fig. 21 I～III層出土土器実測図6 (1/3)



Fig. 23の4点は中世以降の遺物で、中国製陶磁器（1～3）と国産の土製鉢（4）。1、3は白磁、2は青磁。小片であるが本遺跡の変遷や周辺一帯の土地利用を知る上で重要である。

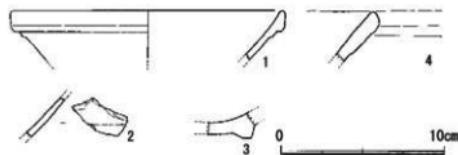


Fig. 23 I～III層出土土器実測図7 (1/3)

Fig. 22 I～III層出土土器6 (1/2)

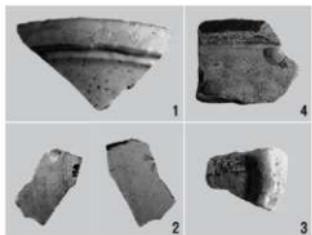


Fig. 24 I～III層出土土器7 (1/2)

Ⅲ層の遺物 Sトレーナーの土層観察を経て北側については床土下のⅢ層より各土層ごとに遺物を取り上げた。Ⅲ～V層とも土器は甕、壺と鉢の器種ごとに分け、時期順に記述する。

Fig.25は突帯文土器の甕口縁部と体部屈曲部。図示した口縁部は6点に過ぎないが、外傾するものが多い。突帯貼り付け位置やその断面は多様である。

Fig.27の1～4は板付式土器の甕。1の口縁部刻み目は上、下端に及んでいる。4は端部が丸く肥厚しているが刻み目はない。

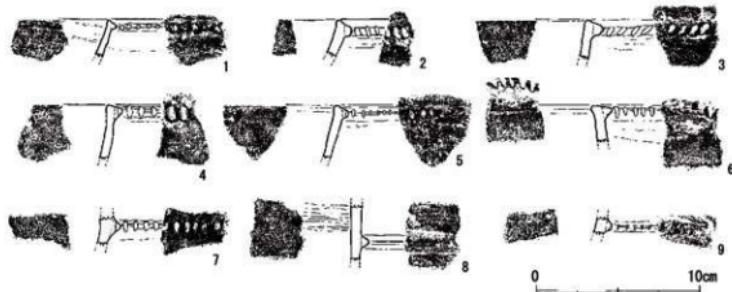


Fig. 25 Ⅲ層出土土器実測図 1 (1/3)



Fig. 26 Ⅲ層出土土器 1 (1/2)

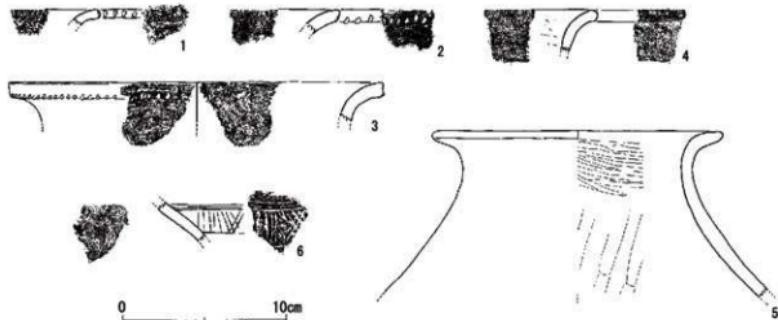


Fig. 27 Ⅲ層出土土器実測図 2 (1/3)

Fig.27の5、6は壺。5は強く内傾した頸部から同じ器壁の厚さのまで外湾する口縁部が付く。6は胴部上半部の上下に平行沈線で文様帶を区画し、その間に斜行線文を加えていが、整った文様ではない。

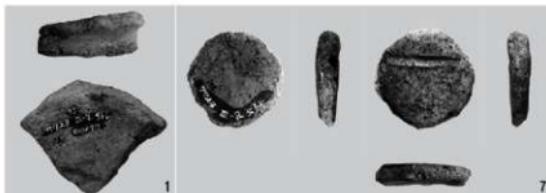


Fig. 28 Ⅲ層出土土器、土製品2

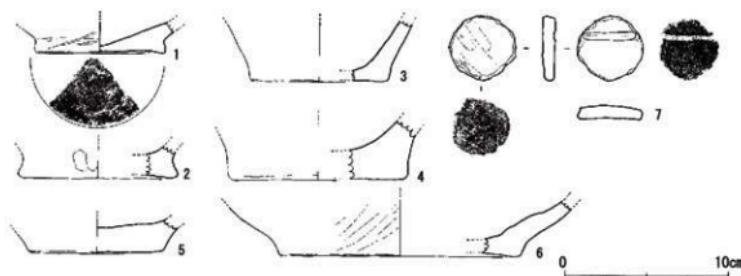


Fig. 29 Ⅲ層出土土器、土製品実測図3 (1/3)

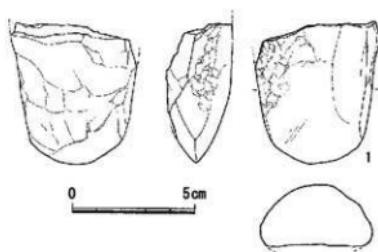


Fig. 30 Ⅲ層出土石器実測図 (1/2)

Fig. 29の1～6は底部。1、2は底部外縁が外に張り出している。1の体部への延び傾斜からすると鉢か。6の低径から中型壺の底部で、外底はわずかに上げ底となる。胴部は膨らみの大きい器形が推測出来る。7は土器破片を利用して円盤に加工している。破片の器種やその部位は、外面の沈線や器壁の湾曲方向などから壺の口縁部下方の沈線部破片と思われる。周縁部は特に研磨した様子はない。

Fig. 30の1は中位より折れて頭部を欠いているが、小振りの磨製石斧である。灰白色の玄武岩質の石材を用いている。身断面は厚みのある楕円形で、刃部は両面から研磨し、円形に整えた蛤刃状となっている。図左面は剥離しているが、他の面には敲打痕が認められる。折れ面も同じように風化が進んでいる。



Fig. 31 Ⅲ層出土石器 (1/2)

IV層の遺物 発掘区東寄りのⅢ層下で検出した2列の杭列は、IV層上部で頭部がある。大きめの破片や石器についてはⅢ層より出土位置と深さを記録しながら取り上げたが、IV層からの出土数が最も多く、破片も大きめである。しかし土器の器種構成や時期にⅢ層と大きな変化はない。

Fig.32は突帯文土器の甕。口縁部の傾きや突帯断面の形状などはⅢ層出土遺物の特徴に類似する。8は明らかな粘土紐の貼付はないが直立気味に延びた口縁部から如意形口縁と区別した。

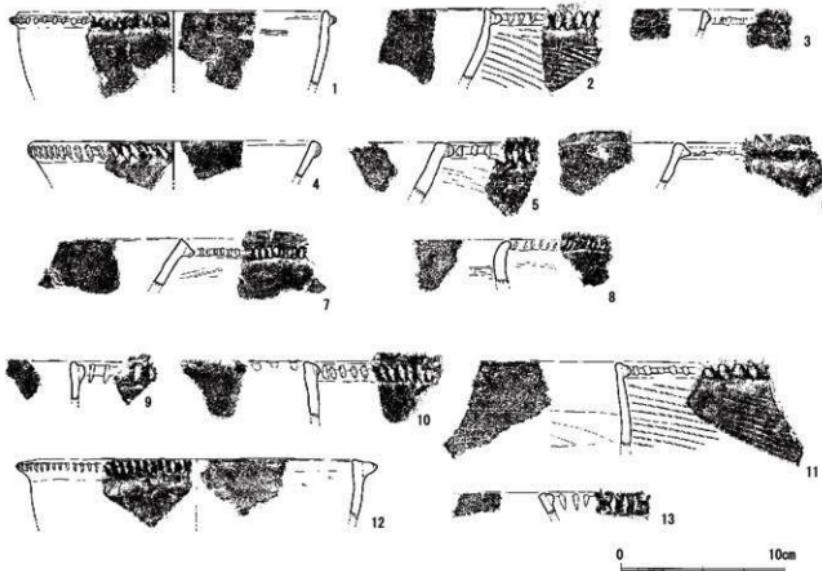


Fig. 32 IV層出土土器実測図 1 (1/3)

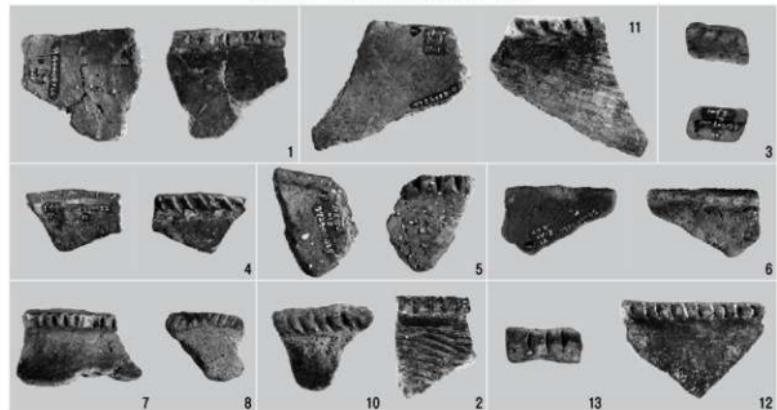


Fig. 33 IV層出土土器 1 (1/2)

Fig. 34は如意形口縁を持つ板付式土器の甕とその体部。口縁端部の刻み目は上端から下端までの全幅ではなく中程より下端にかけて加えたものが多い。端部断面には丸くおさめるもの、内端側をわずかに上方に突き出すもの、方形断面で横ナデで口唇状に近いものなど多様である。刻み目も大小、粗密ある。3、5、6の外面は細かな継ハケ目調整が施されている。ほとんどが口縁部近くまで煤が付着するか黒変している。9はやや大きめの甕で体部中位よりやや上方の破片。

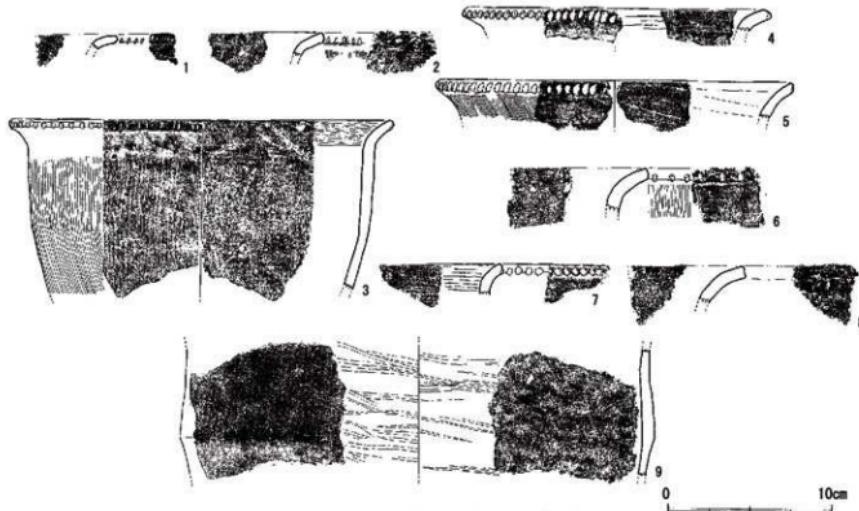


Fig. 34 IV層出土土器実測図 2 (1/3)

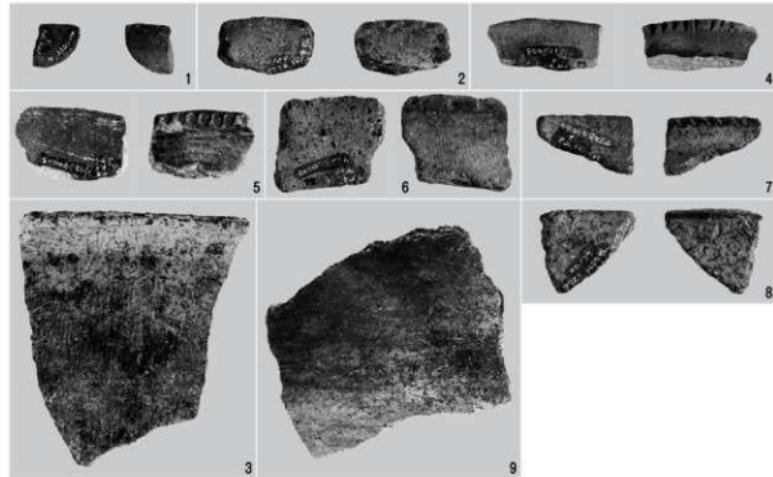


Fig. 35 IV層出土土器 2 (1/2)

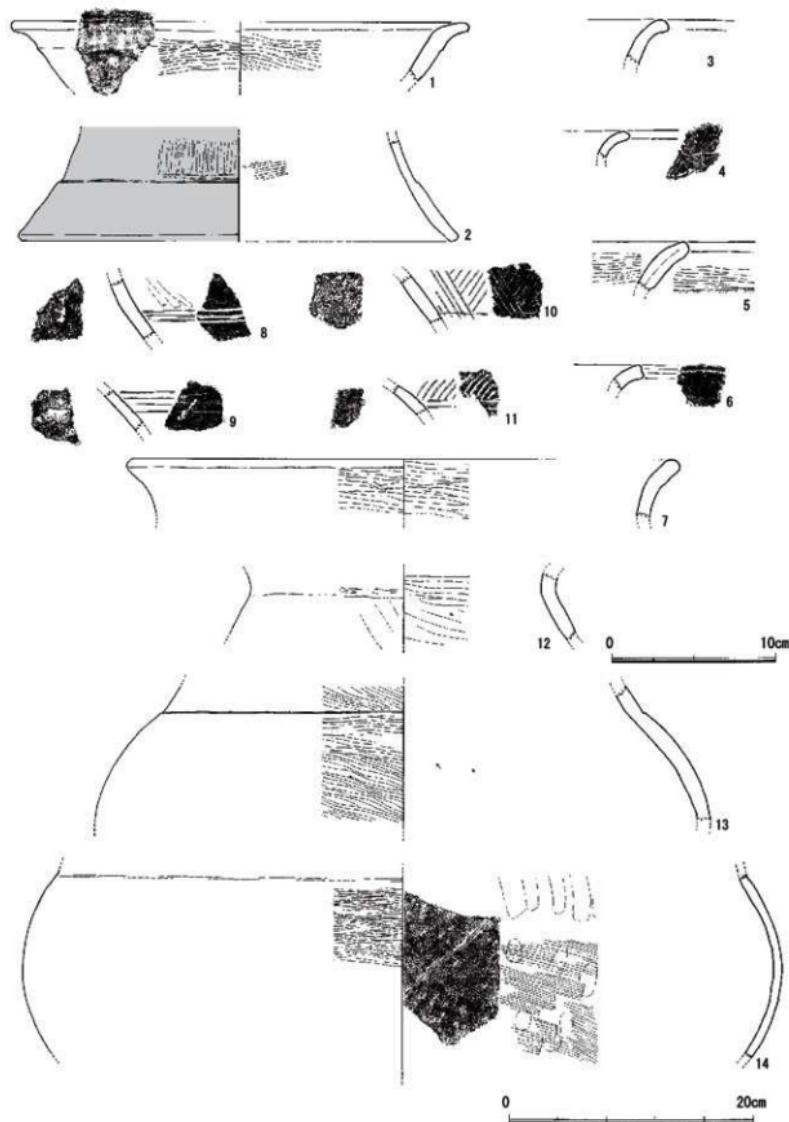


Fig. 36 IV層出土土器実測図3 (1/3、1/4)

Fig.36は鉢（1）、高坏（2）、壺（3～14）。1は厚めの器壁で内外面とも細かな横ミガキ。口縁湾曲部に鈍い稜がある。2は高坏の脚部。裾部近くで器壁が肥厚して直線的に開いている。外面は継ミガキで背の高い脚部となる。3～7は壺口縁部。5のみが頭部よりも厚く、接合部に境がある。5点ともその断面は壺と同じように丸くおさめるもの、面取り状に方形になるもの、口唇状になるものがある。8～11は壺の文様部破片。4点とも上下を沈線で区画し文様帯を作っているが、10、11は斜線文や羽状文で填めている。8、9は無文のままのようである。12～14は壺の頭部と胴部の破片。12

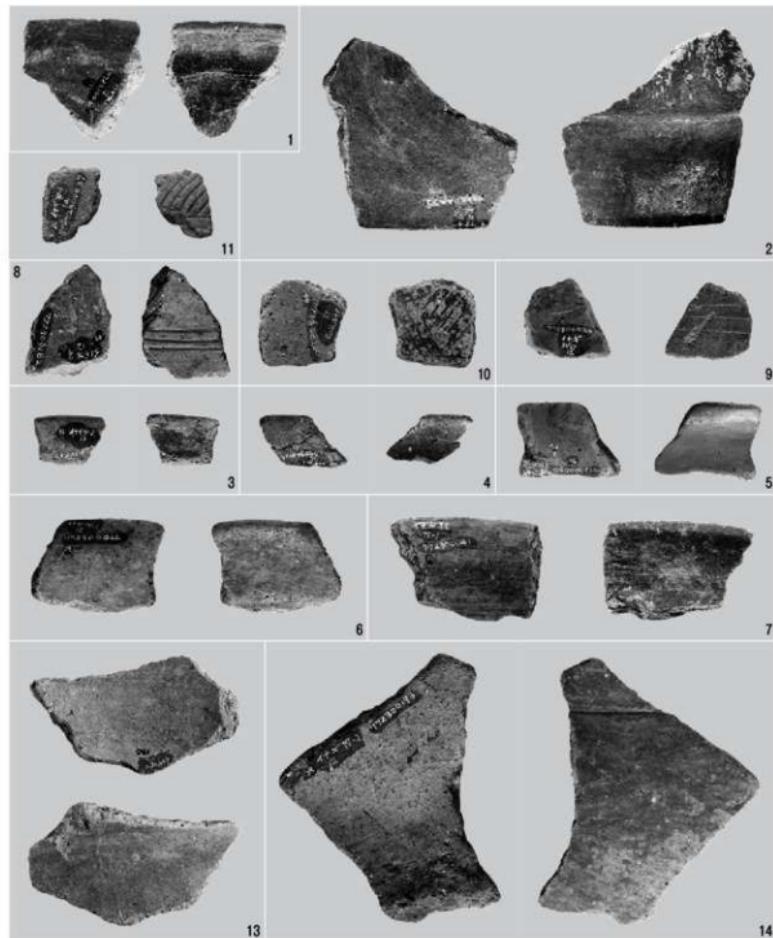


Fig. 37 IV層出土土器3 (1/2)

の頭部は強く内傾し、境を作らずそのまま外湾して口縁部となる。13の頭、胴部との境には沈線はないが、かすかな段が残っている。14は中型の壺で縮尺を1/4で図示した。胴部は球形に緩やかに湾曲しているが、頭部の径に対し胴部最大径が小さく張りが弱い。小片のために傾きが異なる可能性もあるが、頭部が短く口径が大きい鉢形の器形か。

Fig. 38は底部。1は分厚い作りで外縁部の張り出しが弱い。外底部はわずかに上げ底で粗い条痕が残る。2は精良土を用いており、内外面に施された丁寧な調整から鉢の底部とした。平底で外縁は丸く突き出している。3はハ字状の断面で粘土の接合が見られる。突堤文土器の底部。4～6は平底で外面に継ハケ目調整が残ることから板付式の壺。7～12は円盤状の底部ではないが、底部からの傾きや大きめの低径から壺であろう。8、9は立ち上がりが強く、球形ではなく最大径が上方にある長めの胴部となるのだろう。

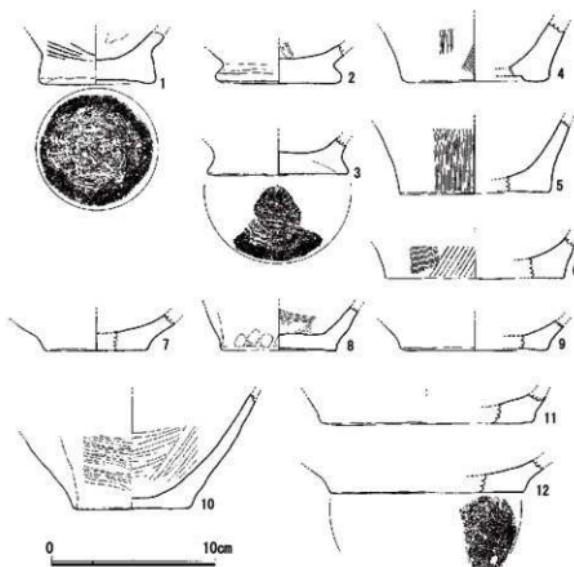


Fig. 38 IV層出土土器実測図4 (1/3)

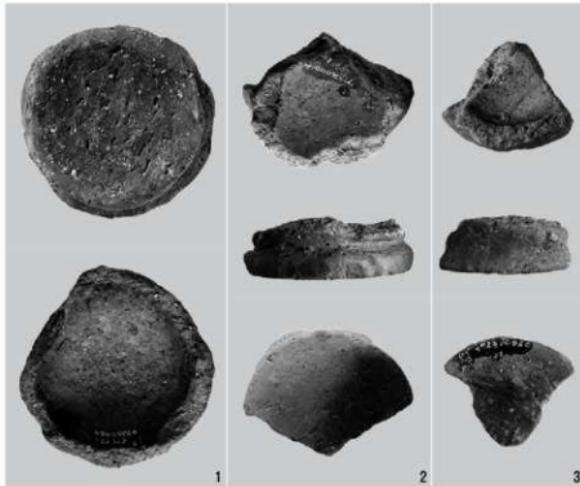


Fig. 39 IV層出土土器4 (1/2)

V層の遺物 遺物を包含しているのはこのV層までで、この下のVI層からの出土はない。器種には甕、壺、高杯、鉢がそろっているが出土数は少ない。また大部分が典型的な突帯文期の土器である。

Fig.40の1～9は突帯文土器の甕。口縁部は1～7が外傾、8は直立している。突帯は口縁に接し、口縁端部の断面が方形であることから平坦に近いものが多いが、1は口縁端部の断面が丸細くなっているために、段があるよう見える。刻み目の方向には、左、右、直と3様があり、いずれも突帯全

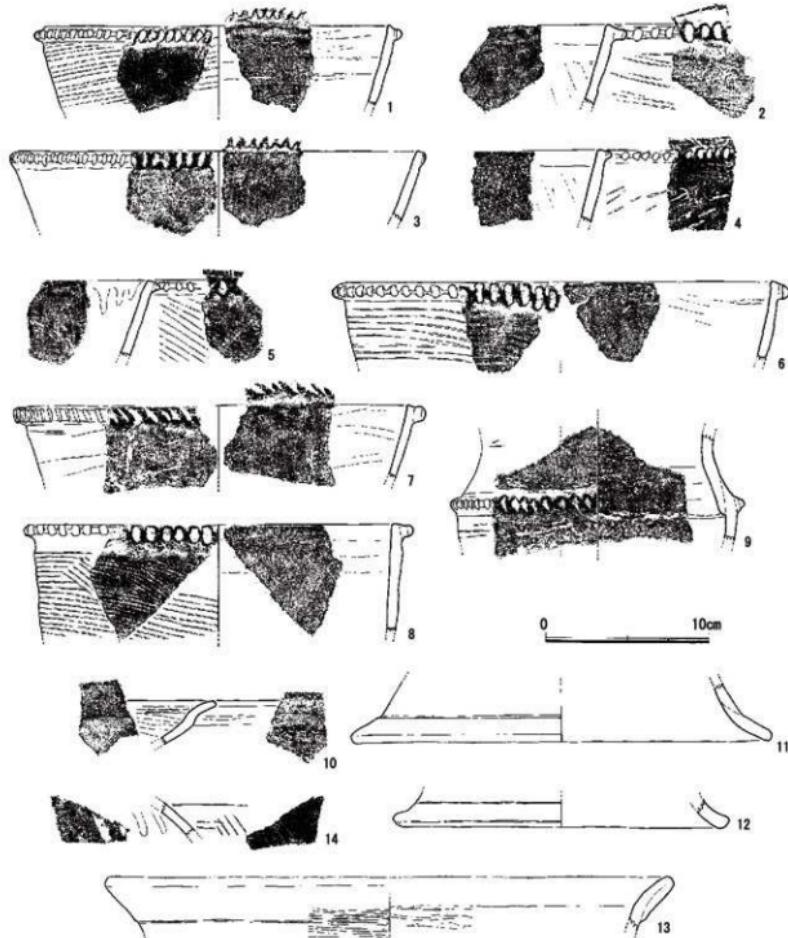


Fig. 40 V層出土土器実測図 1 (1/3)

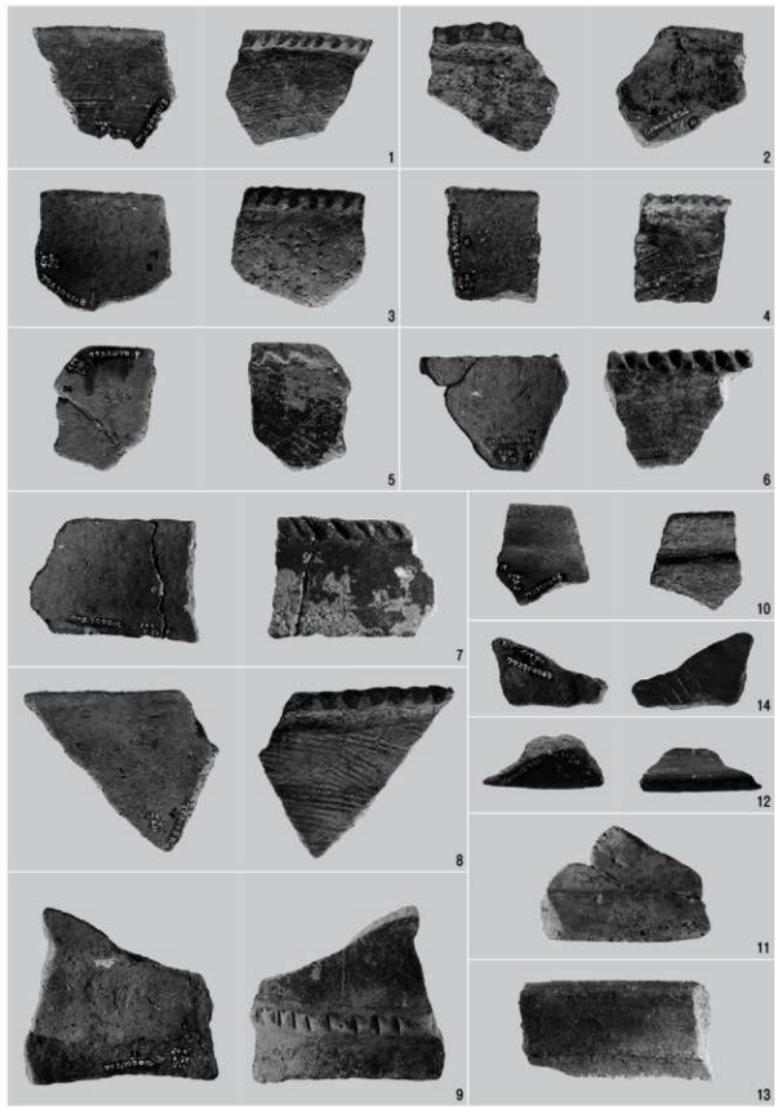


Fig. 41 V層出土土器 1 (1/2)

幅に大きく入れているのが特徴である。9は体部の屈曲部。粘土の貼り付け痕が明瞭である。10は鉢。器壁は薄く、内外面ともミガキで滑らかな器面となっている。屈曲部外面の稜は鈍い。11は壺口縁部とも考えたが、外面に沈線状の段があり、粘土接合がやや異なること、頸部への湾曲が直線的であることなどから高壺の脚部とした。12は高壺の脚端部。浅い沈線が残る。13は壺の口縁部、外側に粘土を貼り付けて厚みを増している。14は数本の沈線があることから壺の文様として図化した。ただ極細であり、不規則であることなどから確定できない。板付式の文様壺とするとV層ではこの14だけが後出の遺物となる。

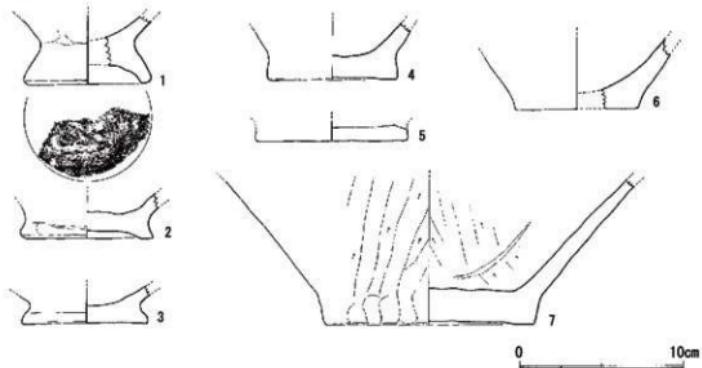


Fig. 42 V層出土土器実測図 2 (1/3)

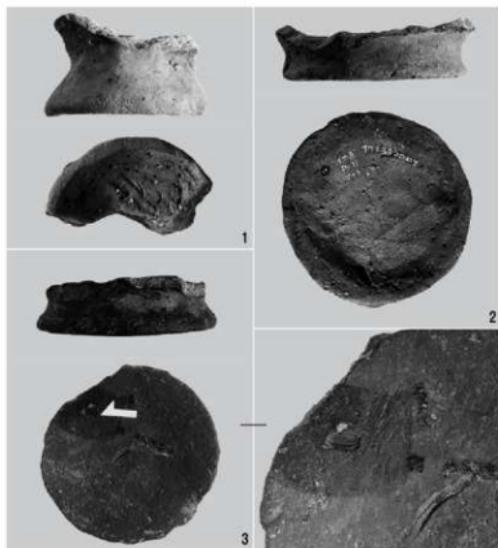


Fig. 43 V層出土土器 2 (1/2)

Fig. 42は底部。1、2は突帯文土器の壺底部で、外縁が外に張り出し、しかも上げ底のために断面がハ字形となる。3は平底で外縁は丸く突出している。器面は丁寧なミガキで黒色光沢があることから、鉢であろう。外底には一粒の稲糊圧痕（長さ6.1mm、幅4.1mm）が鮮やかに残っている。早良平野における突帯文期の稻作を示す好資料である。5は粘土接合面で剥離しているが元は円盤状の底部であろう。7は底径12.8cmあり、胴部へも直線的に延びていることから、張りのある肩部を持つ中型壺になるのであろう。底部外縁をヘラ状工具で押さえた後に、その上部をナデ上げ調整。

Fig. 44はV層出土の石器で、1～3は磨製石斧、4は石錐。1は玄武岩製で薄い灰白色。肝心な刃部を欠いているが、長さ16cm前後の撥形の形状だったのだろう。身中央部は厚さ3.2cmで扁平な梢円形断面である。全面に敲打痕が見られ、刃部だけを両面から研磨を加えている。刃部欠損部がやや風化し摩耗しているが、あるいは磨石などに再使用した可能性がある。2は硬質の玄武岩製で濃灰色。扁平な作りで、2の刃部はよく研磨され、今も鋭利さを保っている。3も小片だが同じ硬質の玄武岩製石斧。2と同じように刃先は始刀ではなく湾曲が弱い。4は黒曜石製で、三角形断面の石錐。

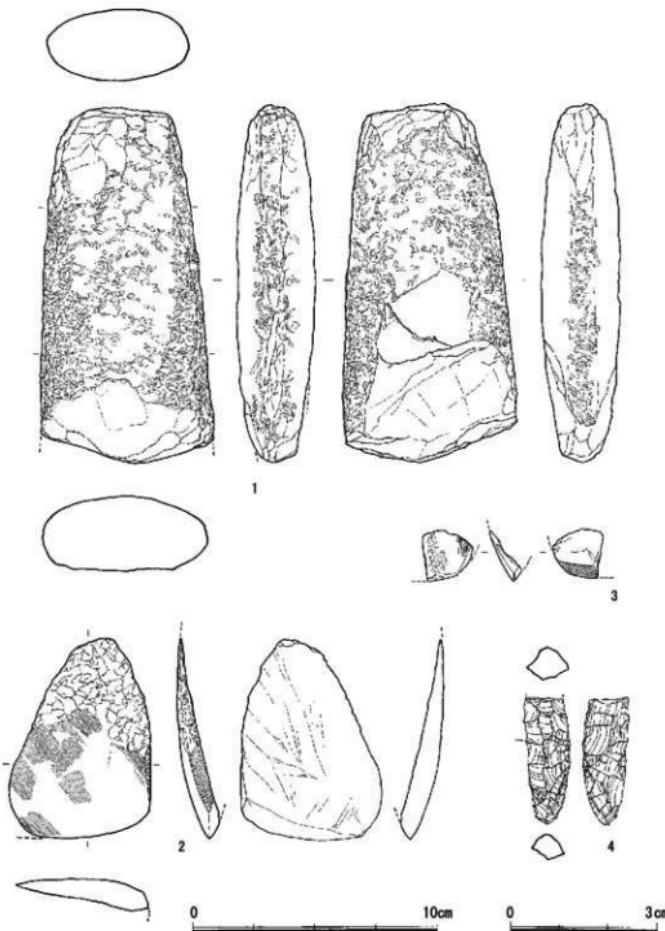


Fig. 44 V層出土石器実測図 (1/1, 1/2)

5) 小 結 事前審査の方法や体制の確立、整備を重要課題として必死に取り組んでいた頃の発掘調査とは言え、短期間、小面積の調査に終わったことは多くの問題を残した。この時の反省、教訓がその後の事前審査に役立ったことは言うまでもない。また小面積ながら早良平野における弥生時代開始期の状況を把握する成果を上げたことは、あらためて試掘の重要性を認識することになり、遺跡分布地図作製にも十分に反映することが出来た。決して忘れてはいけない記念碑的な調査だったからこそ報告書を急ぐ必要があったが、いつの間にか30年もの年月が過ぎ去った。その責を果たさなかつた調査担当として、大いに非難と叱声を受けるつもりでいる。



Fig. 45 V層出土石器 (1/1, 1/2)

福爾摩沙遺物調查表

問 題	選 択	正解		誤解		未回答	
		合 計	得 点	合 計	得 点	合 計	得 点
1	A	100	100	100	100	100	100
2	C	100	100	100	100	100	100
3	B	100	100	100	100	100	100
4	D	100	100	100	100	100	100
5	C	100	100	100	100	100	100
6	B	100	100	100	100	100	100
7	D	100	100	100	100	100	100
8	A	100	100	100	100	100	100
9	C	100	100	100	100	100	100
10	B	100	100	100	100	100	100
11	A	100	100	100	100	100	100
12	D	100	100	100	100	100	100
13	C	100	100	100	100	100	100
14	B	100	100	100	100	100	100
15	A	100	100	100	100	100	100
16	C	100	100	100	100	100	100
17	B	100	100	100	100	100	100
18	A	100	100	100	100	100	100
19	D	100	100	100	100	100	100
20	C	100	100	100	100	100	100
21	B	100	100	100	100	100	100
22	A	100	100	100	100	100	100
23	D	100	100	100	100	100	100
24	C	100	100	100	100	100	100
25	B	100	100	100	100	100	100
26	A	100	100	100	100	100	100
27	C	100	100	100	100	100	100
28	B	100	100	100	100	100	100
29	A	100	100	100	100	100	100
30	D	100	100	100	100	100	100
31	C	100	100	100	100	100	100
32	B	100	100	100	100	100	100
33	A	100	100	100	100	100	100
34	D	100	100	100	100	100	100
35	C	100	100	100	100	100	100
36	B	100	100	100	100	100	100
37	A	100	100	100	100	100	100
38	D	100	100	100	100	100	100
39	C	100	100	100	100	100	100
40	B	100	100	100	100	100	100
41	A	100	100	100	100	100	100
42	D	100	100	100	100	100	100
43	C	100	100	100	100	100	100
44	B	100	100	100	100	100	100
45	A	100	100	100	100	100	100
46	D	100	100	100	100	100	100
47	C	100	100	100	100	100	100
48	B	100	100	100	100	100	100
49	A	100	100	100	100	100	100
50	D	100	100	100	100	100	100

III. 2次調査の記録

1. 調査に至る経緯

平成15（2003）年8月18日付けで西久保幾代氏より福岡市教育委員会宛に福岡市西区福重4丁目283-6における、埋蔵文化財の有無について照会が提出された（事前審査番号15-2-467）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である福重稻木遺跡（分布地図番号90-0382・遺跡略号FSI）に隣接し、近年その範囲が拡大することが判明しつつあった。このため教育委員会では地権者の同意の上、平成15年8月27日に申請地の試掘調査を行い、現地表面から150~160cm掘削したところで縄文時代晚期から前期の遺物を多く含む包含層を確認した。

この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して埋蔵文化財が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建設予定である共同住宅の構造上、埋蔵文化財の破壊が避けられないため、申請地204.54m²のうち建物部分を対象として発掘調査を行うことで合意が成立した。なお「埋蔵文化財発掘調査費の国庫補助金適用要項」により、発掘調査・資料整理については国庫補助金で行った。

調査は平成15年9月24日から同10月14日で行った（調査番号0344）。調査面積は116m²で、対象地以外の84.54m²については現状保存することとした。

発掘調査にあたっては西久保幾代様をはじめ関係の皆様から、ご理解を頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査組織

事業主体 西久保幾代

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第1係長 力武卓治

調査担当 池田祐司

調査作業 阿比留忠義 有江笑子 井上八郎 上野道郎 海津宏子 金子由利子 下司照枝

指山歌子 柴田勝子 永島重俊 平井和子 広瀬梓 堀川ヒロ子 門司弘子

安河内史郎 吉川春美

3. 調査の記録

1) 調査の概要 (Fig.46)

調査対象地は建物解体後の更地で標高4mを測る。調査面までの深さは130cmほどで、湧水が予想されたため引きを取り、法面の傾斜を緩くする必要があった。このため調査対象地120m²のうち調査区上端で測る調査面積は116m²で、実際に遺物包含層を掘削できた面積は68.9m²である。

今回の調査で確認した主な遺構は、弥生時代前期を主体とし中期前半までの遺物が出土する河川SD01（5、6層）と刻目突帯文土器が出土する包含層（8、9層）である。調査区の西側の大部分が南北に流れる河川SD01で、東側は微高地となり、その緩斜面に8、9層が広がっている。調査は排土置き場の関係で、3層途中までは重機で全体を掘削し、その後手堀りで東半分を掘削し反転した。

また調査終了後には、東側に接する地点で道路拡幅に伴う3次調査を継続して実施した。調査としては一対のものである。3次調査では河川の護岸と考えられるしがらみ、弥生時代前期の遺物包含層

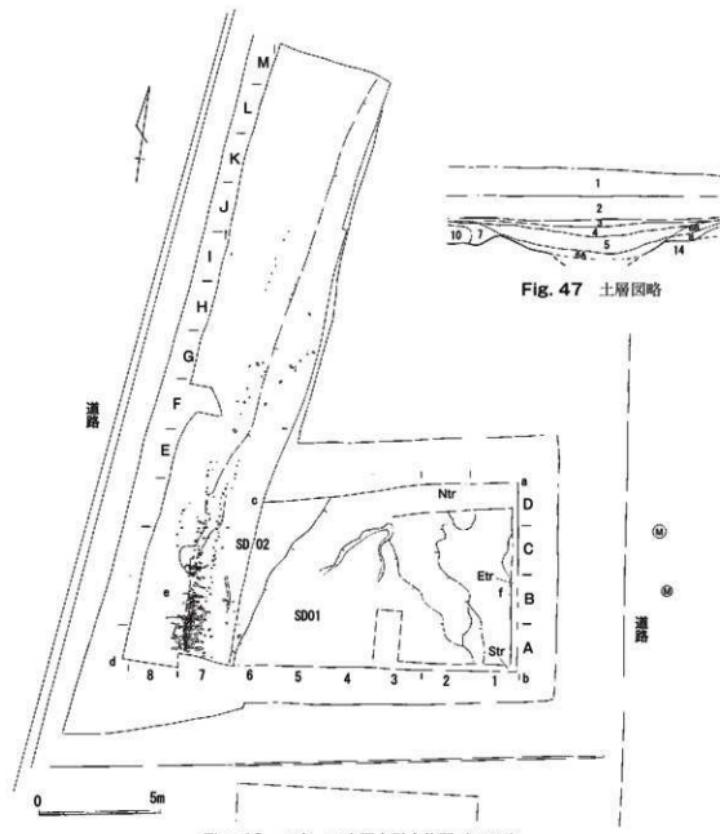


Fig. 46 2次、3次調査区全体図 (1/200)

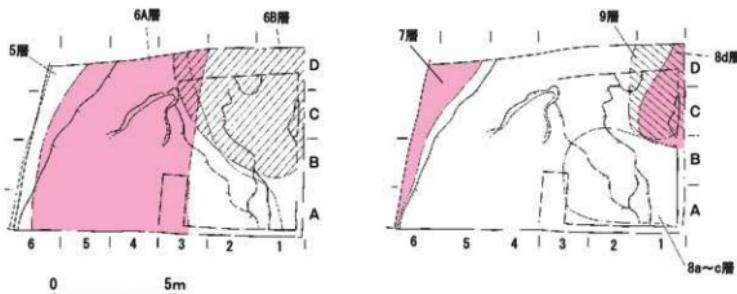


Fig. 48 土層水平分布図 (1/200)

とそれに打ち込まれた杭列を確認した。平成18年度に報告済みである。

2、3次調査ではFig.46のように共通した2mグリッドを使用している。また、調査開始時には東南北にトレンチを入れ、排水、層位の確認を行った。順にEtr、Ntr、Strと表記した。また、Bグリッドには土層観察、作業用のベルトを残し、最後に掘削した。以下の報告では、層位、遺構の説明を行った後、土器は出土層毎、土製品、石器は一括して示す。

2) 層位

Fig.49に調査区の東壁および、3次調査地点まで横断する南壁、中央ベルト、北壁、東壁の土層を示した。数字で示した土層の大別は南壁土層を基本とし、平面で可能な限り広がりを確認しながら掘削して、他の土層との対照を行った。層序の概念図と分布略図をFig.47、48に示した。

1層 表土、客土で、真砂土が60~70cmほど客土されている。

2層 2aは客土前の耕作土、2bは床土で標高3.5から3.6mの水田であったことが伺われる。2c、2dは時期は不明だが旧耕作土である。

3層 調査区全体に広がる灰褐色粘質土で、砂粒が混ざり下部はシルト質で、上部で粘質が強い。遺物は少なく弥生時代前期の土器が出土した。水田耕作土と考えられる。

4層 河川SD01が埋没した後に溜まった灰褐色粘土で粒子が細かくよく縮まる。河川が深い3から6グリッドに厚く堆積し、東西両端では薄い。BCD1グリッドから東およびG5グリッドから北では途切れる。出土遺物は弥生時代前期までのものを主体とし、3次調査で中期前半の遺物が少量、2次調査で須恵器が1点出土している。

5層 河川SD01の堆積で4、5グリッドに堆積の中心があり、南壁付近が最も厚い。北側のDグリッド、東西の3、6グリッドでは薄くなる。暗褐色粘質土で下部ほど粘質が弱く土器、有機物を多く含む。部分的に粗砂、暗褐色粘土等の間層に入る。出土遺物は弥生時代前期までの土器を主体とし、中期前半の土器を少量含む。

6層 大きく6A層群と6B層群に分かれ。6A層群は5層下の河川SD01下層の堆積で粗砂、粗砂混じりの暗褐色粘質土が互層となる。5~3グリッドを中心に堆積する。この層からは涌水が著しく、深くなるAB-4・5グリッドでは完掘できなかった。出土遺物は弥生時代前期までの土器を主体とし中期の土器を少量含む。6B層群はBCD1・2グリッドで8層との間に堆積する灰色砂質シルトでSD01の東岸になる。出土遺物は前期まででおさまる。

7層 河川SD02の堆積でABCD-7グリッドに粗砂、粘質土が細かな互層を成して堆積し、中央ベルト、南壁に現れる。5層はこの堆積にのる。6層との上下関係は不明確で、堆積物が類似しており同一とも考えられる。

8層 河川堆積の東岸の斜面から東端の緩斜面に堆積する包含層で8b層（黒褐色粘質土）、8c層（灰褐色粘質土）から多くの刻目突帯文土器が出土し、大型破片が多い。AB-1・2・3グリッドに分布の中⼼がある。Aグリッド南側では低い落ちがあり南壁土層には東端に一部しか表れていない。またCD1・2グリッドでは東壁土層のように北に向かって落ちる。ここに堆積する8d層はオリーブ色の粘質シルトで暗褐色系の8a、b、cとは異なるが、上下関係をはっきり捉えることができていない。また遺物は8b、cと比べて少ない。9層との間に部分的に薄く炭化物層が広がる。8d層は9層と一緒にとらえた方が良いのかも知れない。

9層 1・2-CDグリッドでは北側に向かって落ち、突帯文期の土器が出土する暗灰褐色粘質シルトが溜まる。8d層と一連のものか。最下部には部分的に炭化物の広がりが見られる。調査時は8a、b層より下層と考えていたが確認できていない。

2a 緑色をおびた暗褐色土(田耕作土)
2b 鮮青灰色土
2c 青灰色粘質シルト(田耕作土)
2d 黄色をおびた青灰色土(田床土)

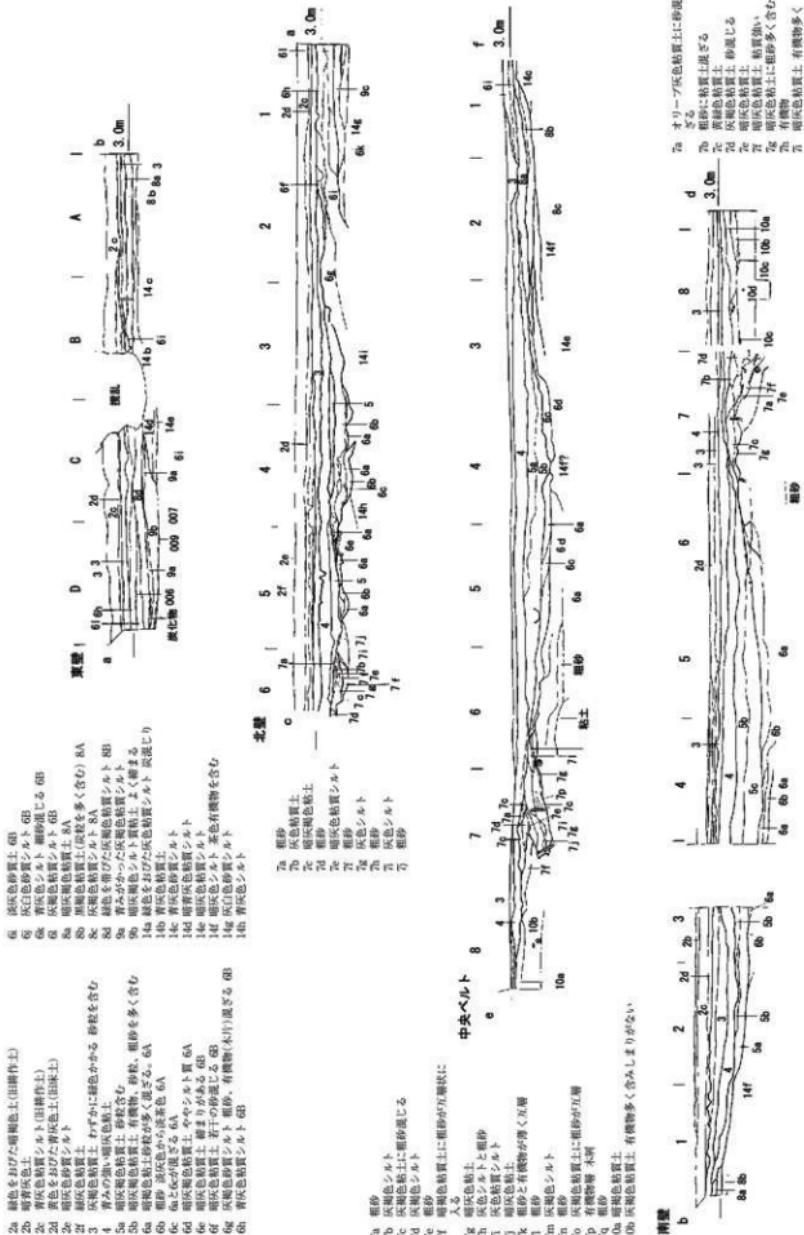


Fig. 49 土層図 (1/80)

10層 3次調査区に広がり、2次調査区内には及ばない。河川SD02の西岸となる。暗褐色粘質土で有機物を含み、弥生時代前期の土器が出土する。層位的には東岸の8層との上下関係は把握できないが、出土する土器は新しい。

14層 11層から13層は3次調査区内に見られるが2次調査区内では確認できていない。11、12層は粗砂と粘質土の互層または混土、13層は暗褐色粘土である。2次調査区内の9層より下の層を一括して14層とした。湧水、時間的制約で断片的に確認したのみでそれぞれの関係は明らかにできていない。東側の微高地では青灰色粘質シルトを主体とし、西側の河川堆積の下には粗砂が見られる。

以上の層位の概要を繰り返す。1層は近年の客土。2層は新田の耕作土。3、4層は調査区全体に広がる包含層で弥生時代中期までの土器を含む。5層、6層、7層は調査区中央を南北に継続する河川の堆積で弥生前期を主体とし中期までの土器を含む。8層、9層は河川の東岸に広がる土器包含層で突堤文土器が出土した。10層は河川の西岸を形成し主に弥生時代前期の土器を含む。

8層、9層は出土土器の比較から10層より古いと考えられる。しかし層名を土器の注記に使用しているため、そのまま用いた。

3) 検出遺構

確認した遺構は河川、杭列、炭化物の広がりである。また遺物包含層についてもここで触れたい。

(1) 河川 (Fig.46)

2次調査区の西側と3次調査区の東半に河川が南北方向に流れる。幅約8から9mを測り、東側斜面は緩やかである。大きく見ると一つだが、二つの流れの可能性がある。ほぼ3次調査部分にあたる7層が堆積する部分をSD02、2次調査区部分で5、6層が堆積する部分をSD01とした。また、河川の流れの方向は、平野の地形から北へ流れると考えられる。2次調査地点内では5、6層が南側へ低くなるが、部分的なものと考えている。SD02については3次調査の報告書で報告済みである。

SD01 2次調査地点西よりに流れの中心を持つ。A4・5グリッドの南壁部分では深さ80cmほど掘削したが湧水のため底は判然としなかった。北側のD-4グリッドで深さ40cmを測る。下層の6層は粗砂と粘質土の互層ある程度の流れが想定される。上層の5層は有機物を多く含む粘質土で、流れが緩やか、または滯水していた状況が考えられる。東側は6B層、西側は7層、14層の粗砂層を岸および底とする。遺物は弥生時代前期を中心とした中期までの土器が多く出土し、その他に土製円盤、石斧、黒曜石製石鏃等の石器が出土した。木等の有機物が出土したが製品となるものはない。概報告に石斧の柄としたものは誤りである。

(2) 杭 (Fig.51)

C1の9層上面で14本、A2、3の5層で2本の杭を検出した。いずれも径2から3cm弱と細く、先端の10cm前後が残存していた。時期は不明である。AB6では杭列を検出したが、3次調査の報告書で報告済みである。

(3) 炭化物の広がり (Fig.50)

西側微高地の斜面で6カ所で炭化物の広がりを検出した。いずれも薄く、厚さ1cmに満たない。人工的なものか不明で、焼けた面は観察できなかった。006、007、009は東壁土層に対応する。

004 B1・2 6B層上面 110×120cm 不整円形 C14測定2450±60BP

006 CD1 6b層中 46×68cm 100×90cmの範囲に途切れながら広がる

007 CD1 9層上面 30×200cmの帶状

009 CD1 9層下面 (14層青灰色シルト上面) 50×60cmの略楕円形 東側同レベルに広がりあり

010 A1・2 8B層下面 (14層上面 同上) 80×90cmの略方形

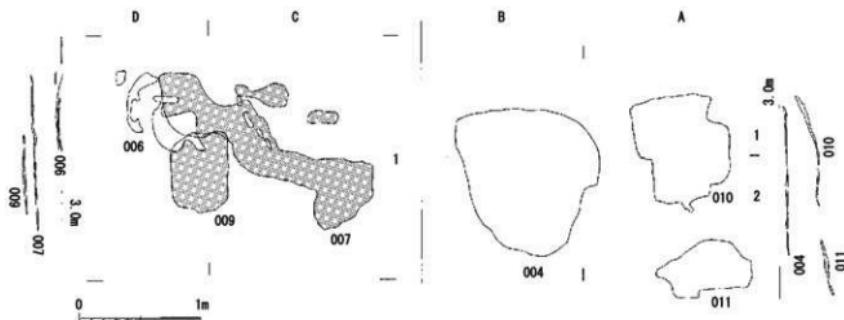


Fig. 50 炭化物分布図 (1/40)

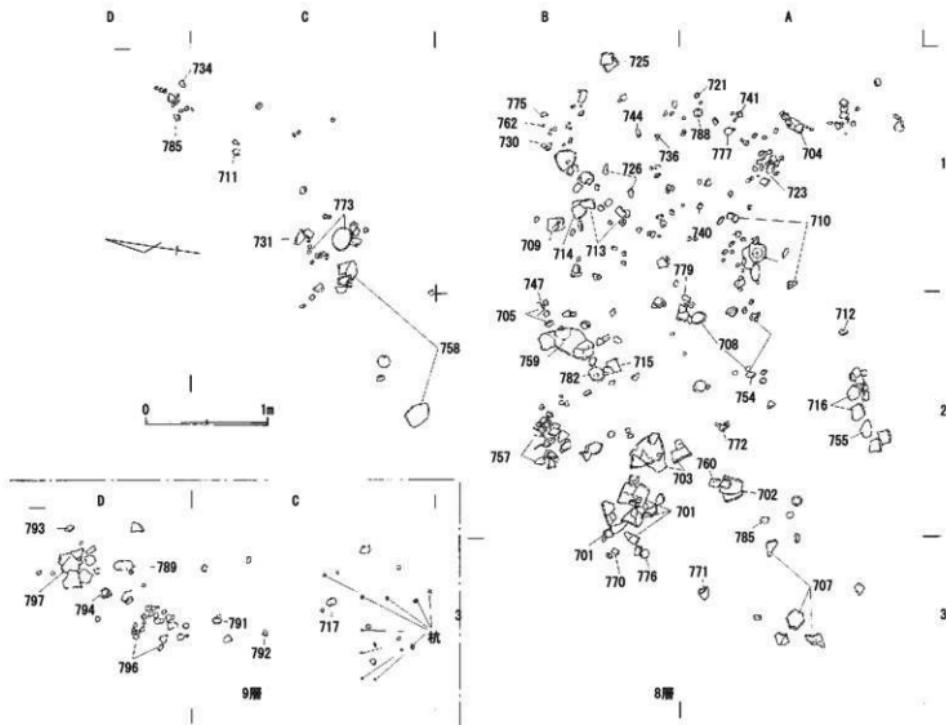


Fig. 51 8、9層遺物出土状態 (1/40)

011 A2 8B層下面（14層上面 同上） 40×70cmの不整形

（4）遺物包含層

包含層の掘削は3層途中から手掘りで行った。3、4、5層は土色がはっきりし、分層が比較的容易であった。4、5層の堆積が厚い部分では、下層との境に遺物が多い傾向がある。

6層は層序の項でA、B群に分けた。A群は河川の流れの堆積で、7、8、9層との境がはっきりせず、混じり込みもあると考えられる。6B層については後で位置づけを行ったため、5層への混入、8B、9層の遺物の混入の可能性がある。A、B層群は出土遺物の挿図で分けていないが、BCD1・2出土のものはほとんどがB群である。5、6層出土土器はほとんどが前期までのものが若干の中間土器が入る。中期の土器は全て4、5、6グリッドの河川の中心部から出土している。少なくとも6B層からの出土は見られない。

7層、10層は、その分布の大部分が3次調査の範囲である。特に10層は前期までの堆積と考えているが若干の中間の遺物がある。杭、しがらみ構築等に混ざる可能性も考慮に入れておきたい。

8層は8a～c層はAB1・2・3グリッドに分布する。炭を多く含む黒から灰褐色粘質土で周縁との区別が付きやすい。その出土状況はFig.51のように密集し、1個体がまとまった状態や、大型破片が目立つ。8d層はCD1・2に分布する。当初6B層との区別が付けづらく、結果として平面的に8a～b層との関係を把握できていない。レベル的に下がることから下位と考えていたが、東壁土層に見られるようにCDグリッドでは北に土層が下がり、搅乱もあって関係が不明確になっている。これは9層についても同様である。9層の遺物は8層ほどの密集はないが、少ない個体が比較的まとまった状態で出土している。14層は掘削した範囲では遺物は出土していない。

4) 出土遺物

出土した遺物は土器、土製品、石器で、土器が量的に多い。土器は出土した層毎に図示するが、河川堆積であること、掘削時の分層のぶれ等から混じり込みも多いと考えられる。土製品、石器、木器は一括して報告する。

（1）土器

口縁部はできるだけ図化を試みたが、5cm大以下の破片には未図化のものが多く残る。底部は1/4以上で内外面が残存するものはおおむね図化した。文様を施しているものでは水平沈線のみのものは図化していないものがある。異なる層出土の破片が接合したものは下位の層位に入れた。また、彩文土器等については図版組の関係上、最初に一括して掲載し37頁の表1に顔料の分析結果を示した。

遺物の配列は層毎に甕、壺、鉢、底部の順で、それぞれの器種のなかでは古手のものから示した。
彩文土器 (Fig.52、巻頭図版)

赤色顔料で文様を施す壺と、顔料がよく残る浅鉢等をあつめた。顔料は橙色が強い赤色を発するものが多い。器壁の胎土は砂粒が少なく緻密なものが大半を占める。1～25および赤味を滲びた土器について顔料分析を実施し、37頁の表に示した。ベンガラ、水銀朱が確認されている。

1は横ナデ調整の口縁部下に三本の線を施す。2は頸部と胴部の境に3本の併行沈線と胴部に弧状沈線を刻み、併行沈線中央の上端に沿って彩文がわずかに残る。上下の沈線縁にも若干の顔料が見られるが施文内容ははっきりしない。3は胴部に短い斜線と横線があり、有軸羽状文と考えられる。頸部との段にも若干の顔料が残る。4は器壁が薄く黒色を呈す浅鉢で、外面に橙色の顔料が残る。5は胴部上端に有軸羽状文を、頸部との段に横線を施す。口縁直下の頸部には2本の併行線を施すが痕跡のみが残る。6は茶色がかった黒塗りの器面で、頸部外面に平行横線3本、口縁部内面に短い縦線を密に施し、口唇部にも赤色顔料を施す。7は6と同様で、内面の縦線がやや密で細く短い。8は頸上

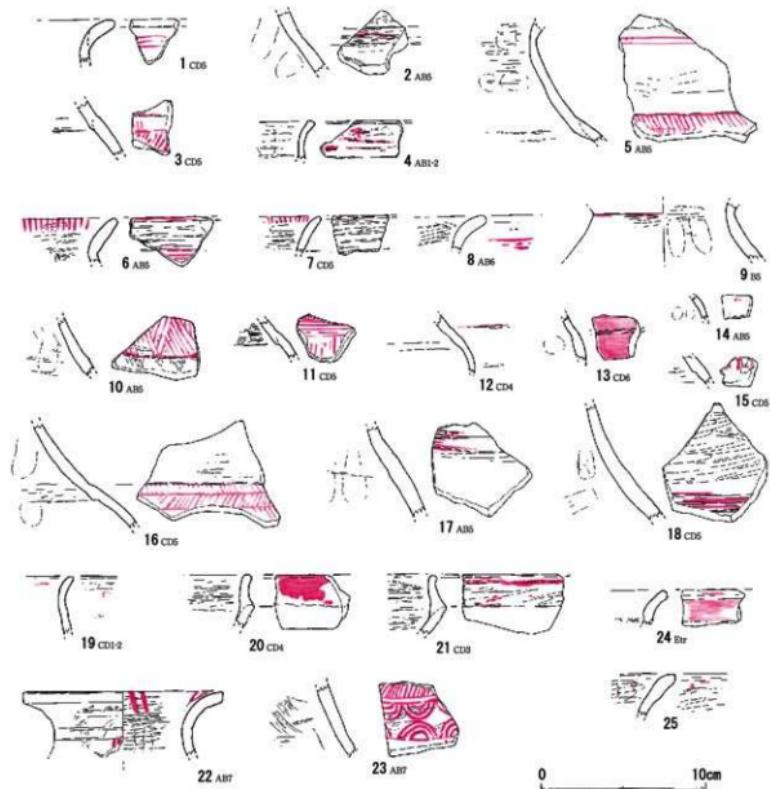


Fig. 52 彩文土器実測図 (1/3)

部に横線の痕跡が淡茶色を呈す。9は頭屈曲部にわずかに赤色顔料が残る。10は黒塗りの頭部に複合鋸歯文を施す。接合面には刷毛目が見られる。11は胴上部から頭部下部に6条の併行横線を施し、胴、頭部に縱線が見られる。内面には刷毛目が明瞭に残る。12は器面が荒れ詳細が不明だが、胴、頭部間の段に顔料がわずかに残る。文様は不明である。13は外面全体に顔料を塗り、胴、頭部間に細い横走沈線を施す。他の胴体と比べ胎土が粗い。14は胴上部外面の所々に若干の顔料が残る。併行斜線と横線と考えられるが不明確である。15は黒塗りの胴上部で薄く縱方向の線があり、綾杉文等と考えられる。9は頭部上端に1状の横線が見られる。16は灰褐色の胴上部に有軸羽状文を施す。17は胴上部に2条の細い沈線を施し、それぞれの上に薄く赤色顔料が見られる。幅広の横線に見えるが不明確である。胎土は他より粗めである。18は頭下部に3条の併行沈線を施し、それぞれの上に幅広の横線を彩文する。19は外面口縁下に斜線状に顔料が見られるが不明確。内面上部も薄く橙色がかり、内外面全体に顔料を施していた可能性もある。20、21は黒色研磨の屈曲部に橙色の顔料を厚く施す。体部は器

表1 顔料分析対策資料とその結果

分析装置と条件: 分析装置は、エキスパート一分散型熱電離子検出器 (EPI-マックス社製)、*Eagle*-a probeTM 探査子、モリブデン (Mo) 棒電極、半導体探査子、可変電圧: -20kV - 電流値: 130~300 pA、測定範囲濃度: 10⁻¹²~10⁻¹⁰ M、測定時間: 30min、測定周波数: 120Hz。

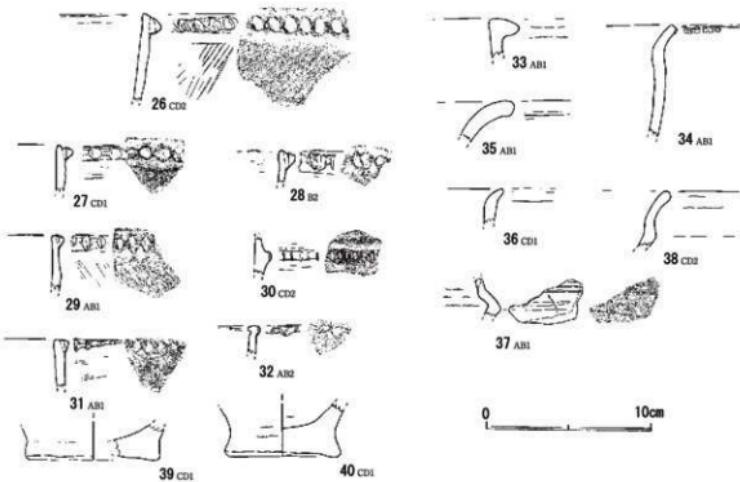


Fig. 53 3層出土土器実測図 (1/3)

壁表面が剥げている。22は頸部外面に併行横線を沈線で描き、その下に2本の斜線を彩文する。また口縁部内面にも2、3本単位で斜線を彩文する。器壁は黒色で粗い研磨調整である。23は研磨調整の頸部外面に、横線とその間に同心弧状文、斜線を描く。オレンジ色をおびた発色である。破片下端部は器面が荒れている。24、25は出土層不明である。24は屈曲部外面に薄いオレンジ色の顔料を施す。胎土に砂粒を含みやや粗い。小片で傾き不明確。25は外面口縁直下の一部が薄くオレンジ色に染まる。彩文が全面塗布か不明である。表1の314以下は、器面が通常のものと比較して赤い発色のものと、一部が赤いものである。化粧土の可能性も考慮したい。

3層出土土器 (Fig. 53)

26から40は3層出土である。26から32は刻目突帯文土器である。26外面には条痕調整、29、32には削り調整を施し、他はナデまたは器面が荒れる。32は内面に若干の張り出しを持ち、突帯は薄い。33は逆L字状を呈し、刻目状のくぼみがみられる。34は外反口縁の壺でナデ調整の外面に薄く煤が付着する。35は壺で器面は荒れ、胎土はオレンジ色を呈す。36は想定される径から鉢と考えられる。38は外反する鉢で口縁部が若干厚く、成形に鋭さはない。37は頸部に細い併行沈線を施し、体部屈曲部から上に細い斜方向の沈線が1本見られる。39、40は断面台形の壺の底部で若干の上げ底を呈す。

4層出土土器 (Fig. 54, 55)

41から92は4層出土である。41から61は刻目突帯文系土器で暗褐色を呈すものが多い。41、42、44は口唇部から若干下がった位置に突帯を貼付する。器面は削り状の調整の後にナデる。刻目はヘラ状の工具で41は上方向、42、44は横方向に施文する。41は1/6からの復元で口径20cmを測る。44は突帯貼付前の口縁部の横ナデが顕著である。43、45から53は口縁部に接して、もしくは被るようにして突帯を付す。43、45は外面に斜方向の条痕調整を施す。刻目は外面の調整具で横方向に施していると考えられる。46の突帯は棒状工具を押し当てる。47は口唇部の横ナデが顕著で刻目はヘラ状工具で横方向に施す。外面はナデ、内面には擦痕が見られる。48、49は刻目を右から左へ浅く施す。48外面には上

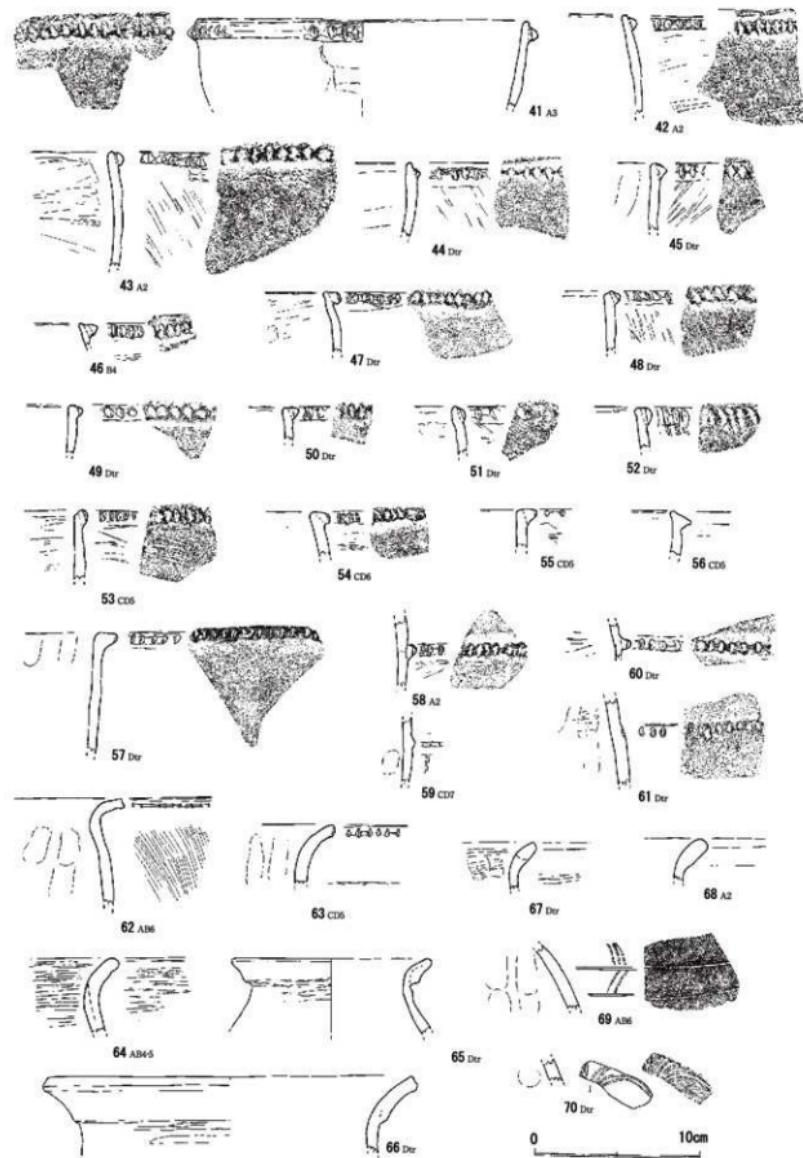


Fig. 54 4 层出土土器実測図 1 (1/3)

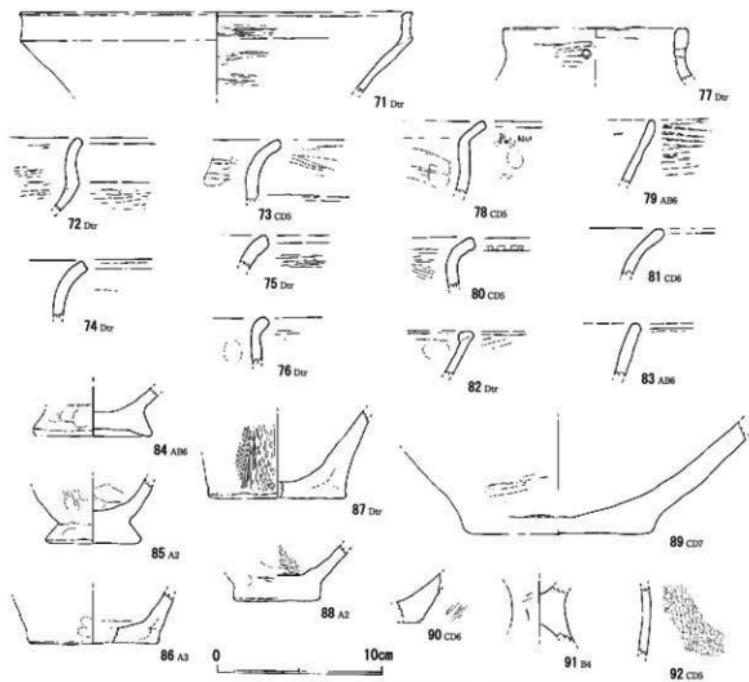


Fig. 55 4層出土土器実測図2 (1/3)

方向の削り痕が残る。50は器面が荒れ、刻目は上方向に施す。51は器壁が薄く、外面は浅い条状の痕跡が残り、内面は強い指おさえを施す。突帯は低い。52は棒状の工具で下方向に刻目を入れる。53は内面は擦痕、外面は削りの後ナデる。刻目は縦方向に施し深めである。54から57は口縁部上面に強い横ナデ調整を施し面を成す。器面は横ナデ調整で、刻目は浅い。56は刻目を施さず、器面は淡橙色を呈す。58から60は2条突帯の下段の部分である。60は屈曲を持つ古手だが、58、59は直線的な胴部である。刻目は58は縦方向、60は浅く横方向に施し、59は器面荒れで不明である。61は浅い段の下に刺突で小ぶりの列点を施す。外面は荒れ気味で内面に擦痕が残る。

62、63は外反口縁の壺である。62は強く外反し胴部は張ると考えられる。外面には荒い刷毛目、内面には強い指おさえが明瞭に残る。口縁内部縁から外面は煤ける。刻目は下端のみで小さい。63は口縁部下に段を持つタイプで外面はナデ、内面は指おさえを施す。

64から70は壺で淡橙から黄白色を呈す。64は横方向の研磨調整で外面に赤色顔料の痕跡が残る。65は1/4弱からの復元口径12cmを測る。口縁部は厚く肥厚し、外面のナデ調整は丁寧ではない。器壁に砂粒を多く含む。66は1/6からの復元口径20.8cmを測る。口縁部外面は肥厚し、端部は強いナデで面取りする。67は口縁部を厚くするが肥厚による段は見られない。68は器面荒れる。内面に赤色顔料の痕跡があり、内外面に施していたものと考えられる。口縁部外面は肥厚するが下端部は不明瞭であ

る。69は横方向の沈線間に二枚貝腹縁による斜線を施し、有軸羽状文を構成する。70は内外面とも丁寧なナデ調整で外面に弧条文を施す。

71から83は鉢等を集めた。71は浅鉢でやや深めの器形で屈曲部は鋭さはない。器面は荒れ気味で内面は研磨、外面は横方向の調整が見られる。77は1/6弱からの復元で口径10.7cmを測る。ナデ調整で器形は不明。焼成前の穿孔がある。72は屈曲する鉢で内外面に横方向の研磨調整を施す。73は内外面を丁寧な研磨調整で仕上げ、口縁外面を肥厚する。74、75は暗灰色を呈し、外面、口縁端に強い横ナデを施す。76は短く口縁を外反させ、器面は荒れるが外面に研磨調整が残る。78は外反口縁で口縁下に刷毛目、内面に擦痕が見られ、他はナデ調整である。80と共に壺の可能性がある。80は口縁下端に浅い刻目を施し、やや丁寧なナデ調整を施す。79はわずかに内湾するが直線的な器形で傾きははつきりしない。外面は暗茶褐色を呈し条痕、削りの後ナデ、内面は黒色を呈しナデ調整である。81は外反する口縁部で器面は荒れ、外面に研磨の痕跡が残る。82は内面に玉縁状の肥厚部を持つ。器面は荒れ、外面に擦痕が見られる。83は直線的な体部で、内面ナデ、外面は荒れる。傾きは不確かである。

84、85は突帯文壺の台形底で84の底面は若干の上げ底で深い削りの後にナデる。87、88は外反口縁壺の底部と考えられる。87には明瞭な刷毛目が残る。88は壺の円盤底で胎土は細かい。内面に削り調整が見られる。89は大形の壺で器面は荒れ、器壁には非常に多くの砂を含む。90は胴部下部に直線的に広がる器形を持ち、外面黒褐色、内面暗灰茶色を呈し研磨調整を施す。接合しないが他に胴部破片がある。中期のものと考えられる。

91は高坏の脚、坏接合部で径3.1cmと細い。92は須恵器片で内面はナデ、外面は格子叩きである。

5層出土土器 (Fig. 56~61)

95から148は刻目突帯文系の壺で灰茶色から暗茶褐色を呈す。95から97、99はわずかに口唇部から下がった位置に突帯を巡らす。削り状の調整の後にナデ調整を施し、刻目は95は上、96、97は横、99は下方向に施す。他は突帯を口唇部に接するか被る位置に貼付する。98は外面が剥げ、内面はナデ調整で刻目は深く狭い。100は外面削り状調整で刻目は下方向に施す。101、102はナデ調整で刻目は深く狭く下方向である。103は内面が剥げ、固い器壁で小さな突帯に小ぶりの突帯を下方向に密に施す。104は突帯が低い。105の突帯は高く刻目は深い。外面は条痕の後にナデを施す。106は外面に条痕が残り、暗褐色を呈す。107は右方向に刻目を施し、外面にはわずかに炭化物が付着する。108は外面削りの後にナデである。109の突帯は低く、器面は荒れる。110は外面に横方向の削り状の調整の後に縱方向に条痕状の調整を施す。刻目は丸みを帯びた断面で大きめである。111は外面に横方向の後、縱方向の条痕を施し、刻目は横方向で指による可能性がある。112は外面のほとんどが剥げる。口唇部には強い横ナデを施す。外面には横ナデ調整が見られ、煤により暗褐色を呈す。113は外面削り状調整で刻目は断面が丸みを帯びる。114は外面に斜方向の条痕が明瞭に残り、2mm弱の幅がある工具で下方向に刻目を施す。115は外面は薄く煤けて黒褐色を呈す。突帯は細く高く、刻目は正面から深く刻む。116は外面茶褐色で削り状の調整と突帯下には横ナデを施す。刻目は浅く丸みをおびる。117は淡黄褐色を呈し深い刻目を斜方向に施す。111、116、117には外面に煤が若干見られる。118は外面削りで幅広の突帯に深い刻目を施す。119は横方向のナデを施す。120は内面に張り出しを持つ。122は浅い削り調整で、刻目は深く横方向に施す。121は器面が荒れ淡黄褐色を呈す。123は器面荒れのためでもあるが突帯が低い。125から135は口唇部と突帯上面と一緒に強い横ナデを施す。外面は横方向のナデ調整である。125、127、130、133、135は暗褐色を呈し、他は黄褐色系を呈す。125は1/5からの復元口径17cmを測る。突帯は1cmと高く、断面、接合痕から通常の突帯の上に継ぎ足したことが伺える。外面は茶褐色を呈し、ナデ調整で若干の煤が残る。126は内面に若干の張り出し、削り調整を荒いナデ

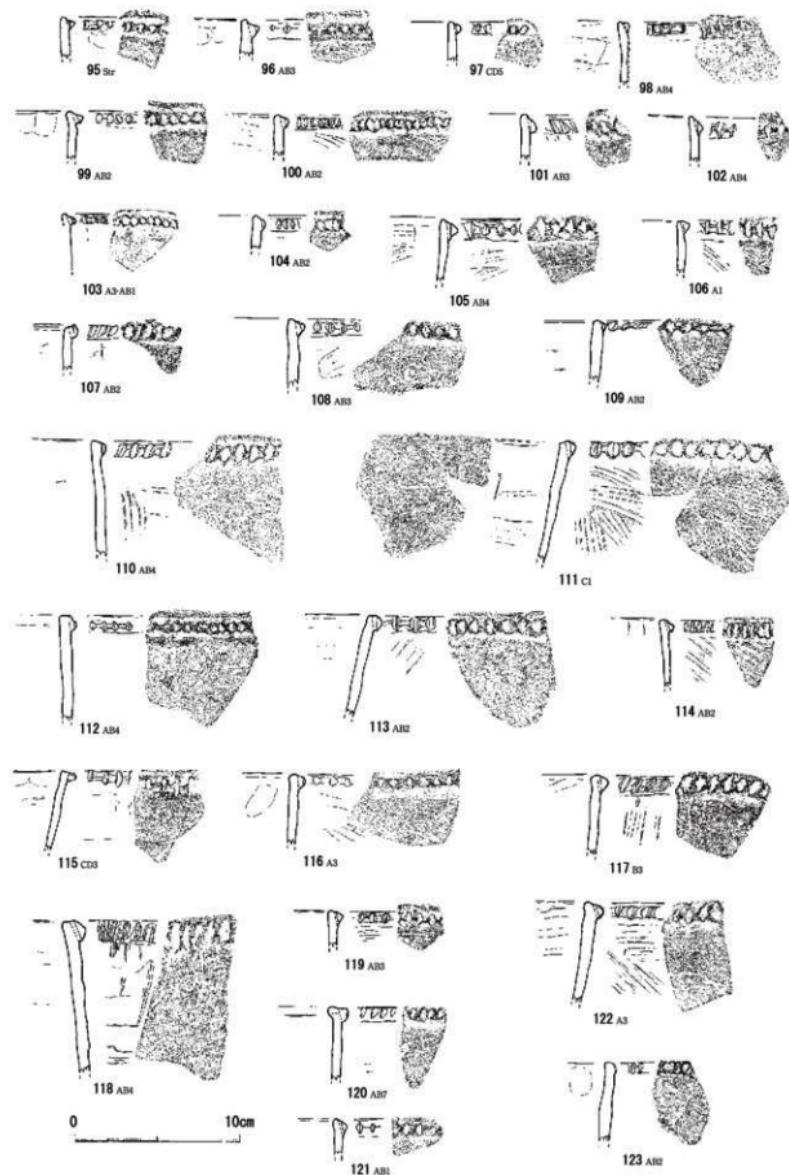


Fig. 56 5層出土土器実測図 1 (1/3)

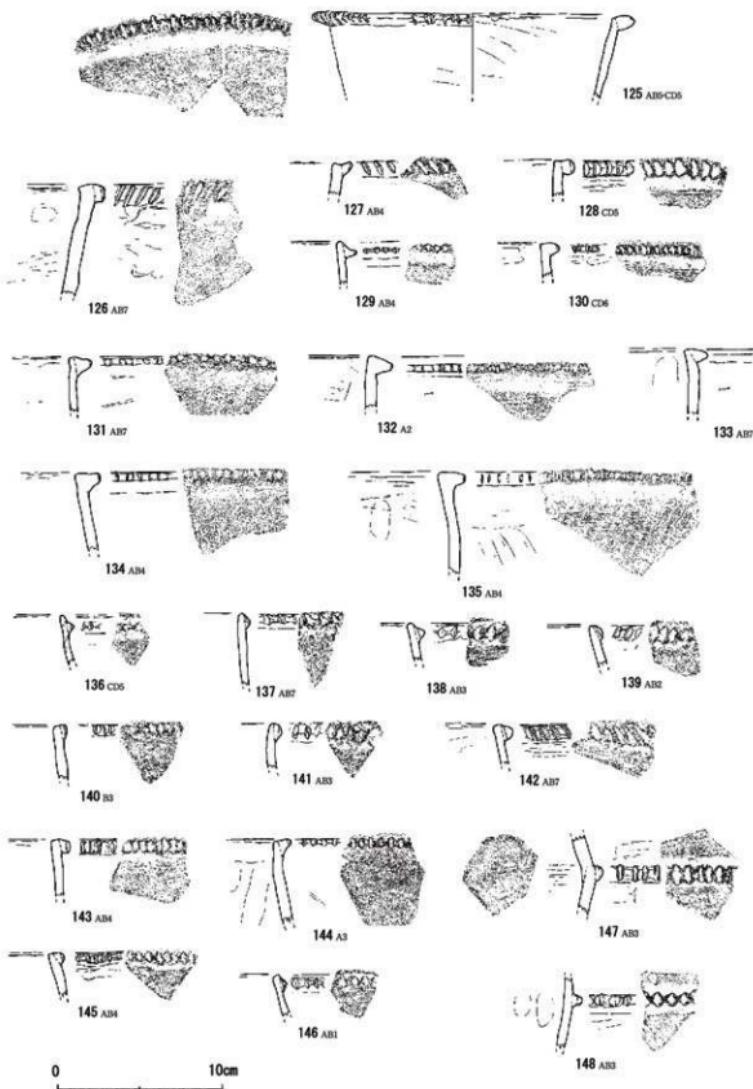


Fig. 57 5層出土土器実測図 2 (1/3)

で仕上げる。127は突帯を上方向に跳ね上げ、129は細く高く仕上げる。128は刻目を横方向に刻む。130は細めの刻目を密に施す。外面に若干の煤が残る。131は器面が荒れており、丸みのある刻目を施す。132、134、135は細い刻目を施している。135は縦方向のナデの後、口縁下に横方向の強いナデを施す。ナデ痕跡は明瞭で皮、布等の工具を使ったものと考えられる。133は刻目を施していない。136から148は2条突帯甕を想定した。いずれも小片で傾きが不確実で2条突帯甕に該当しないものもある。いずれもナデ調整を施す。136、138、146は口唇部から若干下がった位置に突帯を貼付する。136は外湾し、淡茶色を呈す。突帯は小さい。139、140は突帯が低い。141は外反気味で先が削れた工具で刻目を施す。142は外面横ナデが顕著に残り、刻目は下方向に大きい。143は高い突帯に刻目を密に施す。144は外反気味で棒状工具で刻目を施す。147は緩やかに屈曲し、148は屈曲しない。いずれも外面上部は茶褐色、下部は淡黄茶色を呈す。148には明瞭な横ナデ調整が残る。

149から166は外反口縁の甕で163までは口唇部に刻目を施す。161、162、166が淡茶色の明るめの色調を呈す以外は煤けて黒色から暗灰褐色の暗い色調を呈す。調整は151、153、159が外面ナデ調整で刷毛目は消え、他は刷毛目が見られる。149、150は口唇部が面を成さず下端部に刻目を施す。149は外面に炭化物が付着し、150外面には刷毛目調整と木口痕が残る。151、152は口唇部全面刻みで、151はナデ調整、152は外面は刷毛目の後に横ナデを施すが刷毛目が明瞭に見られる。内面は横方向の刷毛目を施す。153は刷毛目工具で横方向に刻目を施す。154は口唇部が面を成さず、外面に縦方向の刷毛が明瞭に残り、煤で黒色を呈す。155は斜方向の刷毛目が見られ、156は屈曲部に木口痕が残る。158は小ぶりの刻目を下端に密に施す。159は緩やかに大きく外反し、胴部は張る。160の外面は屈曲し、その下から刷毛目が見られる。161、162は淡黄茶色を呈し、刷毛目の後横ナデを施す。163は外面屈曲部から下に炭化物が吸着する。164、165は口唇部に刻目を持たない。164は1/6強からの復元口縁部径24.3cmを測る。外面口縁下には凹線を施し、斜方向の細かな刷毛目を施す。内面は口縁部に横方向の刷毛目が見られるが外面より刷毛目間の幅広く工具が異なる。165外面は口縁部では斜方向、胴部は縦方向の刷毛目が見られる。166は黄茶色を呈し、刷毛目の後にナデを施す。

167から193は壺である。167は軽く外反する口縁を持つ夜臼式の個体で内外面が横方向の研磨調整で外面灰褐色を呈す。168は小片からの復元で径、傾きは不確か。口縁部は反らずに直口するか。黒色を呈す。169は口縁部が若干厚くなる。外面に赤色顔料を施す。170から178は口縁部外面を肥厚、または段を形成する。170は胎土が精良で砂粒をほとんど含まない。口縁下部が若干厚くなり緩やかな段を成す。器面は荒れ、一部茶白色で研磨調整の器壁が見られる。171はやや荒い整形で薄く肥厚し、内外面を研磨で仕上げる。172、173は横ナデ調整で172は厚く幅狭の173は薄い肥厚を成す。173は1/4弱からの復元口径12.3cmを測る。174は大型の壺で、顔料を施していた可能性があるが器面が荒れ不明。胎土は砂粒を含むが細かく、橙色を呈す。175は浅い沈線と器面調整によって軽い段状をなす。176は厚く肥厚し、ナデ調整を施す。177の段も低い。178は外面段部には木口痕が連なる。内面も肥厚し平坦面を作る。外面には研磨調整が見られる。179は中期の鋤先口縁で内外面が黒色を呈していたものと考えられる。180から182は頭部から胴上部である。180は外面研磨とナデ、内面は刷毛目と指圧痕が見られる。181は頭胴の境にシャープな沈線を施す。内面の指圧痕が顕著である。182は1/6からの復元で、外面には赤色顔料を施す。内面はナデ調整でわずかに刷毛目が見られる。183は内湾気味の体部外面に肥厚により顕著な段を形成する。外面は研磨で灰褐色を呈し、内面は研磨とナデで黒褐色を呈す。胴部に丸みを持った鉢が想定されるが、器壁の厚さ、端部の銳さ等に違和感があり全体の器形ははっきりしない。184から193は沈線等による文様を持つ。184から186は横走沈線下の胴上部に円弧文を描く。184の沈線はいずれも細い。内面は指押さえと絞り痕がある。185の横線は浅く広めで弧

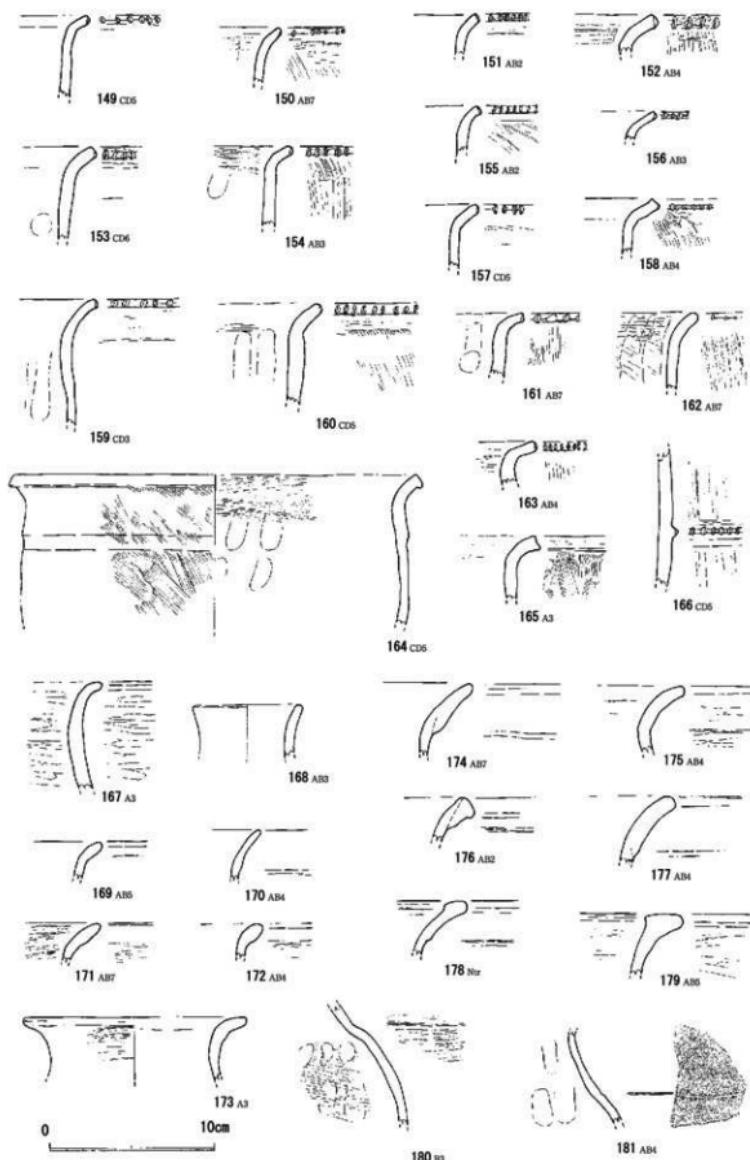


Fig. 58 5層出土器実測図 3 (1/3)

線は細く鋭い。186の2本の横線の下段は上に比べて細い。187は横沈線の後に弧状の斜線を密に描く。188は横線の後に複合山形文を右から左へ細い沈線で描く。内外面黒色を呈す。189と190は二枚貝腹縁により羽状文を描く。189の下部には横線が見られる。191から193には併行する沈線が見られる。

194から220は鉢等を集めた。194から198は屈曲部を持つ浅鉢でいずれも灰褐色を呈す。194は研磨調整で器面は荒れる。195は研磨調整で外面口縁部はナデで仕上げる。他は器面荒れ気味で不明確だがナデ調整と思われる。199、200は外反する口縁だが屈曲するか分からない。199は内外面、200は外面に赤色顔料を施す。201は外反口縁と丸みを帯びた胴部の鉢で研磨調整を施し淡黄褐色を呈す。1/4からの復元口径20cmを測る。202は口縁部が緩やかに外反し、ナデ調整で茶褐色を呈す。口唇部は内外にわずかに張り出す。1/6弱からの復元口径24cmを測る。203は口縁部が小さく外反し胴部はすぼまる。内外面とも削りの後ナデ調整で胎土は細かく灰褐色から淡黄白色を呈す。1/5からの復元口径16cmを測る。204は外反する口縁部で内外研磨調整と口縁部外面は横ナデで暗灰色を呈す。205は口縁部が短く外反し直線的に底部に至る。外面は条痕状の荒い擦痕が残り、内面には指圧痕が残る。底部径からの反転で口径14cmを測る。底に種子圧痕が見られる。淡黄茶色を呈す。206は口縁部は肥厚し壺状で、口唇部に刻目を持つ。胴部は丸みを帯びた球状の器形になると考えられる。外面は丁寧な横ナデで暗褐色を呈す。207から210は外反する口縁部で、209が緩やかに胴部へと曲がり、他は器形が不明である。208は研磨、他はナデ調整である。209口唇部端には小さな刻目らしきものがあるが器面荒れのため不明確である。211と212は高坏の口縁部と考えられる。211は内面を幅広に肥厚し、外面横ナデで暗灰色を呈す。212は緩やかに屈曲し外反口縁を呈し、内外面研磨調整で赤色顔料を施す。213は高坏の底部か。成形は雑で、器面はナデ調整と内面には指圧痕が見られる。1/4からの復元底径15.4cmを測る。214から220は直口する口縁部でそのまま胴部になると考えられる。214から216は研磨調整で他はナデを施す。217は内面に粘土帶接合痕と指圧痕が明瞭である。220は強く傾く可能性がある。214、218、220は暗灰色を呈し、他は淡橙色から淡茶色を呈す。

221から235は断面台形または直に立つ底部で突堤文系の壺のものと考えられる。221から223、232、235は上げ底部分に削り痕が残る。中でも235は一方向の明瞭な削り痕が見られる。224から227、229は削りの後にナデすることでその痕跡を消す。228には木葉痕が残り、230、231はナデ調整、233は研磨に近いナデ調整である。外面は削りとナデ調整のものがほとんどで232と235に縱方向の削り痕、234に横方向のヘラナデ状の調整が見られる。内面は一部削りが残るものがあるがナデ調整である。232には輪状に薄く、234は底に厚く炭化物が付着する。236から246は直線的に立ち上がり、外反口縁を持つ壺の底部と考えられる。246が外面橙色を呈す他は灰褐色である。237は端部がわずかに張り出し、外面には細かな刷毛目を施す。238、240は研磨およびナデ調整で壺の可能性もある。他は荒い縱方向の刷毛目を施している。内面はいずれもナデ仕上げで243、246に炭化物が付着する。241、242、244、246は上げ底で輪状に接地する。調整はナデである。247、248は厚く幅狭の底部で前期末から中期初めのものである。刷毛目が明瞭に残り、上げ底で247には指頭痕が明瞭に残る。249から254は壺と考えられる。249は精良な胎土で器面は荒れるが外面に研磨痕が見られる。黄白色を呈す。250は立ち上がりが強く、内外面に斜方向の研磨痕が見られる。251から254は胴部へ大きく広がる。外面調整は251は研磨、252、253は刷毛目、254はナデである。253の外面は赤みをおび、赤色顔料が線状に見られる。

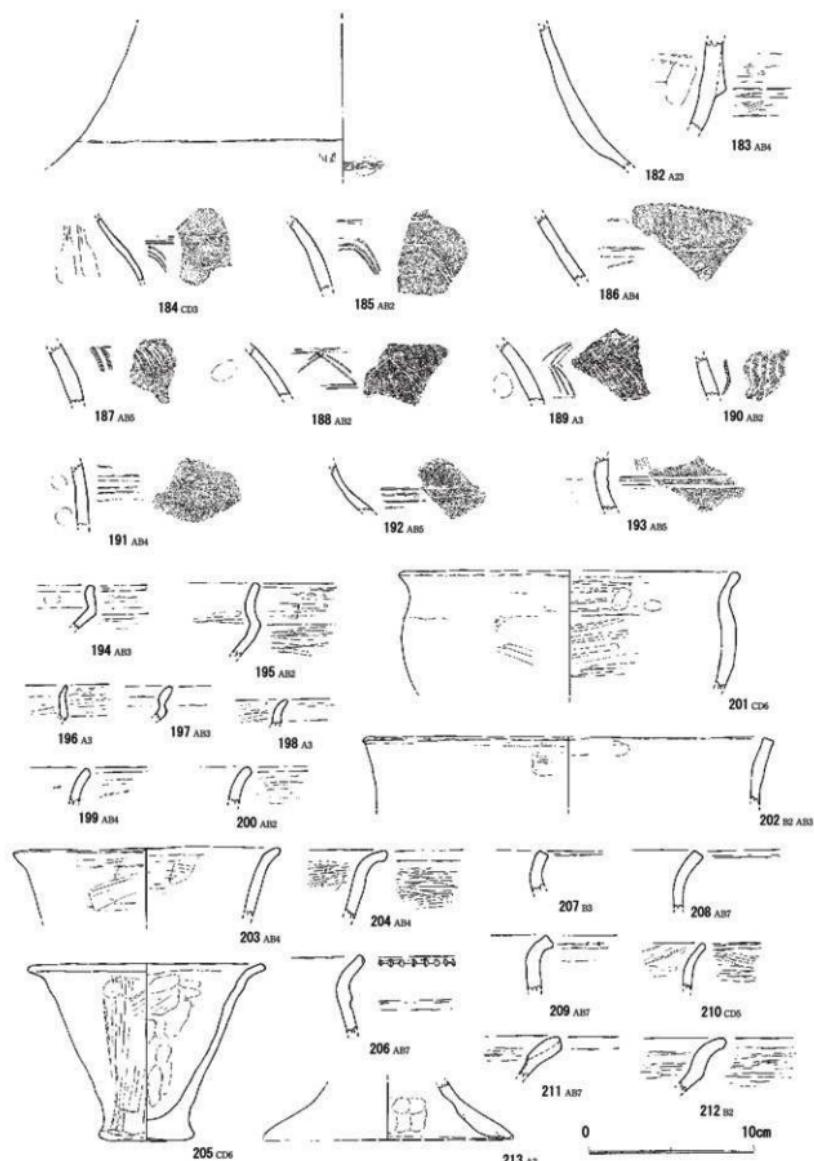


Fig. 59 5 层出土土器实测图 4 (1/3)

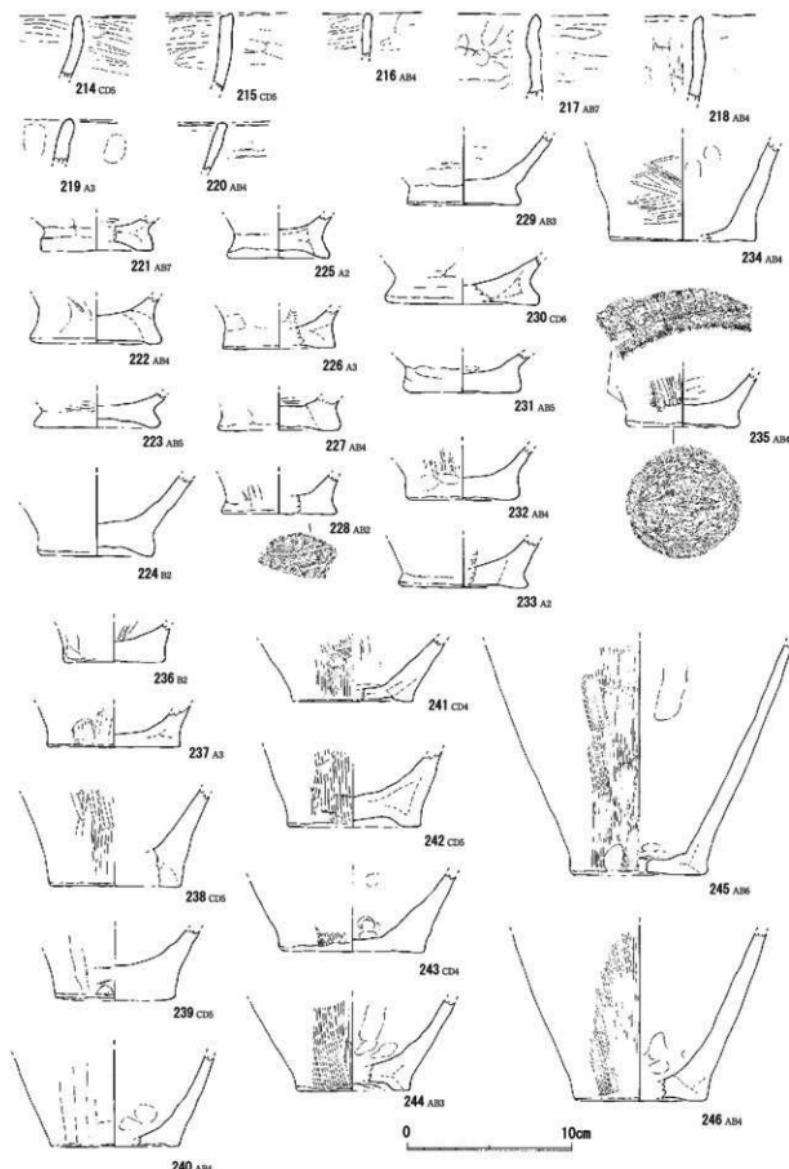


Fig. 60 5層出土土器実測図 5 (1/3)

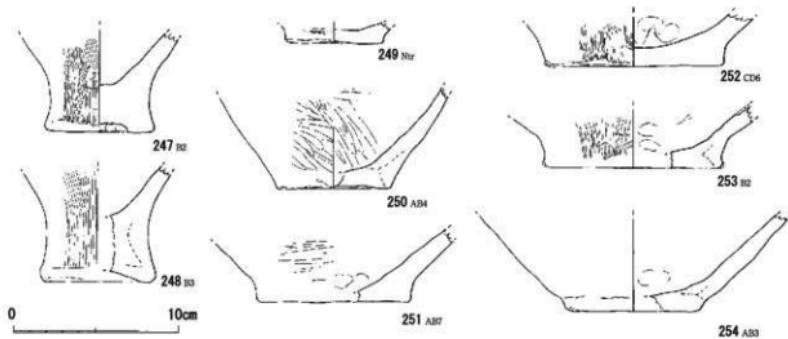


Fig. 61 5層出土土器実測図 6 (1/3)

6層出土土器 (Fig. 62~75)

256から371は刻目突帯文土器系の壺である。256は一条突帯壺で茶褐色を呈す。外面ナデ、内面は条痕のちナデ調整で、刻目は下方向に施す。1/6弱からの復元口径22.4cmを測る。257は二条突帯壺で内外面ともに擦痕が全面に見られる。外面屈曲部下は暗褐色、上は淡黄茶褐色を呈す。屈曲部下は内外面に若干の炭化物が付着する。1/2弱が残存し、口径17.5cmを測る。突帶は高く、刻目は縦方向に施文する。258から267、272、274、275は口唇部から若干下がった位置に突帯を貼付する。外面は灰茶色から暗褐色を呈す。器面は荒れ気味のものが多く、外面は259に条痕が見られる他はナデで、内面は258に条痕が残る。刻目は262が横方向に施す他は縦方向のようである。269は外面は5mm幅単位の割り状、内面は板状工具による擦過と木口痕が明瞭に残る。刻目は断面に丸みを持ち大きく煤が付着する。271は外面に条痕が見られる。272は口唇部に粘土帯を内側から上乗せした様な成形で特異である。突帶は高く刻目は小さい。明るめの淡茶色を呈す。273は内外に粘土を摘むように成形し、口唇部と外面にくぼみを作る。707に近いが別個体である。暗褐色を呈す。274は黒色、275は灰茶色を呈し突帯が低い。

以下310までは突帯を口唇に接するか被るよう貼付する。暗褐色から灰褐色の暗い色調で、279が淡黄茶色を呈し、298が淡橙色、309が淡灰褐色で明るい。調整はナデ調整のものが多い。その中で280、282、283、290、306は削り、281は条痕、285、290、294、305は横方向の擦痕が見られる。刻目は277、280、282、295、296、304、307は横方向に施し、他は縦方向である。また、281、285、286、288、291、294、300、306、307の外面に多少の煤が付着している。280の外面は右斜め方向に削る。281は外面に条痕が明瞭に残り、内面は条痕の後にナデる。刻目は幅広で大きい。282は外面に削りによる砂粒痕が顕著である。内面は横方向の擦痕が見られる。285の擦痕は木口が明瞭で刷毛目状を呈し、横方向に荒く施す。290は横方向に削り、後にナデる。294は内外に横方向に荒い擦痕を施す。298は肩部が直線的で、胎土は細かく淡橙色から淡黄褐色を呈す。299は口唇部付近が橙色を呈し、上方向からの指圧痕でくぼみ状に刻む。305外面は横方向の擦痕が著しい。306外面は煤が全体に付着し、下部に3mm幅の擦痕が数条見られる。内面は横方向の擦痕である。

311から337は口唇部と突帯上面を一緒に横ナデ、面を成している。煤けているものが多く黒色、灰褐色を呈すものが多いが、内面は淡黄褐色系の色調がほとんどである。311、314、324、325、332は

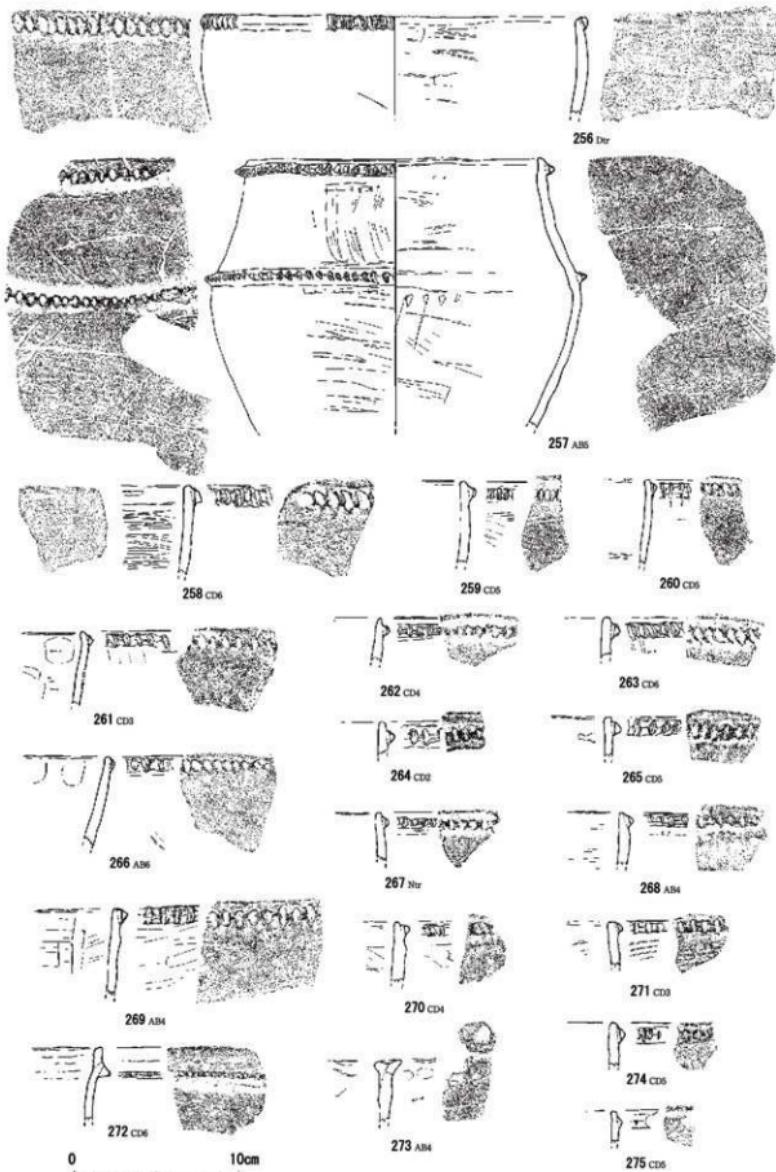


Fig. 62 6層出土土器実測図 1 (1/3)



Fig. 63 6 层出土土器実測図 2 (1/3)

淡黄褐色、淡灰色を呈し明るい。器面は以下で特に触れないものはナデ調整でこれが多いため。刻目は311、317、319が横方向に施す以外は縦方向に刻む。317、320、321、322、326、329、334、335の外面には煤が付着している。311はナデ調整で仕上げ、特に外面は丁寧である。黄褐色を呈す。1/6弱からの復元口径15.5cmを測る。312は横方向の荒い削り状の調整である。313は外面に擦痕、内面は条痕または擦痕が見られる。314は淡橙色を呈し、外面に橙色の斑点が見られる。37頁の分析参照。317は斜方向の条痕が顕著で、突帯から下は煤で黒色を呈し地は黄褐色である。318は内面は暗灰褐色、外面は灰茶褐色を呈す。320は外面は斜方向の削りで、内面は横方向の条痕の後ナデる。321、322は同一個体の可能性が高い。外面は煤で黒色を呈す。323は外面横ナデ、内面は条痕の後ナデる。326は外面が荒いが軽い削り、内面には擦痕と指押さえが見られる。327は外面は削りで黒褐色を呈し、内面はナデで暗灰褐色を呈す。328は突帯の上面から端部に細い刻目を施す。胎土は砂粒が少なく細かい。内外とも暗褐色を呈し、外面に炭化物が付着する。331は外面に斜方向の削り調整が見られる。332は胎土が細かく質感が固い。淡灰色を呈す。333は淡灰褐色を呈し固い。ナデ調整で仕上げる。334は外面は荒い削りで煤で暗褐色、内面は丁寧なナデで淡黄褐色を呈す。328と類似する。337の外面は斜方向の条痕または削り、内面ナデで灰褐色を呈す。

338から354はやはり口唇部と突帯上面をナデて面を成し、突帯が大形のものを含む。調整、色調等は前のFig.64と同様である。338は灰褐色を呈し、外面削りの後にナデる。339は黄褐色の器壁の外面が煤ける。340は外面削りの後ナデで煤が付着する。内面灰褐色を呈す。341は外面ナデ、内面ナデで削り状の擦痕が見られ茶褐色を呈す。342は外面削りの後ナデで煤け、内面ナデで淡黄褐色を呈す。胎土は砂粒が少なく細かい。343から345は淡灰色から淡橙色で明るい色調である。346は淡黄白色を呈し、胎土は細かい。刻目は密で細かい。347は大きな突帯に小さな刻目を施す。外面灰褐色で横ナデが顕著である。348は淡黄褐色の器壁外面が煤ける。横ナデ調整が強い。349は内外面が暗褐色を呈し、外面に炭化物が付着する。351は淡黄褐色を呈す。352は折り曲げた口縁に深く狭い刻目を刻む。内面に粘土帶の単位で凹凸がある。353は口縁下にも刻目突帯を持つ。外面暗褐色で炭化物が薄く付着し、内面暗茶褐色を呈す。354は特に大形の突帯を付し、突帯かは煤ける。

355から371は二条突帯窓と考えられるもので、小片で不確実なものを含む。355は外反気味で、不整形な突帯を付す。灰色を呈す。356は小片で傾きは不確実。ナデ調整で茶褐色を呈す。357、358は口唇部からやや下がった位置に突帯を付す。359は緩やかな胴屈曲部と口縁部に突帯を付す。淡茶色を呈し、胎土は砂粒を含むが細かい。360はやや外反し、内外面とも削りの後軽くナデ、外面は煤ける。361は刻目を横方向に施し、外面に煤付する。362は外反気味で外面に横方向の条痕の後ナデる。顔料状のものが付着する。363から368は屈曲部に突帯を付す。363は外面が薄く橙色を呈す。362、367と共に37頁の分析参照。刻目は横方向に施す。364は外面削りの後ナデで、器面が固く、暗灰色を呈す。366はローリングを受けて器面が荒れ淡茶色を呈す。367は外面淡茶色を呈す。369は屈曲部に刺突により刻みを施す。ナデ調整で外面茶褐色、内面暗灰色を呈す。370、371は屈曲しない。突帯、刻目から口縁部も刻目突帯文と考えられる。370はナデ調整で外面淡黄褐色、白色を呈し、胎土が精良である。刻目は横方向に施す。371は外面は削り後ナデ、内面は擦過で暗褐色を呈す。

373から457は外反口縁の窓で431までは口唇部に刻目を施す。大半が外面に縦または斜方向の刷毛目調整を施し、内面にはナデと指圧痕、口縁部には横ナデを施す。器面は灰褐色から灰茶褐色を呈し、炭化物が付着するか煤けている。373は内面下部に薄く炭化物の痕跡が見られる。1/6からの復元口径22cmを測る。374の胴上部には沈線が巡り、胴部はやや張る。1/6からの復元口径24cmを測る。375は口縁部外面の刷毛目調整後の横ナデが見られない。1/4からの復元口径15.8cmを測る。376は外面ナデ

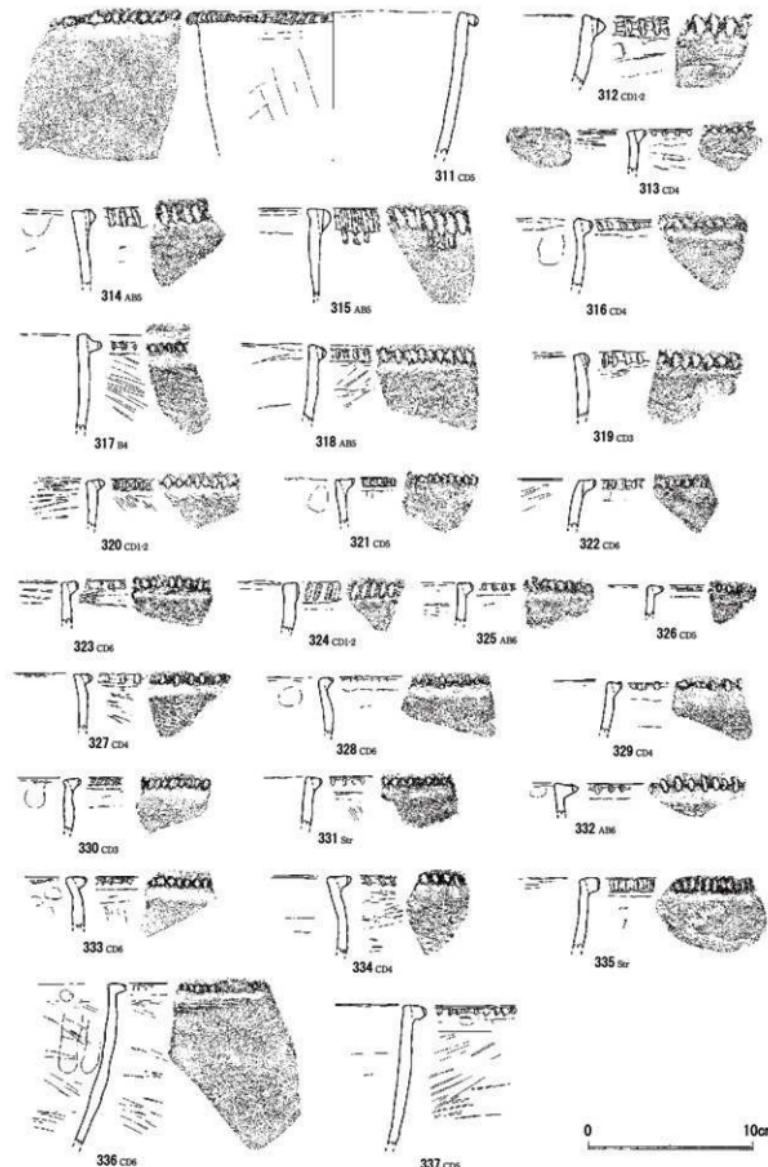


Fig. 64 6 层出土器物实测图 3 (1/3)

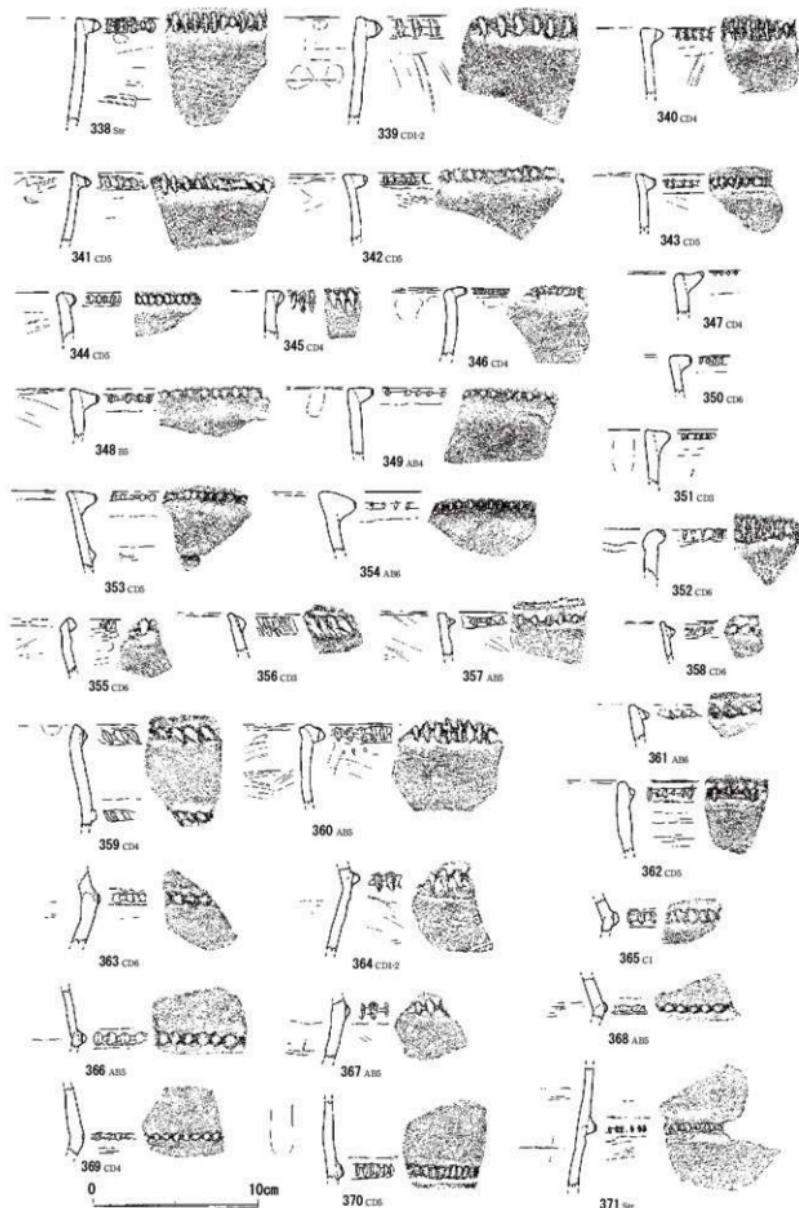


Fig. 65 6 层出土土器实测图 4 (1/3)

で刷毛目を消す。1/5からの復元口径20.6cmを測る。377は胴上部に細い沈線を施し、口縁部横ナデが弱い。内面の横方向の刷毛目は顕著である。1/5からの復元口径20.6cmを測る。378は外面横ナデで、口唇部の刻目が太く深い。1/6からの復元口径21.8cmを測る。379は胴部が張り、口縁部に刻目を施さない。1/4からの復元口径23.2cmを測る。380は外面の刷毛目が特に細い。刻み目は施さない。1/6弱からの復元口径18.4cmを測る。

381から396は面取をしない口唇部のはば全面に刻目を施し、胴部の張りが小さい。刻目は刷毛目工具で横方向に施すものが多い。381は外面全面に煤が付着し暗褐色を呈す。382は口縁下に刷毛目が見られるが、胴部はナデ調整である。383は口縁下に木口痕が残りナデ調整である。385は口縁下に低い段を形成する。391は刻目の間隔が疎で斜方向に施す。395の器面は明るい淡橙色を呈し黒斑が見られる。煤の付着は見られない。397から407は刻目を口唇部下端に施し、胴部はあまり張らない。397は口径27cmほどが復元され、やや大形である。399は2次調整によるものか胴部が桃色がかる。400は口縁下に調整の起点を揃えることで段を形成する。401は口縁下に浅い沈線を施す。402外面は全面に煤が付着しナデ調整である。404は器面が淡茶色を呈し明るく、煤は見られない。口縁部横ナデが弱い。406は暗灰褐色を呈し、外面横ナデで口縁部は強くナデる。煤は見られない。

408から430は胴部が張る。409と410は淡黄褐色の淡い色調で409外面はナデ、410の刷毛目は細かい。411は胴上部に段を形成する。412は口縁下に目が粗な刷毛目が見られる。413の口唇部を強く面取し、刻目は細かい。414はナデ調整で外全面に煤が付着する。415は淡黄褐色と明るい色調。418は口縁下からの刷毛目の木口で段状を呈す。422は口縁部の横ナデが強く、刷毛目も明瞭に残る。424は口縁下に木口痕は残るが、刷毛目はナデにより消える。427、428は口唇部の面取が強い。

430は外面橙色、内面はくすんだ淡い橙色で一部剥げて下の黒色の地が見られる。37頁の分析参照。外面はナデの下に刷毛目が見られる。胴部で屈曲する器形とも考えられる。

432から441は外反する口縁部に刻目を施さない。外面は刷毛目調整の後、口縁部に横ナデを施す。外面は灰褐色または淡茶色で明るめのものが多い。433は細かな刷毛目が明瞭に残る。434は全体をナデ調整で仕上げる。436は内外ともくすんだ橙色を呈す。437は外面に炭化物が付着する。437、438は内面の刷毛目が明瞭である。440は胴上部に沈線を施し、横方向の刷毛目が見られる。441は胴上部に沈線を施す。外面の刷毛目は口縁直下はやや目が粗く、沈線の上は細かい。内面は細かい方に近い。442から445は外反口縁堀の胴部が屈曲し刻目を施す。いずれもナデ調整である。442は大きく外反し、器壁がやや厚い。外面は淡黄褐色で口縁部付近は薄く橙色かかる。443は口縁部が小さく外反し外面に煤が付着する。444は淡黄茶色を呈し、刻目が浅い。445は刷毛目工具で浅く刻目を施す。

446から456は胴上部に刻目突帯を付し、外反する口縁部を持つと考えられる。446は胴部突帯が幅広く高い。刻目は荒れのため不明瞭で、あっても浅く小さい。口縁部の刻目は浅い。口縁下に炭化物が付着する。447の突帯は細く高い。突帯下は煤が付着する。448の外面は削りのちナデ調整で全面煤で黒褐色を呈す。449は外面ナデ調整で内外面に煤が付着し暗褐色を呈す。450は低い突帯より下に刷毛目が明瞭に残り、灰褐色を呈す。451から453はナデ調整を施す。454は刷毛目の後ナデで若干の炭化物が付着する。455と456は器壁が厚く、突帯の横ナデが強い。457は外反口縁堀の胴部沈線で刷毛目が明瞭に見られる。458は堀の蓋と思われる。外面は縦方向の刷毛目を施し橙色から淡橙色を呈す。内面は淡灰褐色を呈し、横方向の刷毛目を施し、上部は木口痕が顕著な擦痕で炭化物が付着する。天井は窪み、指頭圧痕が見られる。

459から541は壺である。467までは外反が小さな夜臼式系である。459は外面横方向の研磨で淡黄灰色を呈す。口縁部はごく一部が残存し荒れている。頸部部分の1/6からの復元で傾き径は不確実。460

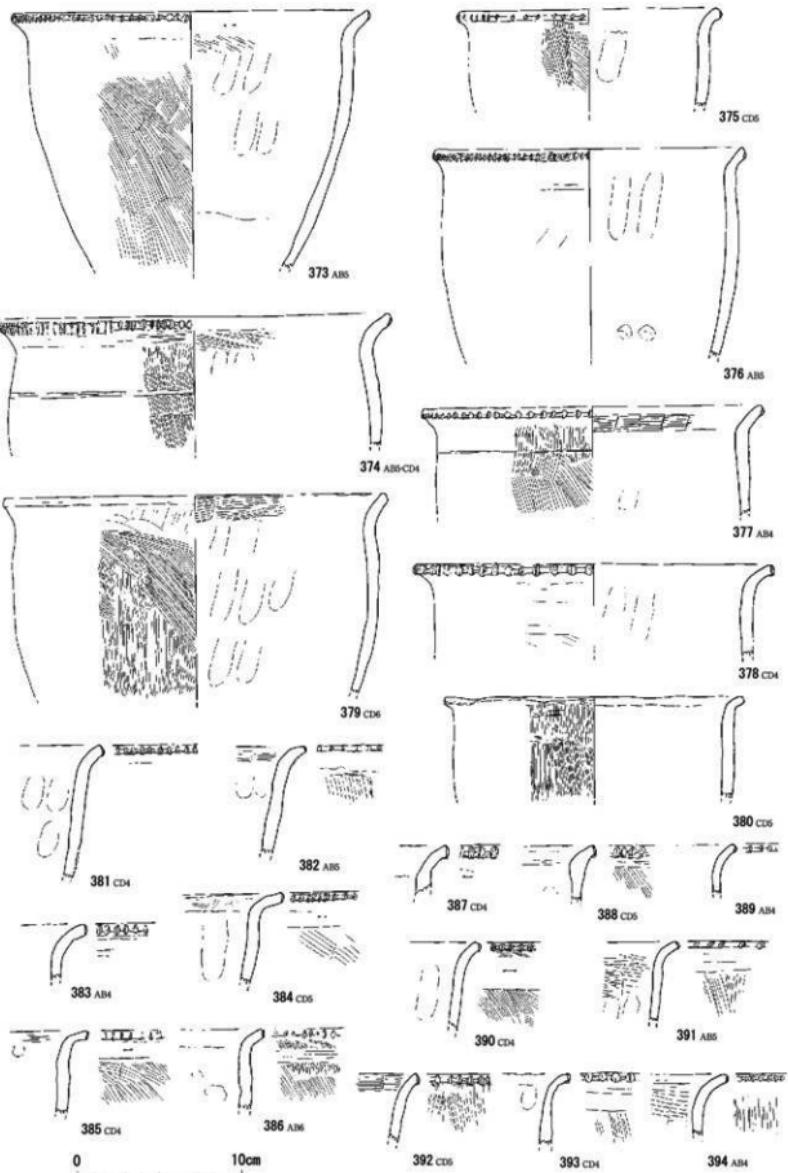


Fig. 66 6層出土土器実測図 5 (1/3)

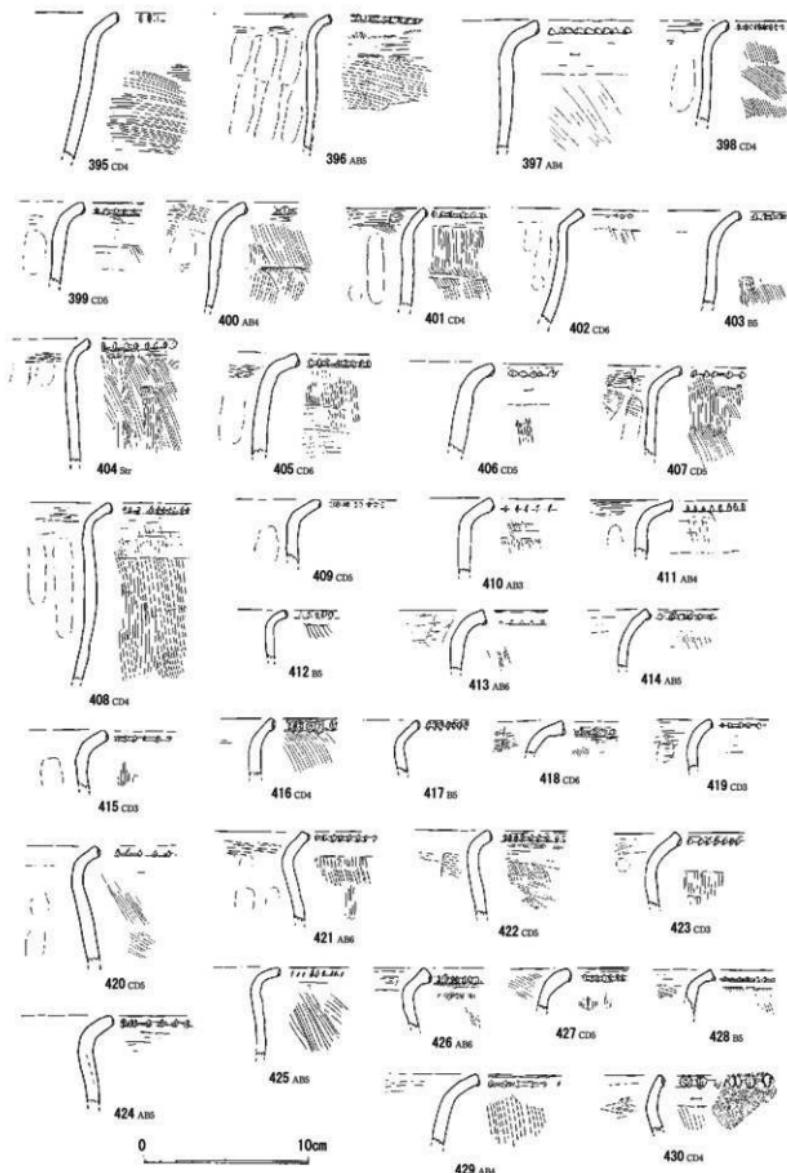


Fig. 67 6 层出土土器实测图 6 (1/3)

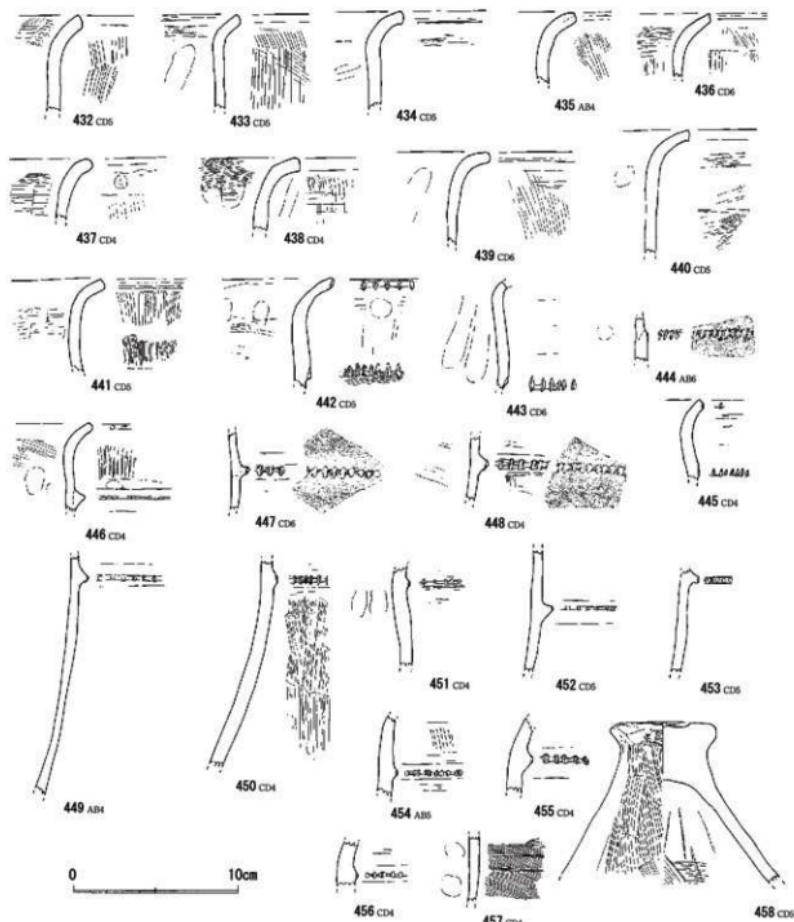


Fig. 68 6層出土土器実測図7 (1/3)

は器面がやや荒れるが内外面とも研磨調整を施す。1/4弱からの復元口径23cmを測る。淡黄灰色を呈す。461から463は調整、胎土、色調から同一個体と考える。それぞれに作図したため径、傾きが合わないが歪みのためと考える。外面は橙色の顔料を全面に塗るが剥げたり、薄くなっている部分が多く地の淡黄灰色や灰褐色の部分がまだらに見られる。横方向の研磨調整で胴部分に刷毛目の跡が確認できる。内面は口縁部から4cmまでは赤色顔料を施す。器面は暗茶褐色で地の淡黄褐色部分が見える。口縁部は横方向の研磨、頸部は横ナデ、胴部は横方向の刷毛目と指押さえが顕著である。464は灰褐色

を呈し外面はナデで木口痕が残る。465は小片で傾きは不確実。466は内外面が研磨調整で外面は光沢がある。467は淡黄灰色を呈し、内外面とも研磨調整で胎土は精良である。468は小壺で口縁部の8割、胴部の4割を欠く。器面は荒れており淡黄褐色を呈すが、暗灰褐色で研磨された部分が一部残っており本来の器面と考えられる。胎土は砂粒が少なく粘土は細かい。内面は灰茶褐色を呈しナデ調整で頸下部に指圧痕が見られる。頸部には接合痕が残る。文様は頸部上部、下部に各3条の併行横線、その間に縦方向の三本線を8条描き、以上でできた区画の下部に細い半円をスタンプで施文する。この半円は連続した4つの区画に3個、他の4区画には2個ずつ配する。胴上部には4本線の弧状文を右から左に9条描く。469は内外面が研磨調整で外面は灰茶色を呈す。口縁部内面に赤色顔料が残り、外面も施されていた可能性がある。また、内面に暗灰色の垂れたような斑点が見られる。1/6からの復元口径16cmを測る。470は小壺で精良な胎土で器面は荒れる。1/6弱からの復元口径9.8cmを測る。471は荒い研磨調整で外面肥厚し、調整痕で段を整形する。1/6からの復元口径15.5cmを測る。472は内外面とも荒い研磨調整で単位は不明瞭。外面茶褐色、内面淡黄灰色を呈す。1/4からの復元口径17.6cmを測る。

473から498は外面を肥厚し下端が段を成す。灰褐色から淡灰褐色を呈すものが多い。477、480、481、483は内外面に赤色顔料を施す。調整は外面に横方向の研磨を施すものが多いが、488、493、495、496はナデ調整である。486は外面、487は口唇部の一部が赤く、赤色顔料が施されていた可能性がある。491は器面が荒れるが、胎土は細かく橙色を呈し、赤色顔料を塗布していた可能性がある。495は口縁部外面は横ナデで仕上げ、他は横方向の研磨である。1/10からの復元で口径42cmほどの大形品が想定される。496はナデ調整で同一個体のものと考えられる頸部片が数点ある。497は口唇部上下端に小さな刻目を施す。

499から508は大きく外反し外面肥厚はない。499から503は横方向のナデ調整で仕上げる。499は削りの痕跡が残る。502は頸部上部に浅い横走沈線を施す。504は外面研磨、内面ナデ、505は外面擦過、内面研磨を施す。506は器面が荒れる。砂粒を含まない細かな胎土で、外面に赤色顔料がわずかに残る。507は内外面ナデ調整。508は口縁部を折り返す様にして厚くし、横ナデを施す。外面に炭化物が付着する。鉢の可能性もある。509は頸部で内外面荒れる。外面には淡い橙色の顔料を施し2本の沈線が見られる。内面暗灰色を呈す。細砂粒が多いが粘土は細かい。同一個体の破片が数点ある。510は頸部との境に沈線を施す。外面は赤色顔料を施し、擦過状の研磨で刷毛目が一部見える。内面は指おさえが顕著である。511は外面が荒れる。外面は研磨調整で頸、胴部の境に沈線を施す。

513から532は沈線で文様を描く壺である。横線とその他の線の切り合いが分かるものは532以外すべて横線を先に施している。器面調整は概ね研磨で、丁寧なナデのものもある。513から517は複線弧状文である。513は淡い橙色を呈し、左方向に弧状文を描く。515は一単位のみが見られる。破片の向きは不確実である。518から523は山形文を描く。518は4条の斜線をやや弧状に描く。横線と共に幅広めの沈線で丁寧に平行に描かれている。胎土に砂粒を含まない精製品である。519と520は細い1本の沈線で山形文を描く。器面暗褐色を呈す。521の沈線はやや勢いよく描かれ、施文順序は右方向である。523は細い斜線で山形文になるか不明である。524から526は横線と斜線を描く。524右側には空白部があり、方向を違えて斜線を引くと考えられる。527は羽状文の可能性がある。527、528は斜線のみが見られる。529は羽状文の可能性がある。530から532は羽状文を描く。530の施文順は上から下である。533から535は二枚貝の腹縁で羽状文、弧状文を描く。536から542は併行する横線である。横線のみを施すものは図化していないものが多い。540は頸胴部の境に1本施文する。胎土に砂粒が少なく整形も丁寧な精製品である。542は小型品で外面研磨で黒褐色を呈し光沢がある。

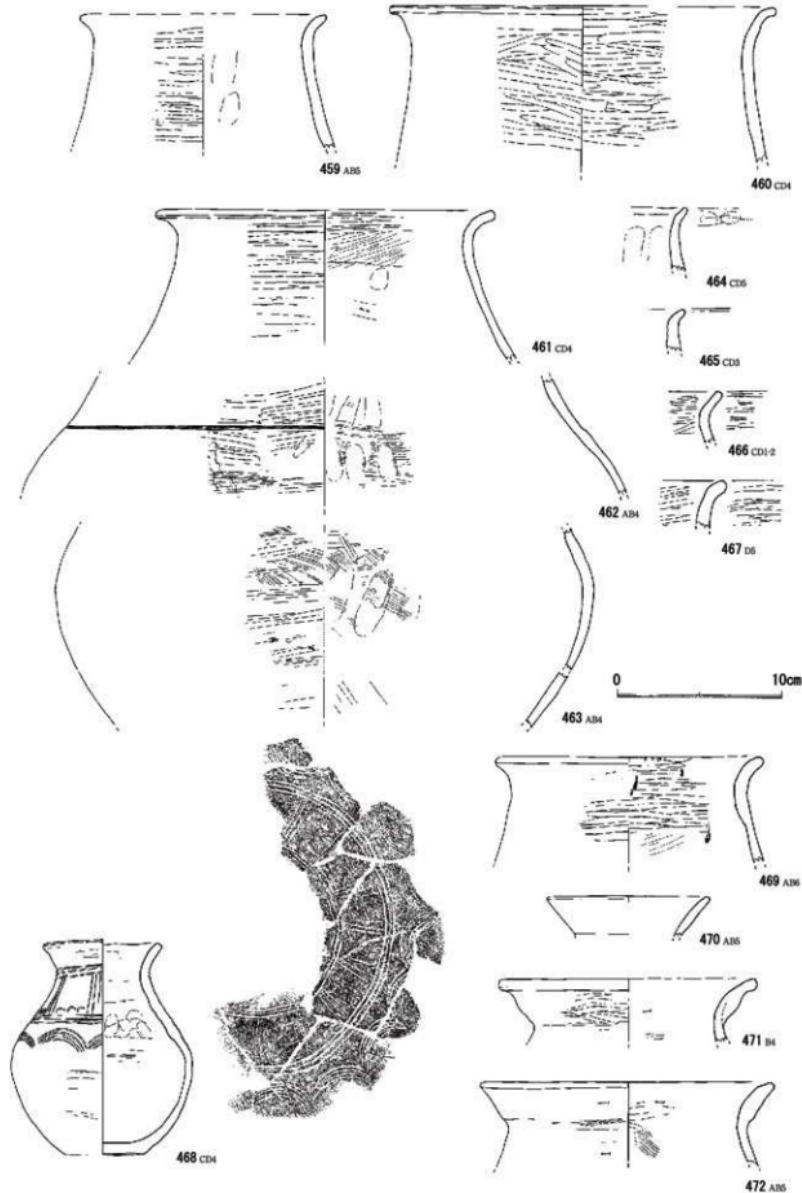


Fig. 69 6 层出土土器实测图 8 (1/3)

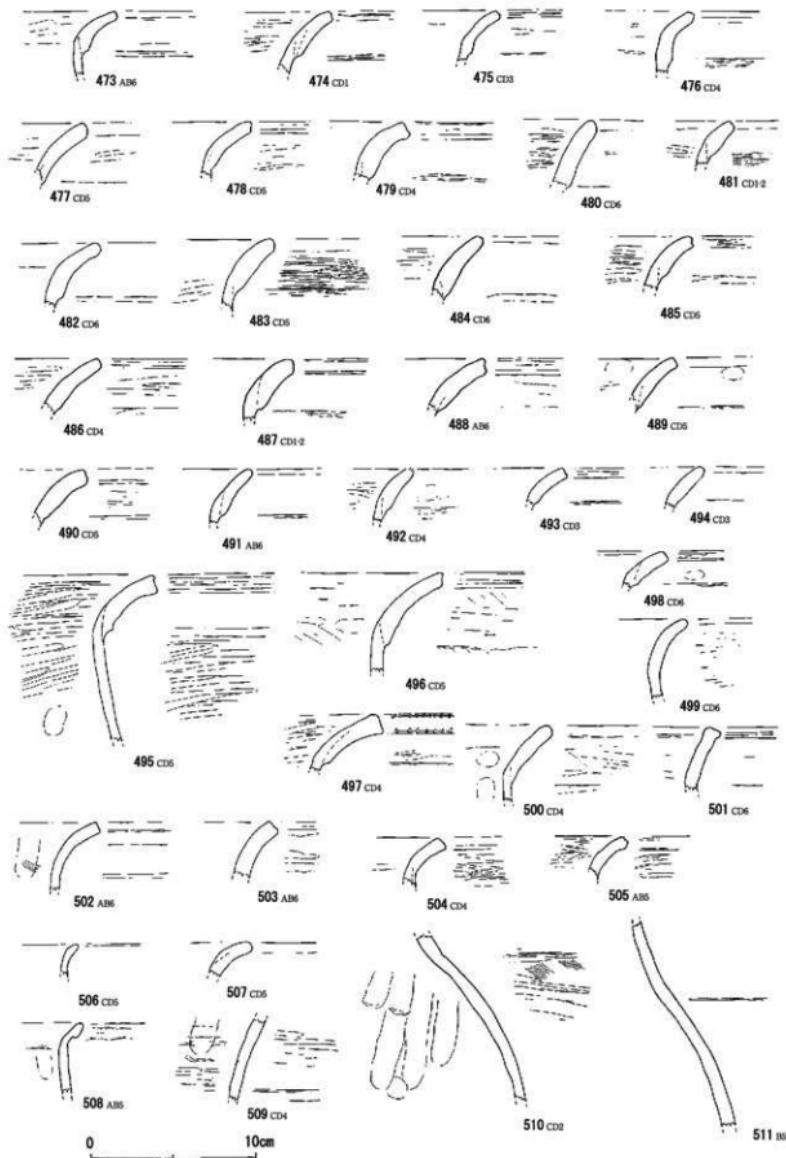


Fig. 70 6層出土土器実測図 9 (1/3)

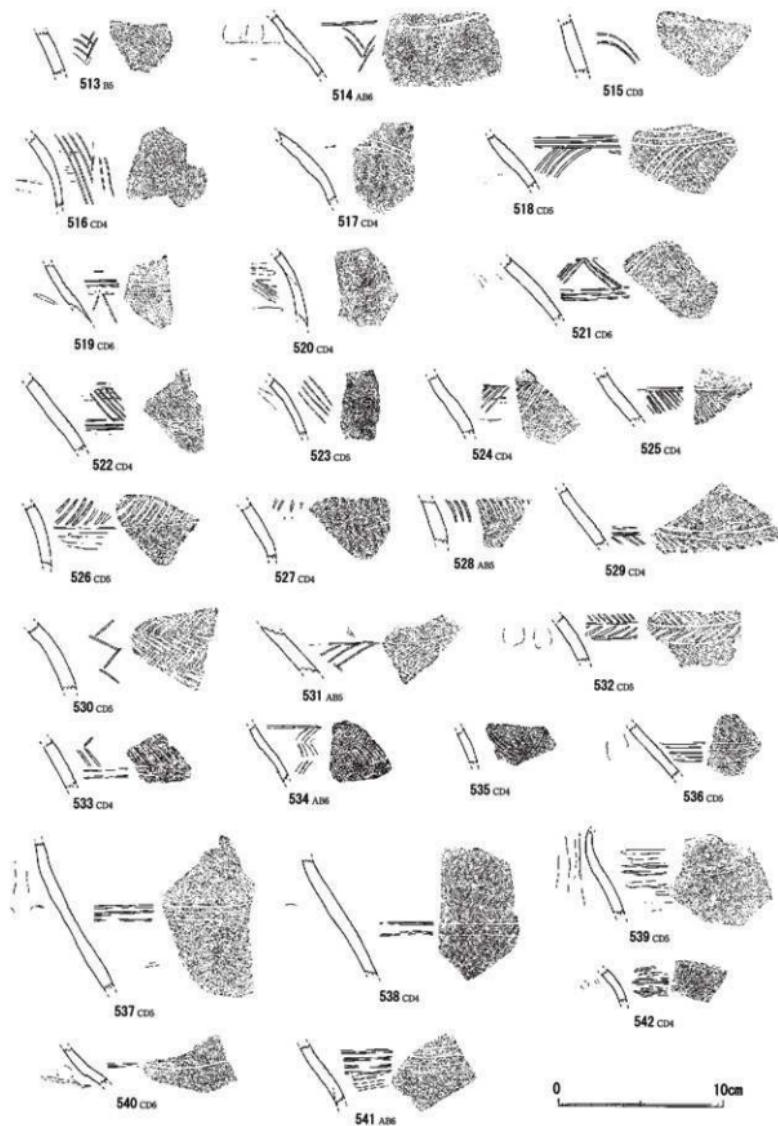


Fig. 71 6 层出土器実測図10 (1/3)

544から588は鉢状の器形のものである。544から554は口縁部が外反し屈曲部を持つ浅鉢と考えられる。浅いものは高坏の可能性もある。研磨、ナデ調整を施す。544は淡黄褐色を呈し1/6からの復元口径12cmを測る。545は暗灰褐色を呈し1/6からの復元口径25.5cmを測る。546は屈曲が急で口縁部が小さく折り返し、古手の形態である。552は屈曲部の直上に浅い沈線を施す。

555から573は外反する口縁部を持ち、浅鉢と同様の器形でやや深い鉢と考えられる。やはり研磨、ナデ調整を施す。561、562、569の内外面には赤色顔料を施す。560は外反が急で屈曲に近い。570は薄手で浅鉢の可能性もある。569には縱方向の研磨が暗文風だが、器面が荒れており不明確である。571は外面淡橙色、内面黒褐色と対照的な色調で擦過風の研磨調整を施す。573は団よりも丸みを帯びた胴部で内外面黒褐色を呈す。

574から588は直口する鉢である。574から577は小さく口縁部が外反または屈曲する。575、577はナデ調整である。576は内外面研磨で外面茶褐色、内面黒褐色を呈す。577は器面が荒れる。天地、傾きが不確かである。578、579は大きく傾く可能性がある。小片で不確か。580、581は器壁がやや厚手で580の外面に赤色顔料がわずかに残る。582は椀形になり、1/6弱からの復元口径9.3cmを測る。583もこれに近いが小片のため不明。585は研磨調整で浅鉢状を呈し、高坏の可能性もある。586は内面に三角に突出部を持つ。器面が荒れ詳細不明。587は口縁部が小さく外反する。588は外反気味で口縁部外面に浅い沈線を施す。内外面研磨で暗灰色を呈す。587、588は傾きが不確かである。589、590は内面を肥厚する。589は器面が荒れるが研磨調整の様で、高坏と考えられる。590はやや厚く中期の壺の可能性がある。591から595は緩やかに外反する体部を持ち、高坏の脚と考えられる。591は外面に斜方向の刷毛目が見られる。594は研磨調整、592、593、595はナデを施す。

596から602は弥生中期の遺物である。596、597、598は逆L字形口縁を呈し596外面は刷毛目の後ナデ調整、597、598は刷毛目が明瞭に残る。599、600は内面肥厚する壺である。601、602は接合しないが同一個体と考えられる。601は淡橙色の器壁に外面と内面頸部を黒色に塗り、研磨調整を施す。外面頸部には縱方向の暗文状の研磨が見られる。1/4からの復元である。602は外面研磨内面ナデ調整で外面は黒塗り、内面は灰褐色を呈す。胴部最大径部に低い三角突帯を巡らす。

603から622は断面台形を呈す底部で突蒂文の壺と考えられる。底は上げ底または若干浮き、605、610、611、614、615には荒く深い削り調整が見られ、他はナデ調整である。外面はナデ調整がほとんどで605には削り調整を施す。617、618には木葉痕が見られる。617、619内面には炭化物が付着する。622は内外面が桃色がかり2次焼成によると思われる。

623から640は外反口縁の壺の底部と考えられる。外面は刷毛目を施し、内面はナデ調整である。底はナデるもののがほとんどで無調整のものもある。外面は淡灰褐色から橙色がかった灰褐色を呈す。624は器面ナデだが、若干の刷毛目が残る。624から628、631、632、634、635、636、638、639、640の内面には炭化物が付着している。633は底には焼成後の穿孔がある。

641から666は壺の底部で鉢、浅鉢のものも含まれる。641から651は断面台形または円盤張り付け状を呈す小型品である。643、646、648、651は小型品で円盤張り付け状をなす。胎土は精良で643、651が外面研磨調整を施す。648は砂粒を含み器面は荒れ気味である。650は類似するが若干の上げ底で浅鉢と考えられる。この他は若干の上げ底で647は研磨、他は削り調整で仕上げる。

652から659は656を除き、接地部から胴部へと広がる。652は精良な胎土で外面黒色、内面淡茶色を呈す。シャープな作りで浅鉢と考えられる。656は縁に強い横ナデを施し、口縁部様の調整を施す。657は内外面黒色を呈し、外面研磨、内面ナデで小壺と考えられる。この他は橙色がかった淡灰褐色を呈し、研磨、ナデ仕上げの中型壺である。

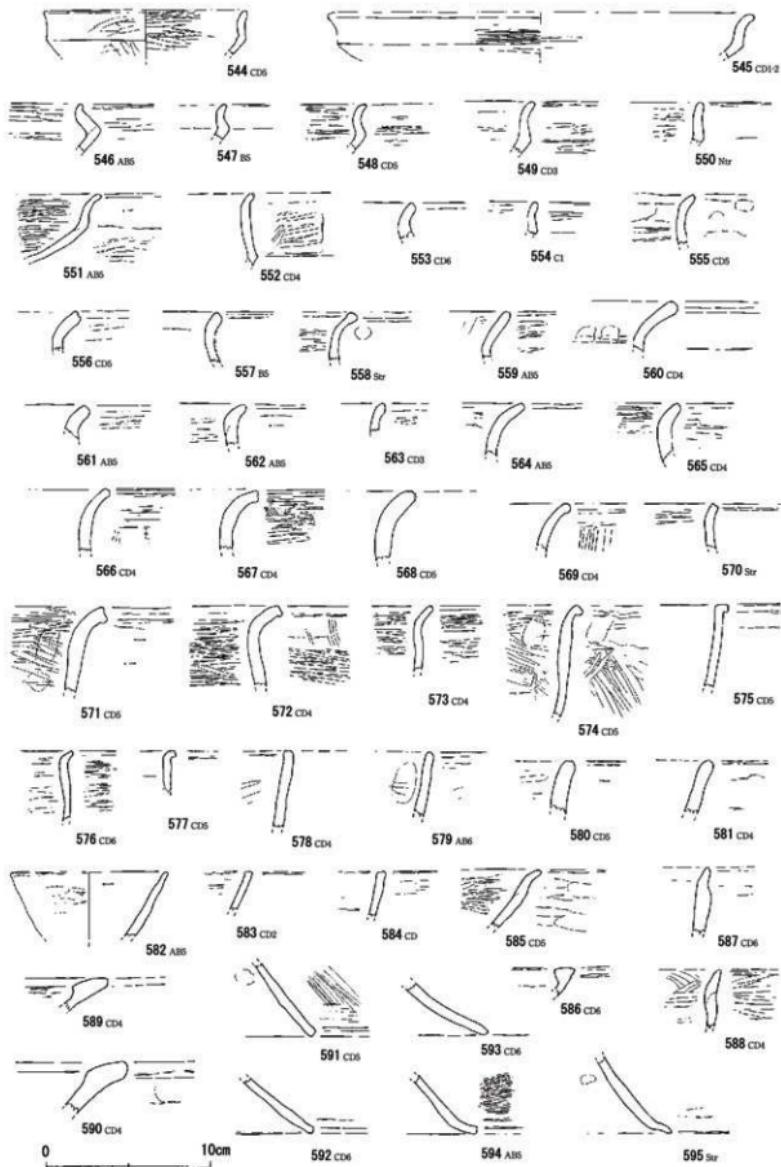


Fig. 72 6層出土土器実測図11 (1/3)

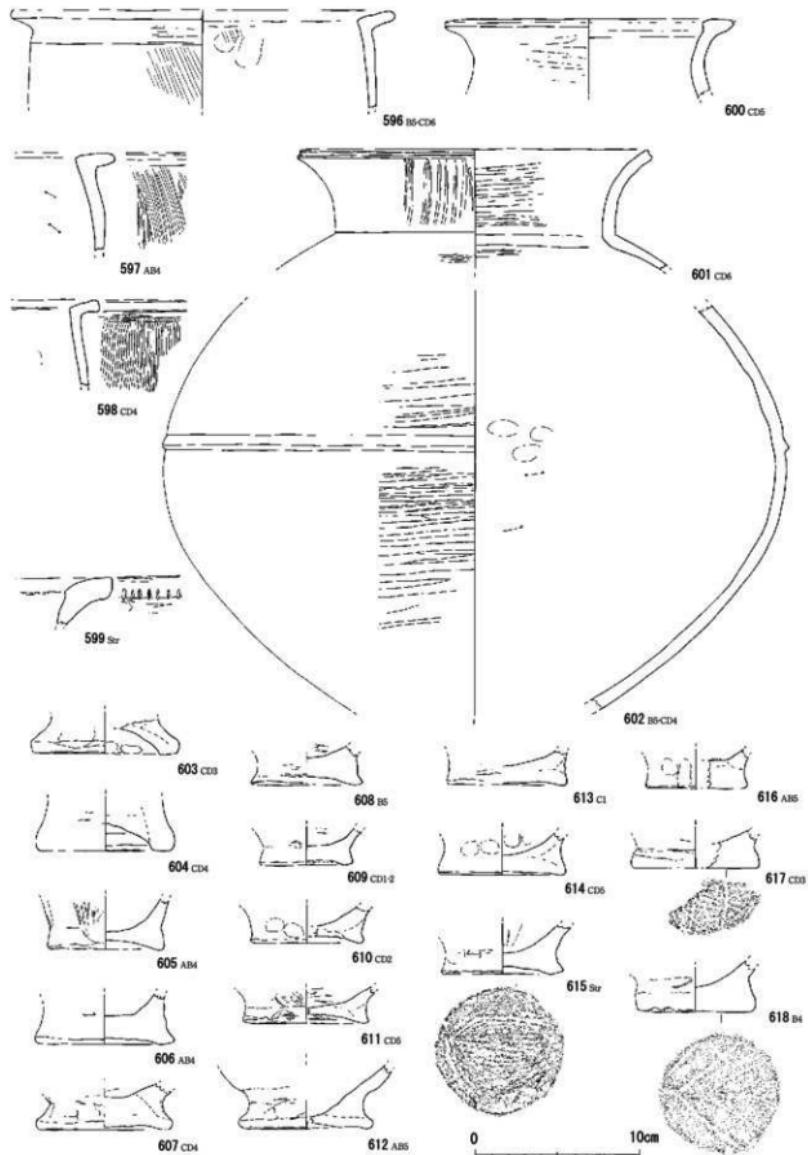


Fig. 73 6 层出土器实测图12 (1/3)

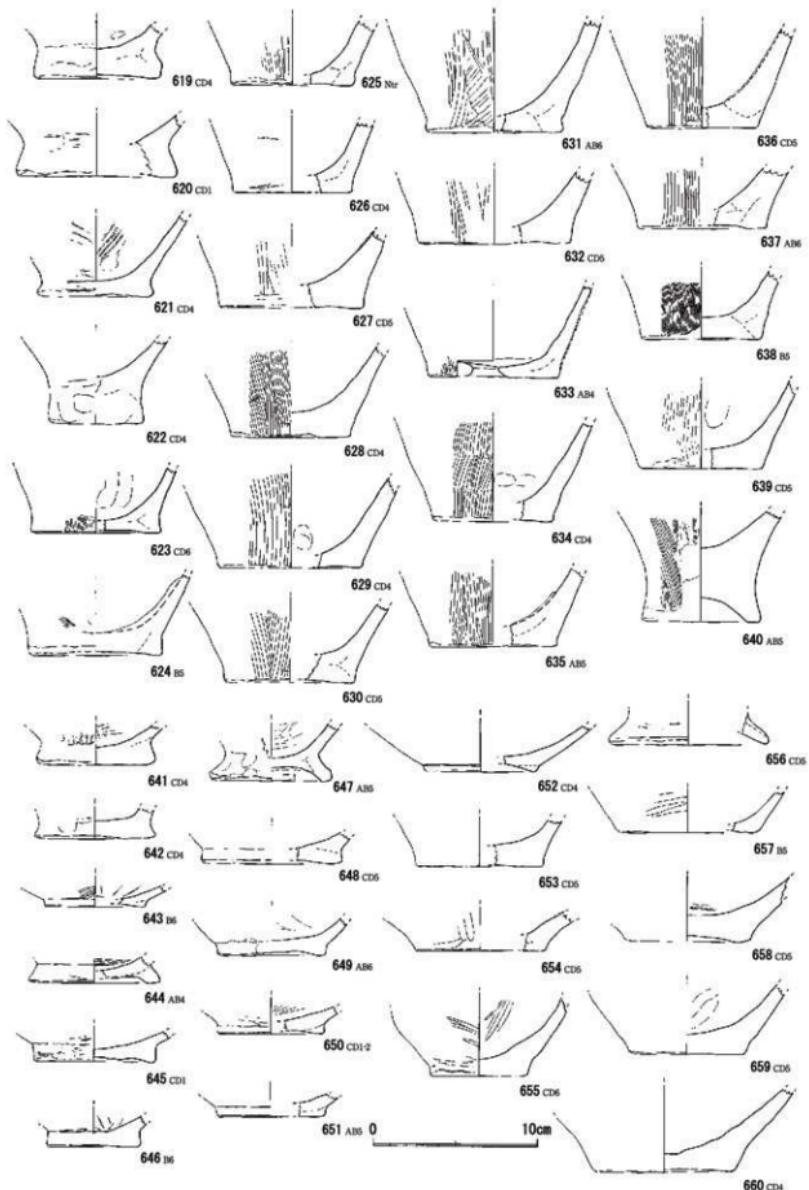


Fig. 74 6層出土土器実測図13 (1/3)

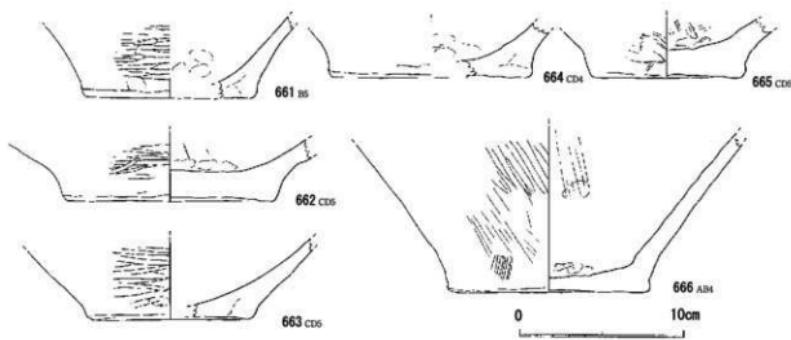


Fig. 75 6層出土土器実測図14 (1/3)

660から666は大型壺の底部である。研磨またはナデ調整で仕上げる。665は外面底と外面に削りが残る。663は外面が橙色で赤色顔料を塗った可能性がある。660は胎土、器面が橙色である。他は灰褐色を呈す。

7層出土土器 (Fig. 76)

676、677は刻目突帯文、678から680は外反口縁の壺である。678の外面には煤が付着し、内外特に内面の刷毛目調整が良く残る。681から684は壺である。681はナデ調整でわずかに刷毛目が見られる。682、683は細い沈線で施す。684は外面研磨調整だが器面は荒れる。口縁部を一部欠く。685は外反口縁、686は口縁がわずかに折れる鉢である。

8層出土土器 (Fig. 77~85)

701から756は刻目突帯文の壺である。701から703はAB2グリッドでつぶれた状態で出土し、701、703はほぼ完形に、702は1/2程が接合復元できた。いずれも内外面に荒く強い横方向の擦痕が見られる。外面には炭化物が付着し、701、703は内面下部に輪状に炭化物が薄く残る。704は1/6からの復元で外

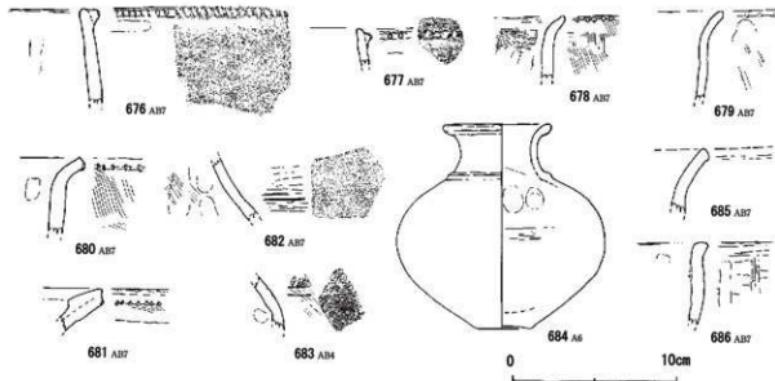
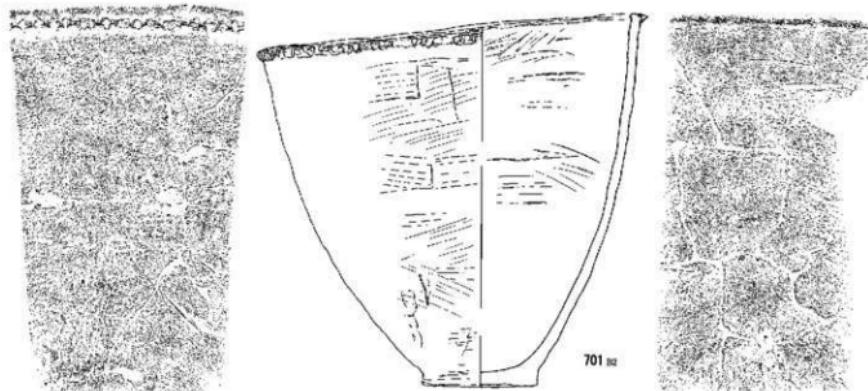
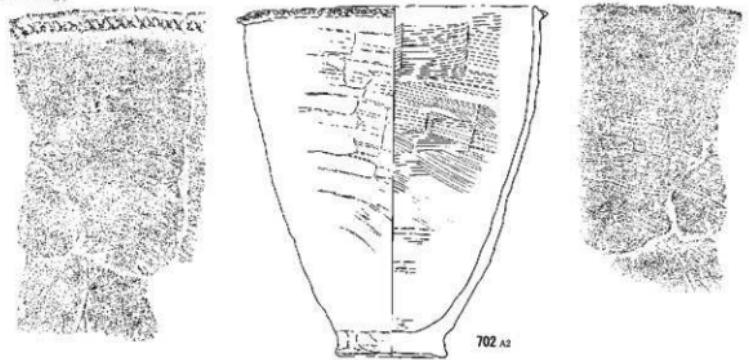


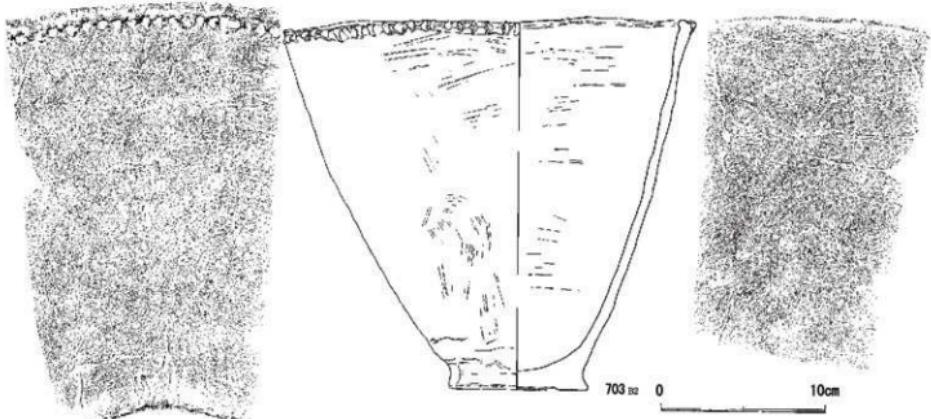
Fig. 76 7層出土土器実測図 (1/3)



701 A2



702 A2



703 A2 0

10cm

Fig. 77 8 层出土土器实测图 1 (1/3)

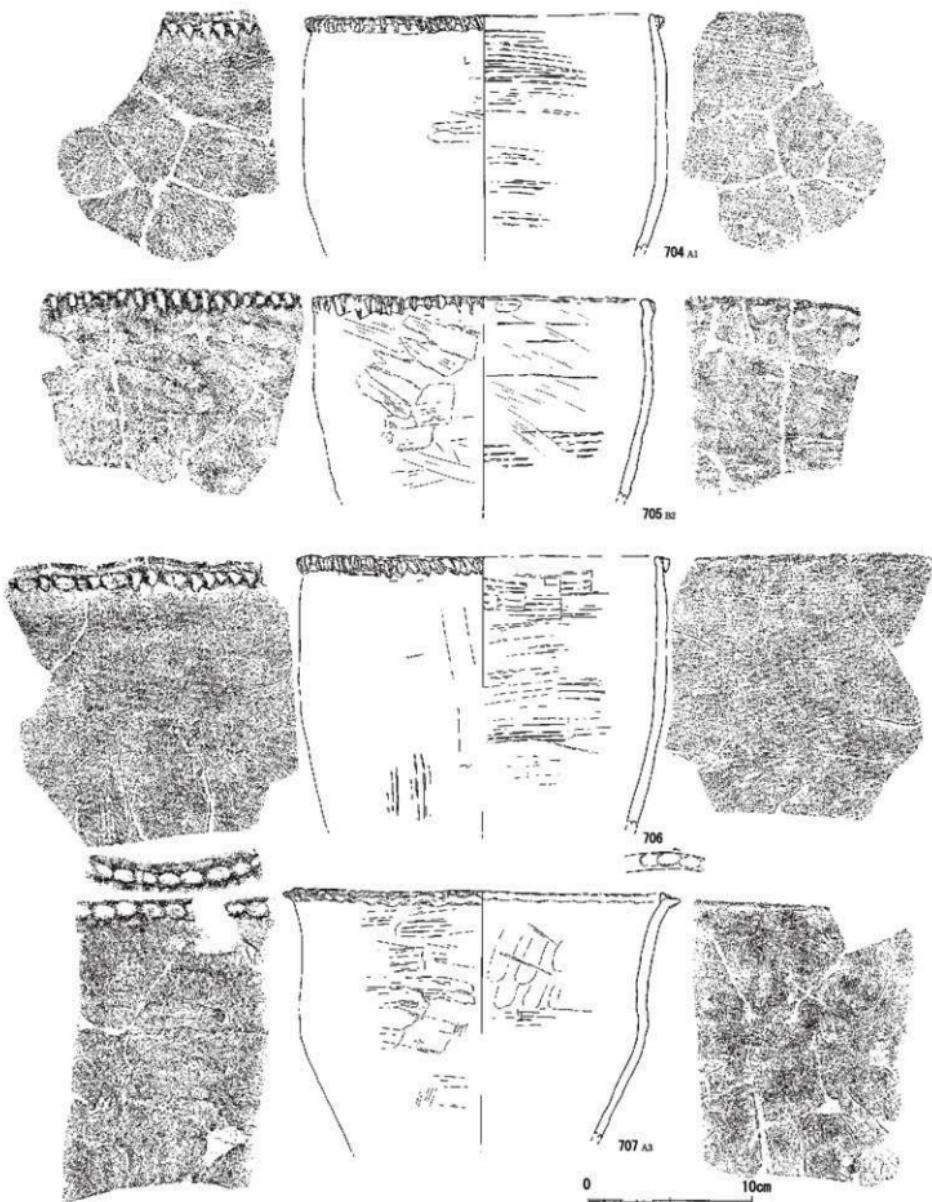


Fig. 78 8層出土土器実測図 2 (1/3)

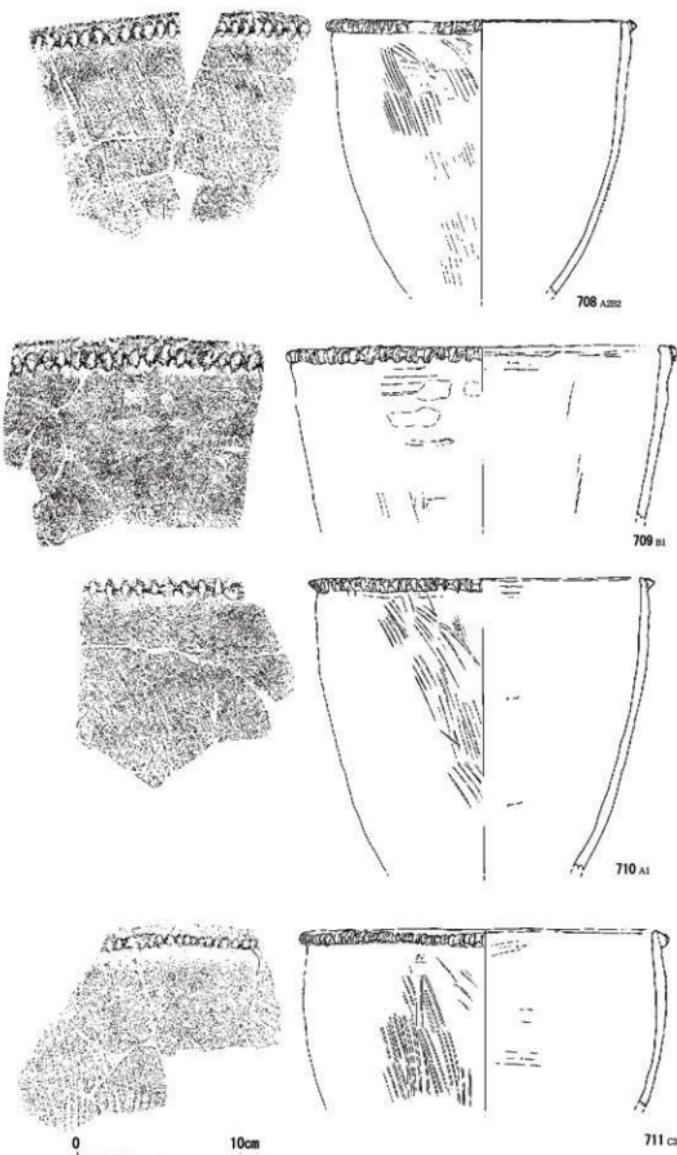


Fig. 79 8 层出土土器実測図 3 (1/3)

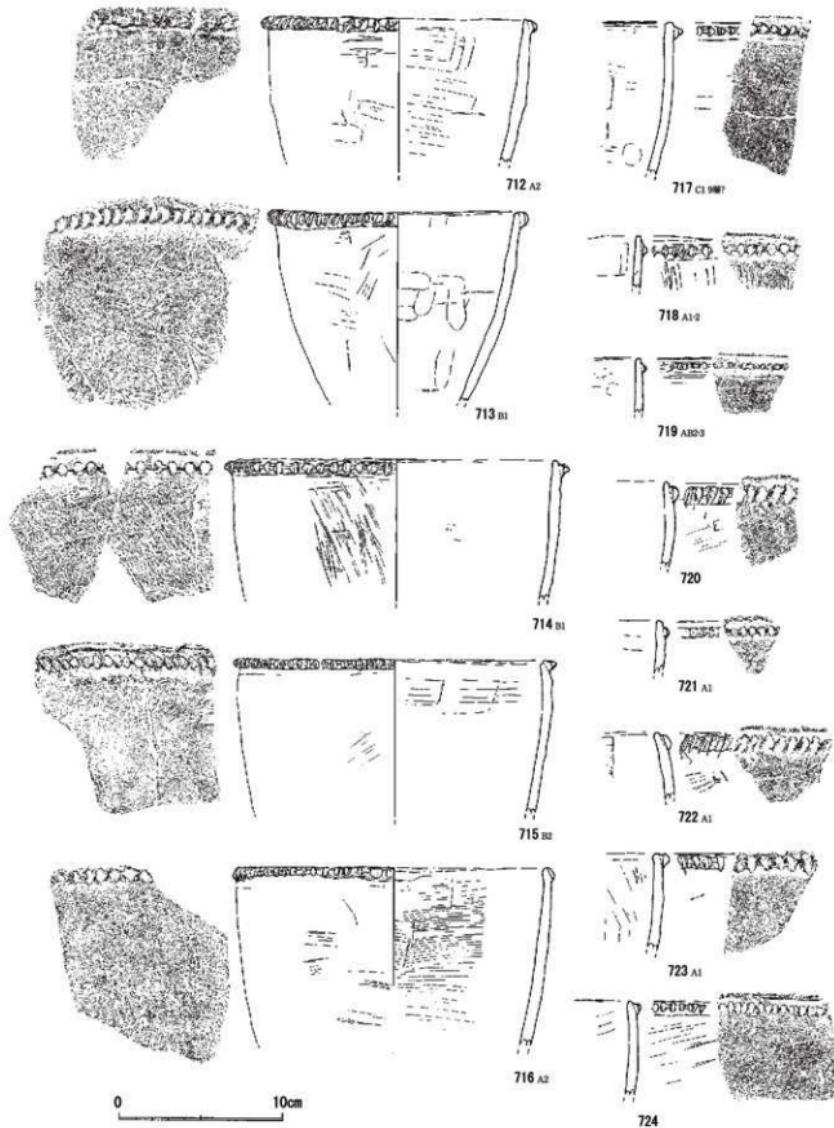


Fig. 80 8 层出土土器实测图 4 (1/3)

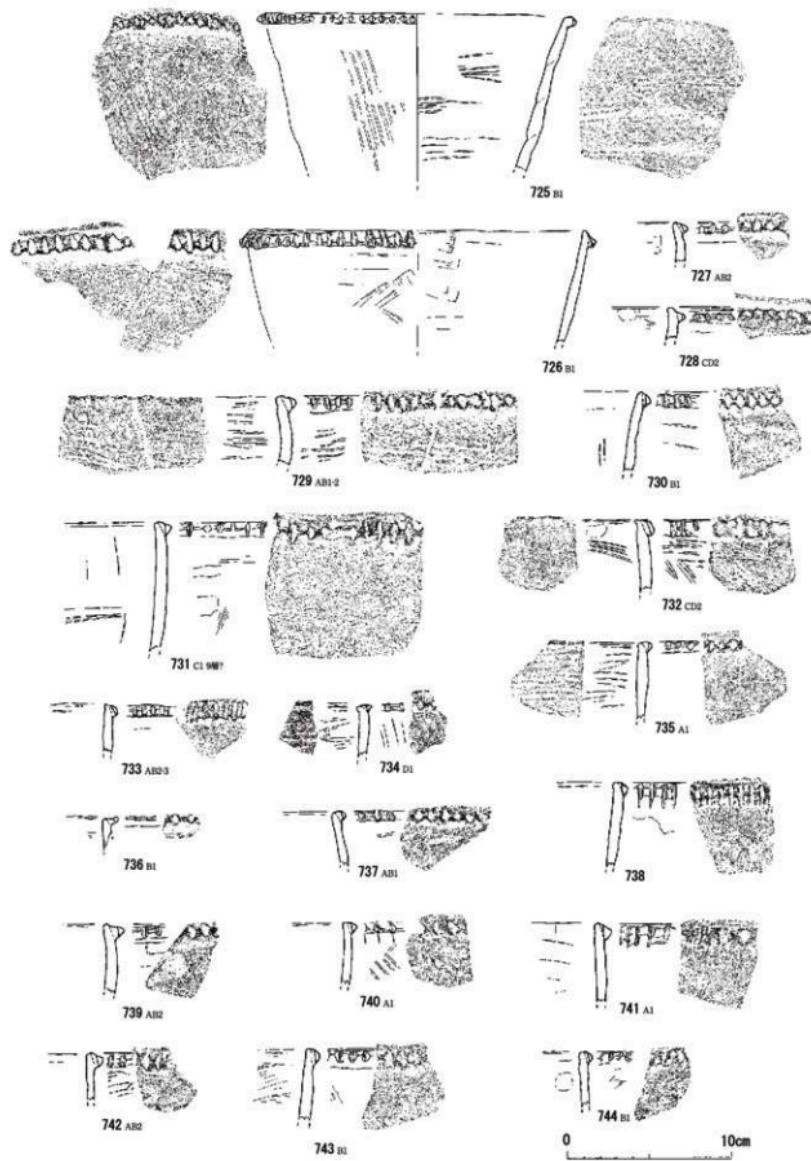


Fig. 81 8層出土土器実測図 5 (1/3)

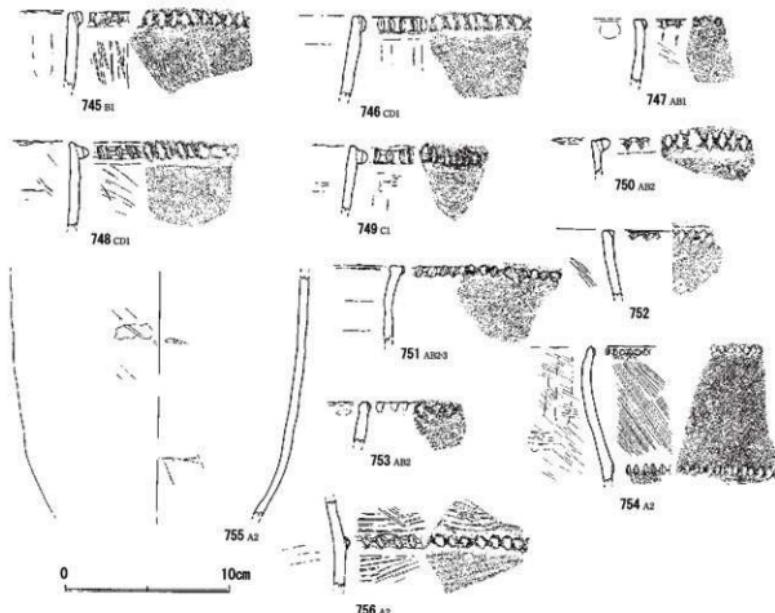


Fig. 82 8層出土土器実測図 6 (1/3)

面荒れ気味でナデ、内面条痕の後ナデ。705は外面荒い削り状の擦過で、内面は条痕の後ナデ。706は外面ナデで炭化物が付着し、内面は浅い条痕とナデを施す。707は口縁部がほぼ一周する。上層との接合が目立つ。突帯を指で摘むことで突帯上面にくぼみ状の刻みを施す。外面は荒いヘラナデ状の調整と擦過、ナデで煤が付着する。内面は擦過とナデで指おさえも見られる。708から711は1/2から1/4が残存する。外面縦方向の条痕で炭化物が付着し暗褐色を呈す。709は後にナデる。内面ナデ調整で淡灰茶色を呈す。710、711は外面条痕調整で煤ける。712は外表面擦過後ナデ。713は外面は擦過後ナデ、内面荒れ気味でナデである。714は外面横方向の擦過のち縦方向の削り、内面ナデ調整。715は外面荒い擦過後ナデ、内面擦過。716は外面擦過後ナデ、内面は擦痕が明瞭に残る。712から716はいずれも外面に炭化物が残る。717から724は突帯を口唇部から若干下がった位置に貼付する。外面は暗茶褐色を呈し若干煤ける。718、720に条痕が見られ、他は擦過のちナデである。内面は淡茶褐色でナデまたは擦過である。725は1/6からの復元で外面縦方向の条痕、内面条痕のあとナデである。726は1/6強からの復元で外表面とも擦過で淡黄色を呈す。729から750は小振りの突帯を口唇部に接してまたは被るように貼付する。729は内外面の横方向条痕が深い。732の内外、735の内面、734、740、745の外面に条痕が見られる他はナデまたは擦過である。730、735、736、737は淡黄褐色で、他は煤けた暗褐色から灰褐色を呈す。730は口唇が橙色、内面は淡橙色で化粧土を施したように見える。751、752は摘み出した様な小さな突帯で、外反気味で胴部で屈曲する可能性がある。753は直立する口縁部を刻む。754は胴部が屈曲し、口縁部と屈曲部を直接刻む。内外刷毛目で外面は特に明瞭に施す。756は外面に

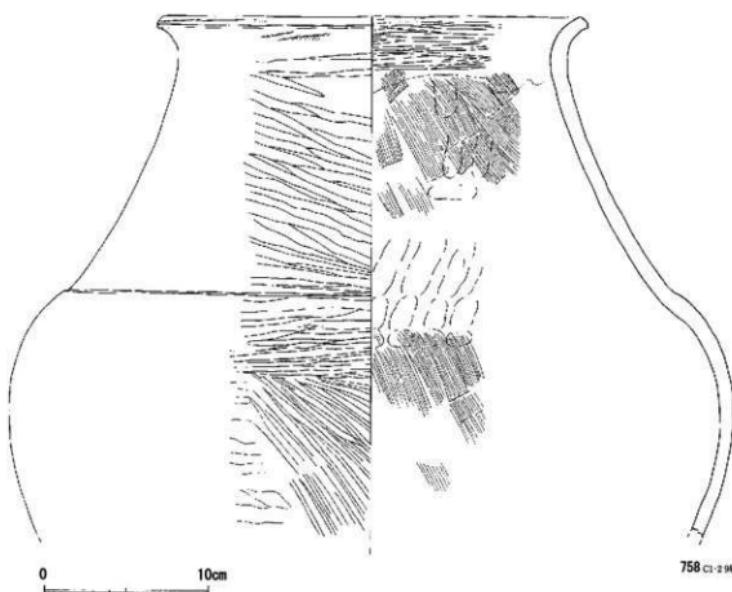
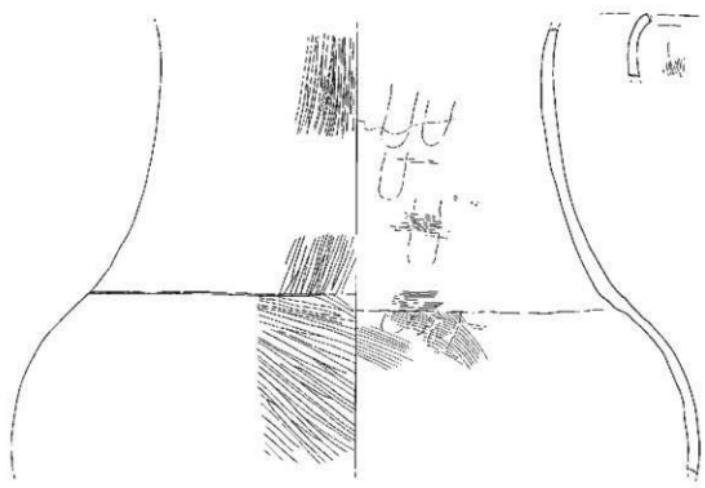


Fig. 83 8 层出土土器实测图 7 (1/3)

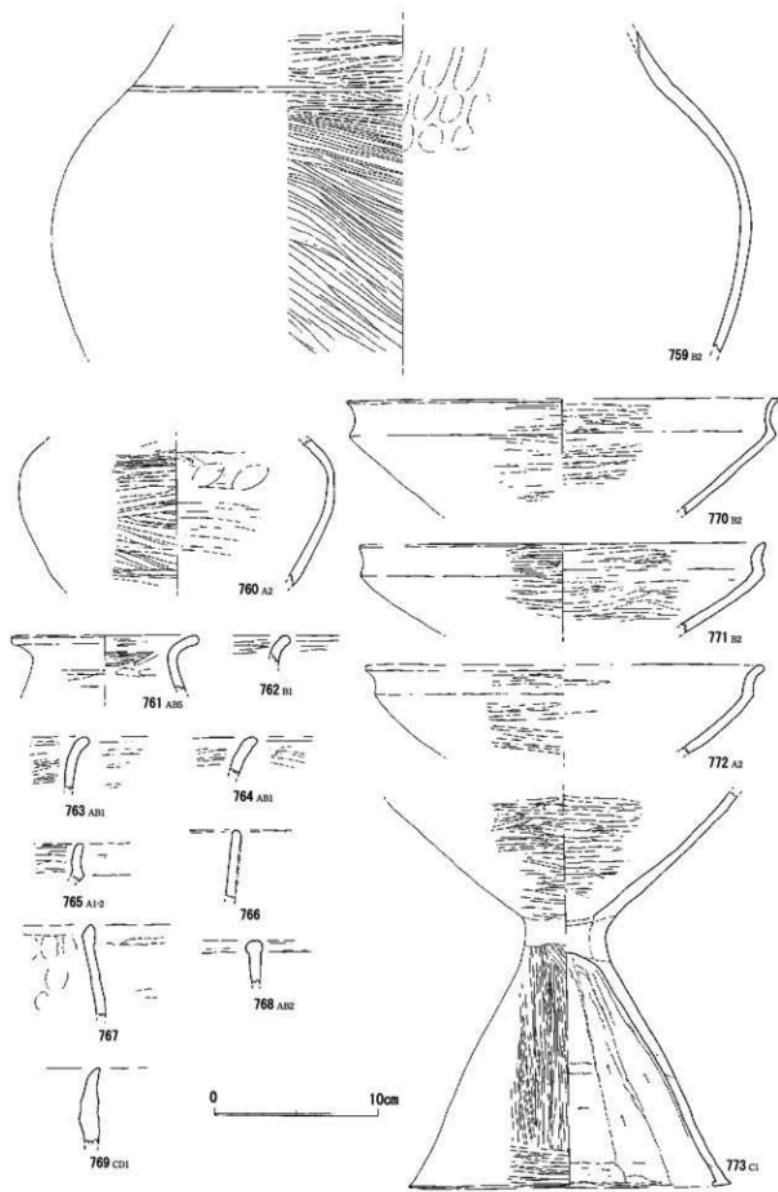


Fig. 84 8 层出土土器实测图 8 (1/3)

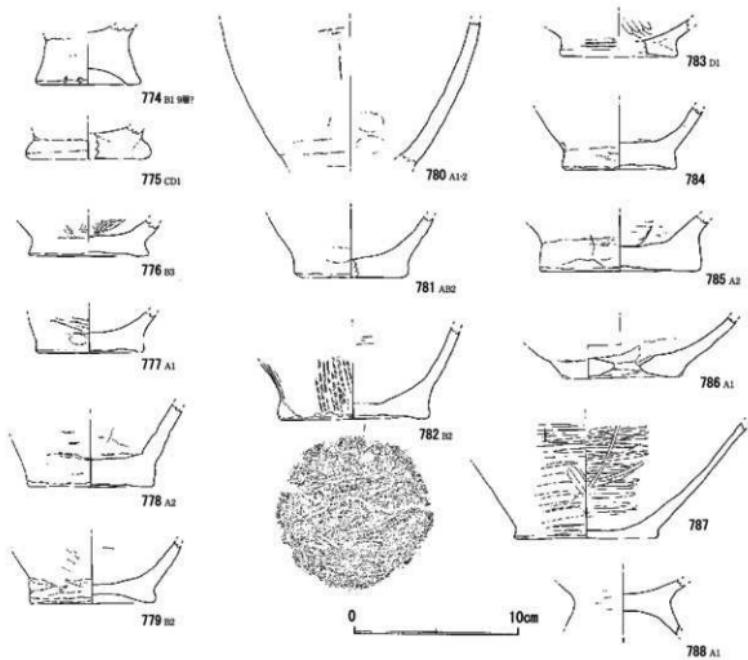


Fig. 85 8層出土土器実測図9 (1/3)

横方向の条痕を施し、内面はナデる。755は内外ナデ調整で外面に削り、内面に擦痕が残る。外面橙白色、内面淡橙色を呈す。

757、758、759は大型の壺で外面に赤色顔料を施し橙色を呈す。757は外面は研磨調整。内面は頸部がナデ、胴部は刷毛目を施し淡黄褐色を呈す。赤色顔料は頸部上部まで見られる。口縁部は接合しないが同一個体と考えている。頸下部の1/6強から復元した。傾き、径共に不確実である。758は外面頸部は研磨、胴部は研磨および刷毛目で口縁部直下に木口痕が残る。内面は口縁部は横方向の研磨で顔料を施し、頸部は刷毛目、胴部は荒れて指圧痕が残る。口縁部の1/4から復元した。759は外面研磨調整が顯著に残る。1/4から復元した。760から763は小型の壺である。760は外面研磨で淡茶色を呈し、内面は擦痕が見られる。761は暗灰色を呈し、内外面研磨で口縁部外面は横ナデを施す。762、763は淡橙白色を呈し内外研磨で同一個体の可能性がある。

764は丁寧なナデで壺または鉢である。765は短く屈曲する浅鉢で内面研磨。766から769は直口の鉢または甕形の器形になると考えられる。ナデ調整で766、767はわずかに煤ける。770から772は浅鉢または高坏で内外面に研磨を施す。770は暗褐色を呈し、口縁部外面に赤色顔料を施す。771は淡灰褐色を呈し口縁部は橙色がかる。化粧土を施したものか。772は暗褐色から黒褐色を呈し、口縁部が開き気味で高坏かと思われる。773は高坏で全体に淡灰褐色を呈し、外面は脚部裾と坏部は横方向、脚部は縦方向の研磨を施し光沢を持つ。坏部内面は研磨の後ナデ、脚部内面はナデである。脚部は横方向の粘土帶接合痕と縦方向に接合した痕跡がある。脚坏接合部には突帯が剥げた痕跡がある。9層に含ま

れる可能性がある。

774は上げ底が強く橙色がかった淡茶色を呈す。775から782は断面台形底で突帯文甕の底部と考えられる。外面ナデまたは削りで777から779、782は底も削る。782は条痕が顕著である。内面は776に擦痕が見られる他はナデ主体である。780、782内面には炭化物が付着する。783から787は壺または鉢の底部と考えられる。783は外面ナデ、内面黒色研磨で浅鉢と考えられる。784は内外ナデで体部が丸みを持つが甕の可能性もある。785はナデで外面に橙色の赤色顔料が見られる。底には木葉痕状の筋が見られる。786は焼成後の穿孔があり灰色を呈す。787は内外面研磨で外面は強く施す。やや深い黒色を呈し器壁が薄い。浅鉢状の口縁部かと思われる。788は脚部が長く、胴部は広がる。

9層出土土器 (Fig. 86, 87)

789から791は刻目突帯文土器である。789は外面は縱方向の条痕で全体に煤けて暗褐色を呈し、内面は横方向の条痕の後軽くナデて淡灰茶色を呈し底に煤が薄く輪状に付着する。口縁部から胴部は

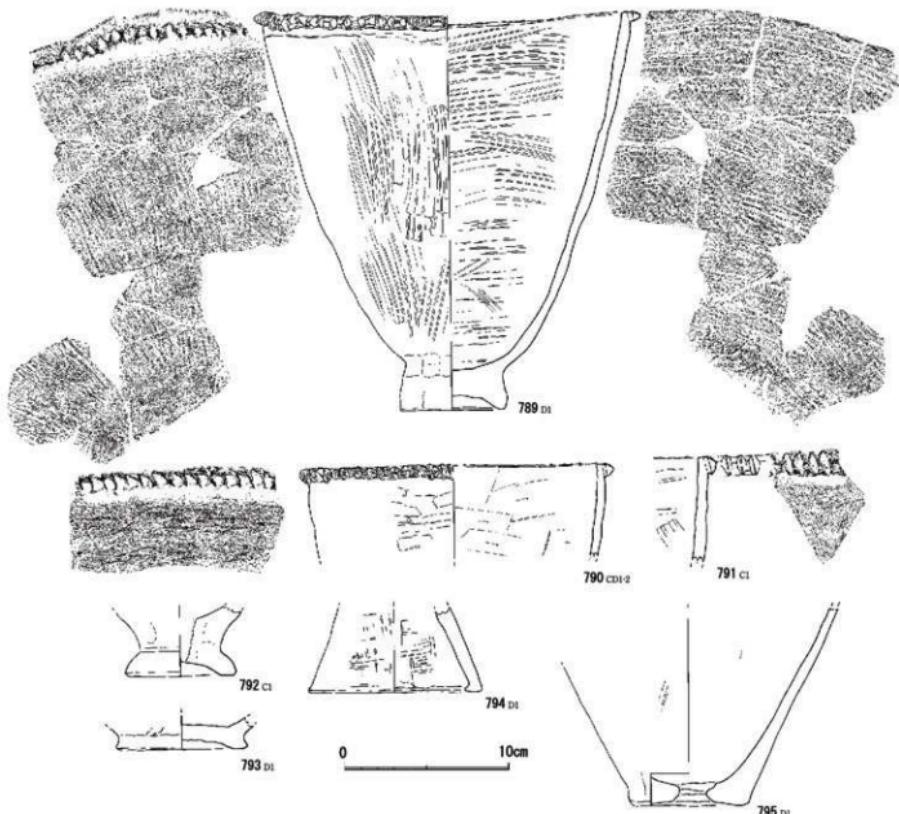
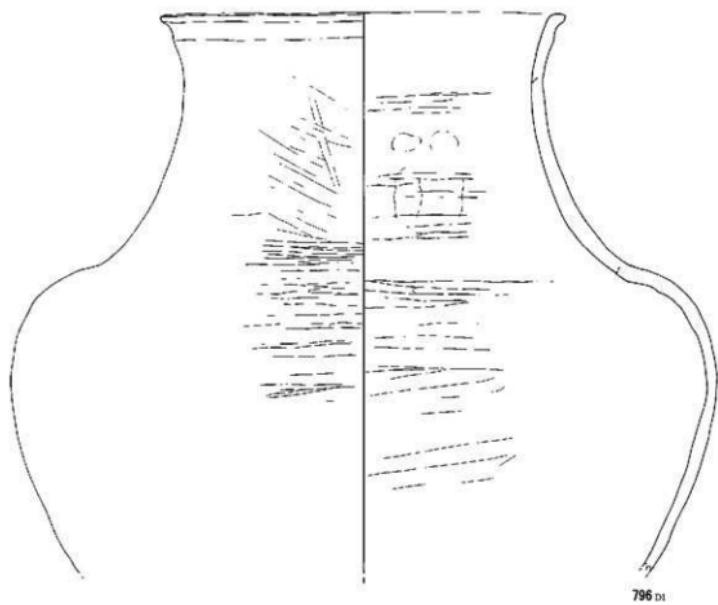
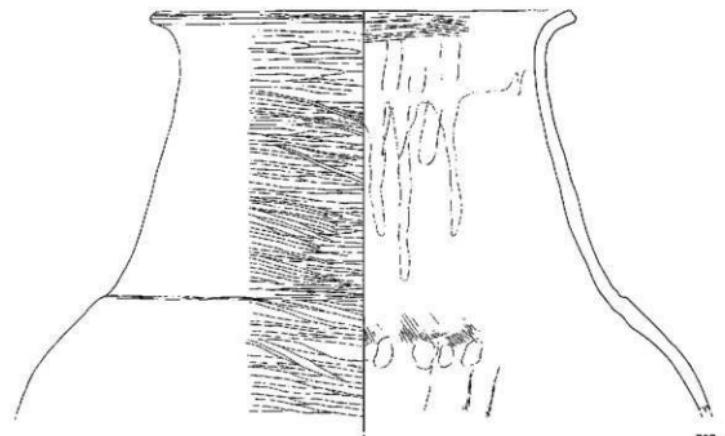


Fig. 86 9層出土土器実測図 1 (1/3)



796 DI



797 DI

0 10cm

Fig. 87 9 層出土土器実測図 2 (1/3)

1/4前後が残存する。790は外面横方向のヘラナデ状の後ナデ、内面横方向のナデである。792は断面台形で橙色を呈す壺の底部、793は暗褐色を呈し、粗砂を含む。機種不明。794は淡灰茶色を呈し外面ナデ状の研磨、内面はナデで擦痕が残る。795は外反口縁の壺の底部と考えられる。底に焼成後の穿孔を施す。内外面ナデ調整で外面に炭化物が付着する。796は小片に割れてまとめて出土した。外面橙色がかった淡茶色を呈し研磨調整、内面研磨およびナデ調整を施す。1/4強からの復元。797は外面及び内面上部に赤色顔料を施す。外面は横方向の研磨、内面は口縁部は研磨、頸部以下はナデで刷毛目がわずかに残る。頸部の1/3からの復元である。

出土層位不明土器 (Fig. 88~91)

798から841は刻目突帯文の壺である。798は外面を擦過状のナデを下から上へ施し、内面には擦痕が残る。1/6からの復元である。799から804は口唇部よりやや下がった位置に突帯を付す。802はとりわけ下がる。805から807は張り出しを持ち、内傾が強い。807は突帯ではなく口唇部刻みである。これ以下は口唇部に被るように突帯を付す。茶褐色から灰褐色を呈し、ナデを施すものが多い。808、811、821は外面に条痕が、817、827、833は削り痕が残る。834は突帯上面に強い横ナデを施す。

836から841は二条突帯の壺と考えられる。841は外面削り、内面に擦痕が見られる。

842から853は外反口縁の壺である。外面に刷毛目調整のものが多い。842、843は外反が弱い。843はナデ調整である。844は急に短く屈曲し、外面削り状で炭化物が付着し、内面横方向のヘラナデ状で作りは突帯文土器に近い。845から848はナデで、847外面には炭化物が付着し、848の口縁部には木口痕が見られる。849には若干の煤が付着する。853は刻目ではなく、胴上部に横走沈線を施す。854は連續した二条の刻目突帯部である。外面は浅い条痕状の調整が見られる。

855から873は壺である。855は内外面に赤色顔料を施す。1/6からの復元。858は外面ナデ、内面研磨、857は外面研磨、内面ナデ、859は内外面研磨で順に1/4、1/6、1/6からの復元である。861は外面刷毛目が残り赤色顔料を施す。862はわずかに外面肥厚し研磨調整。863は口縁下の指圧が強く、浅く幅広の沈線を施す。864は外面に浅い段が付く。865、866は内外面研磨で865は口縁下に段を成形する。867はナデ調整である。868は削りだし突帯を持ち、胴上部に複線弧状文を沈線で描く。869は頭から胴にかけて沈線、左下がりの斜線、右下がりの斜線の順に細い沈線で施文する。870は細い線で横線と斜線を描く。871は上3本、下2本の併行横線の間に無軸羽状文を密に描く。872、873は3本の併行横線を描いている。

874から887は鉢等を集めた。874から877は黒色研磨の浅鉢で875は外面に赤色顔料を施していた可能性がある。878、879はわずかに外反し丸みを持つ器形であろう。880は小片で内外面に赤色顔料を施す。壺の可能性もある。881は淡橙色を呈し赤色顔料の痕跡がある。882は外面黒色研磨で胎土が細かい。884は内外面ヘラナデ状で外反し口縁部は内湾気味である。885、886は傾き不明。886は外面に赤色顔料を施す。881は若干外反気味である。888は高坏の口縁部、889は脚部で器面は荒れるが丁寧な研磨が一部残る。890は勤先口縁の壺で内面荒れ、外面ヘラナデである。

891と892は上げ底が高い。立ち上がりは急で壺になるのだろうか。893から901は台形または立ち上がりが急な突帯文の壺と思われる。893は内面底に輪状に炭化物が付着する。894は外面ナデ、底は削り、内面の底を広く成形する。896は外面ナデ、底は削りである。899の底には木葉痕がくっきり残る。900は外面は上方向の条痕状の削りが深く顯著で、底も深い削りが残る。内面は擦過とナデで若干の炭化物が残る。901は外面荒い研磨、内面横方向の条痕の後ナデ調整である。902から905は外反口縁の壺の底部である。若干上げ底で底はナデる。外面は刷毛目調整で902はその後ナデる。

906から914は壺または鉢の底部である。906から908は断面薄い台形状をなす。906と908はナデ調整

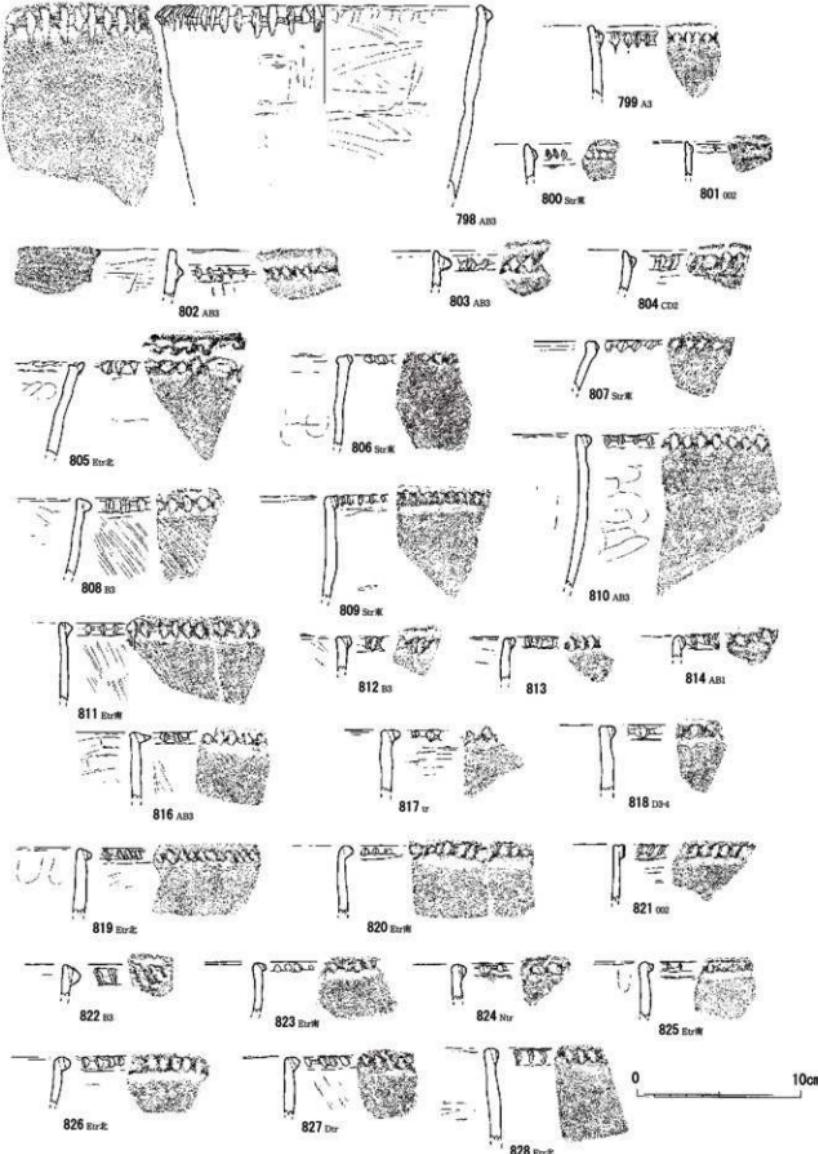


Fig. 88 出土層位不明土器 1 (1/3)

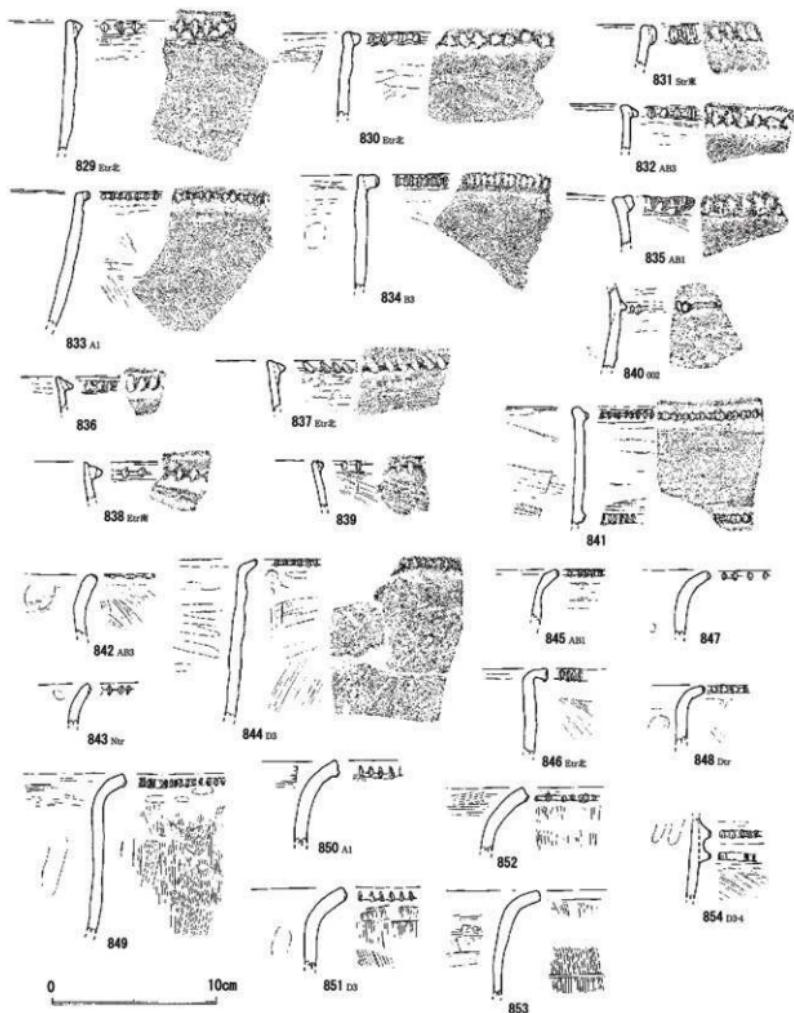


Fig. 89 出土層位不明土器 2 (1/3)

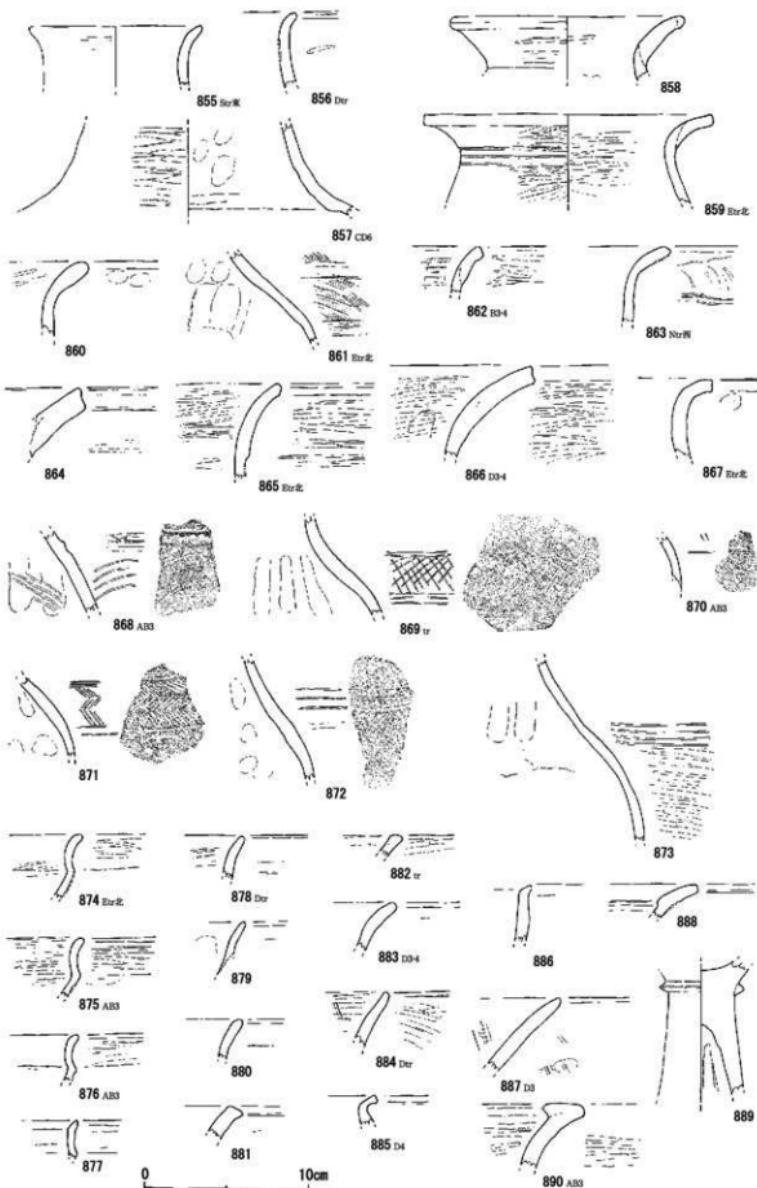


Fig. 90 出土層位不明土器 3 (1/3)

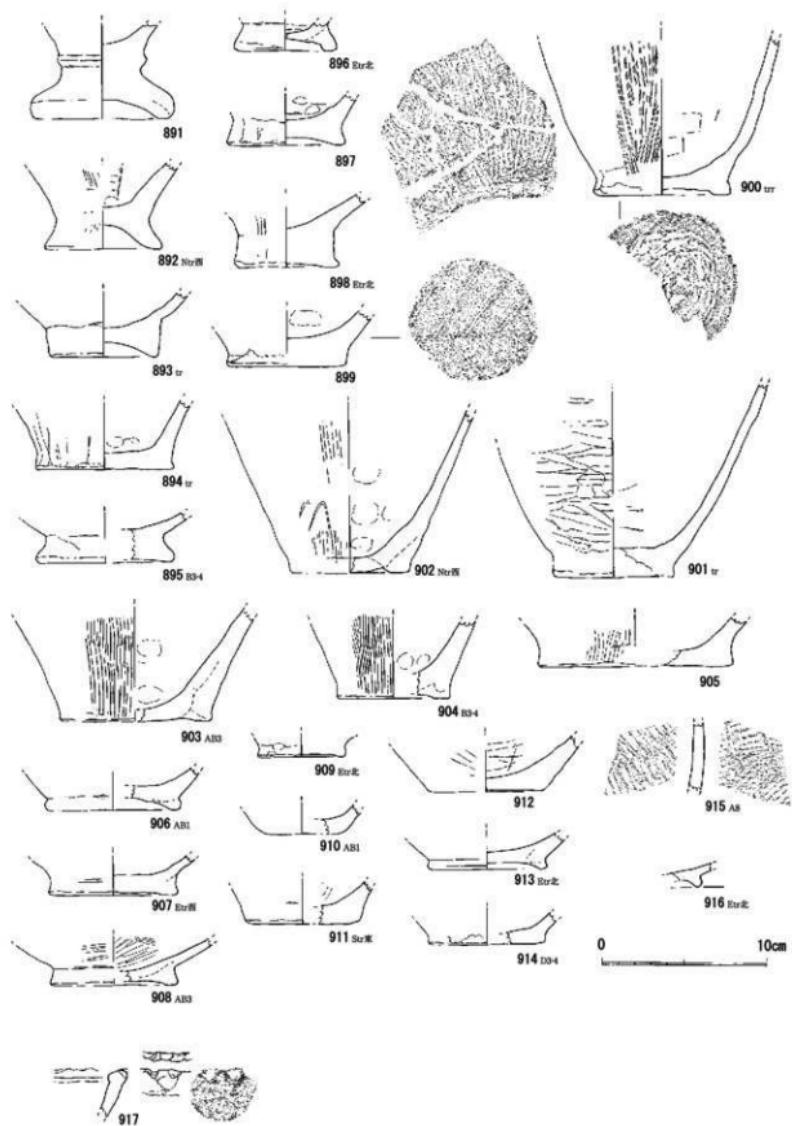


Fig. 91 出土層位不明土器 4 (1/3)

である。908は内外面黒色研磨で浅鉢と思われる。909は小壺と考えられ外面ナデ調整で内面は荒れる。910は内外面黒色で丁寧なナデ調整をほどこす。小型の壺と思われる。911は内外荒れている。壺の可能性もある。912は外面黒色研磨、内面はヘラナデ状である。913は胎土に細砂粒を多く含む。器面荒れ気味でナデか。内面に赤色顔料が見られる。浅鉢か。914は内外ナデ調整の小型の底部である。

915は須恵器の胴部片で内外面に平行叩き痕が見られる。916は瓦器椀の底部である。

917は阿高系の深鉢で口縁部に指頭による刻目を施す。胎土は砂粒を多く含み茶褐色を呈す。

(2) 土製品(Fig. 92)

921と922は壺転用の紡錘車である。焼成後に穿孔し、側面を摺って面を整えている。923は土鍤で摩耗により大きさは不明である。胎土に砂粒をほとんど含まない。孔の径は口部分は8mm程だが最大で18mmまで広がる。924から939は土器片を転用した土製円盤と考えた。930、939は側面を摺って整形しているが、他は打ち欠きのみである。破片の誤認があるかも知れない。

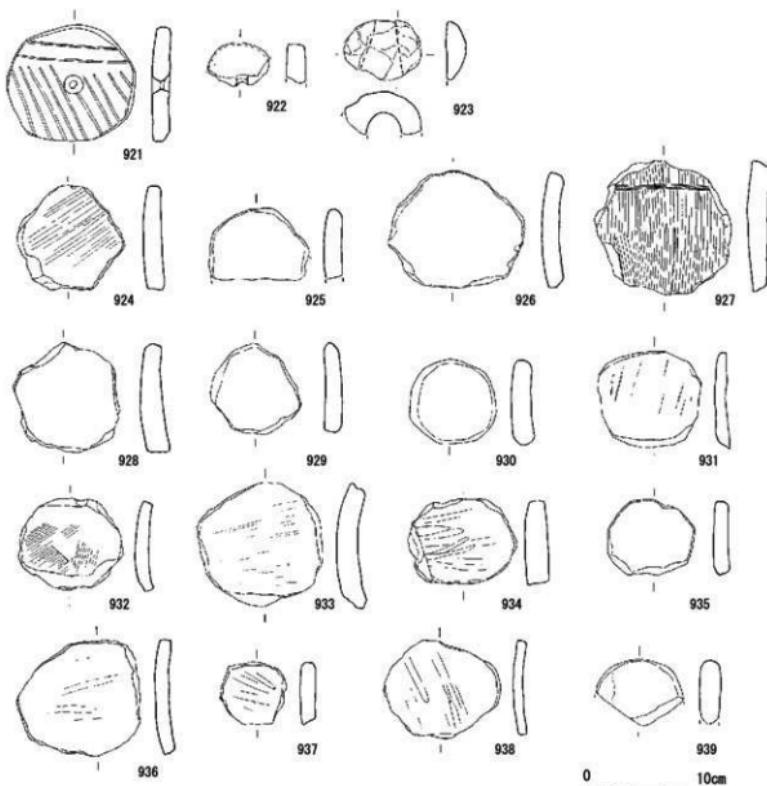


Fig. 92 土製品実測図 (1/2)

(3) 石器 (Fig. 93~96)

各層から石器が出土したが、出土数が少ないため一括して示す。礫石器は図示した以外に石斧の剥片、石包丁と思われる石材、滑石片等がある。剥片石器のほとんどが黒曜石で、剥片、核の量に対して製品は少ない。出土グリッド、計測値は表に示した。

石斧 941、942は玄武岩製の石斧である。941は風化が著しく研磨痕は見られず敲打痕が残る。942は刃部端片で端正に研磨が施されている。器面の残りは良い。943は柱状片刃石斧と考えた。器面は丁寧に磨かれ擦痕がある。側面は一方向の切断時の研磨痕が明瞭に残る。端部は鋭い。

叩き石 944から951は叩き石の類と考えている。944は不確実だが先端に敲打痕のものが残る。945は円礫で器面の荒れもあって明確な敲打痕は不明だが持ちやすい大きさ、重さである。946はおむすび状の形態で、端部で敲打を行った可能性がある。特に4つの角部は作業に適し、持ちやすい。947は棒状の先端を磨いて刃部状に整形し、先端部に敲打痕が見られる。体部には摺った痕跡が残る。948は四角錐状の上下面を欠く。器面の荒れが著しい。3次調査では6角錐状のものが出土している。949は円盤状を成す。器面に敲打痕のくほみが多数ある。950、951はそれぞれ錐状、棒状に持ちやすく整形する。端部がつぶれ、敲打に使用したと考えられる。951は柔らかい石材である。

石包丁 952、953は薄い石材に貫通していない穿孔途中の痕跡が残る。952は表裏の対応する部分にくほみが見られる。953は脆い石材で裏面は剥げ、対応するくほみがあるか不明である。

砥石 954から956は研磨具として使用した可能性がある擦痕、面があるが、砥石という器種に当てはまるかは不確実。954は板状に整形し、特に刃部状部分に擦痕が明瞭に残る。955は表面に細かな擦痕が見られる。956は一面が平坦で研磨によるものか。自然礫の可能性もある。

装身具? 957は一対の小さな抉りを入れる。器面は風化により荒れ、他に加工痕は見られない。性格は不明。

石錘 958、959は扁平な自然礫を使用した錘である。958は一対の側面を小さく欠いて抉りを成形する。959は四辺の特に長辺を大きく剥離して抉部を作っている。

石鎌 960から968の9点が黒曜石製の石鎌である。960、961は略二等辺三角形を呈し、基部をわずかに内湾させる小型品である。細かな剥離を施し仕上げている。962は二等辺三角形の肩部が若干張る。やや厚みがあり、わずかに剥片の主剥離面を残す。先端部を欠く。963も二等辺三角形を呈し、比較的大きな剥離で成形する。片面の基部の剥離は薄く大きめである。先端部を欠いている。964は透明感のある石材で薄く仕上げている。片面に自然面を残す。965は三角形を呈し、やや荒い剥離で仕上げる。966は縦長の二等辺三角形を呈し、細かな剥離を施す。967は片面に主剥離面を残し、先端を欠く。968は大型品で、主剥離面には片側の端部に2つの剥離を施すのみで、背面側辺に連続した剥離を施す。側辺、基部には自然面を残し、原石の角部分の剥片を使用していることが伺われる。

石錐 969から971を形態から錐としたが不確実である。969は主剥離面を残し、背面には自然面が見られる。断面は略三角形を呈す。側辺に細かな剥離を施し、先端には楕状剥離がみられる。970は厚みのある剥片の主剥離面片側側辺にのみに、細かな剥離を施す。石鎌の未製品とも考えられる。断面三角形の縦長剥片の主に片側面に細かな剥離を施す。先端を欠いている。

削器他 972から977、983は明瞭な連続した剥離が見られる。削器と性格を異にするものもある。972は一部欠損する部分以外の側辺に、角度がある搔器状の剥離を施している。剥離は図左の左上部分の一部を除いて主剥離面から施されている。973は3側面に自然面を残す。一辺に集中して表裏からの剥離を施し、刃部を形成する。974は2カ所に欠損があり全形が不明である。全面に小剥離が施され、薄く仕上げる。鎌とも考えたが判断できなかった。975は厚みのある剥片の主剥離面に剥離を施す。

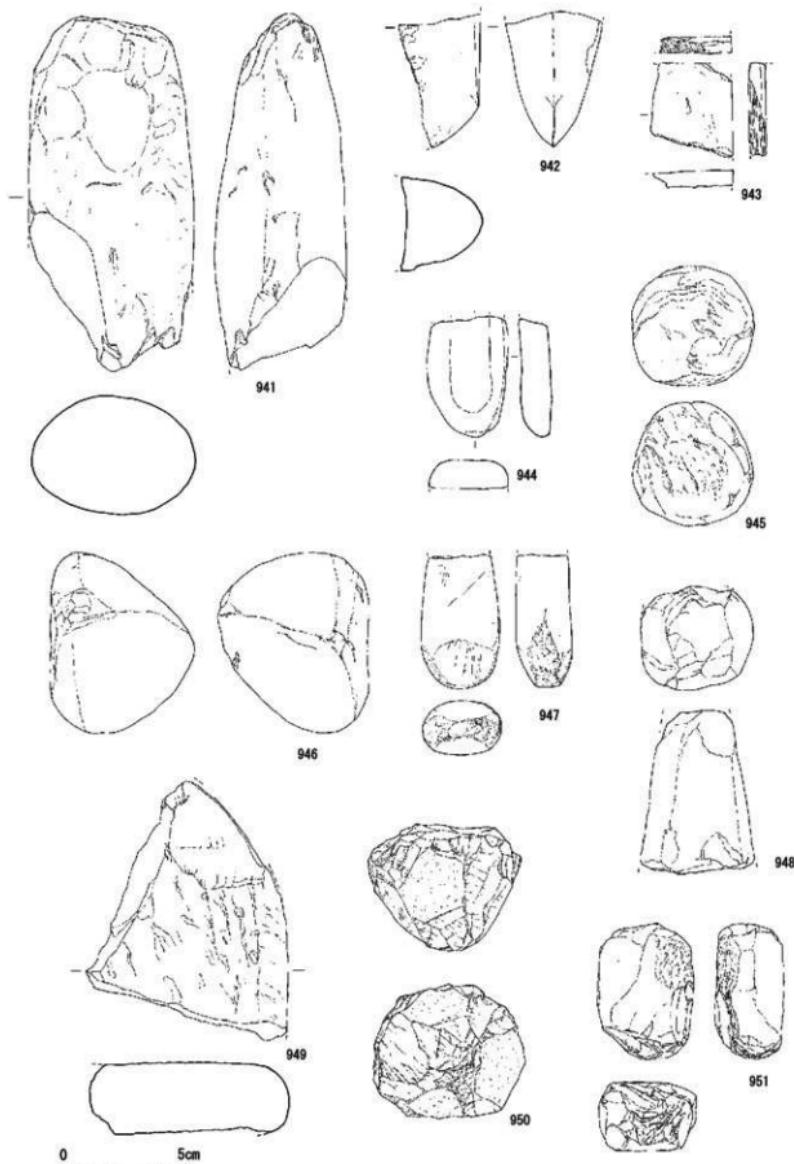


Fig. 93 石器実測図 1 (1/2)

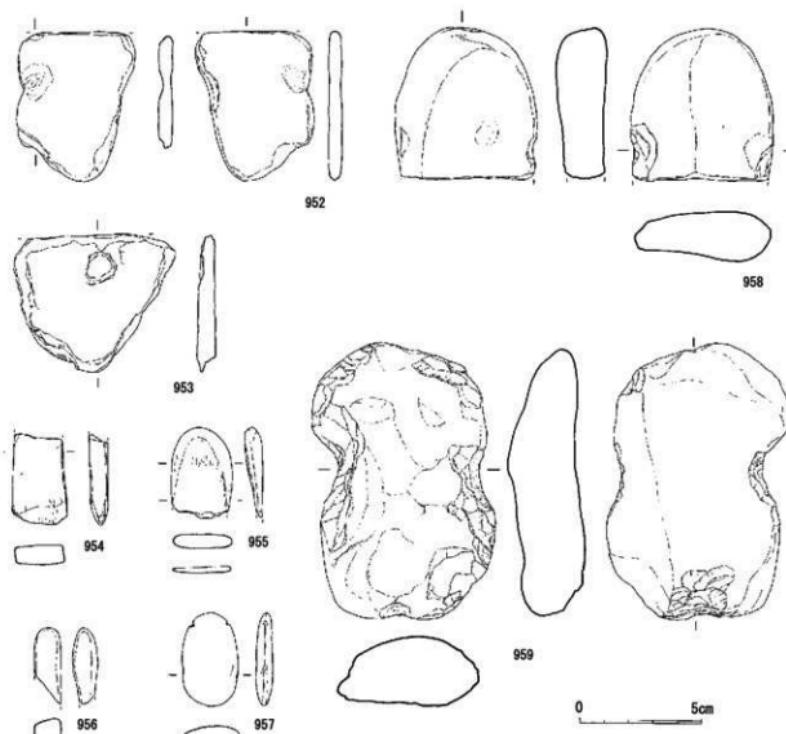


Fig. 94 石器実測図 2 (1/2)

976は片側辺に自然面を残す縦長剥片の側辺に剥離が見られる。977は横長剥片の主に背面の3辺に細かな剥離を施す。持ちやすい形状と厚みである。983は大型の縦長剥片で、断面三角形を呈し、背面は自然面である。側辺に小剥離を施すが少ない。剥離は片側は主剥離面から、もう一方は主に背面から施している。

使用痕のある剥片 今回多くの剥片が出土したが、そのうち88点に微細な剥離を確認し使用痕の可能性を考えた。厳密な意味で使用痕であるかは不明である。使用した可能性がある剥片である。形が整った縦長剥片はほとんどなく、横長もしくは不整形の剥片がほとんどである。大きさも2cm弱大から大きいもので4cmほどである。978から985を図示した。978は上下に自然面を残す剥片の片側に小剥離が見られる。979は主剥離面側の剥離の角度が深く、鎌等の未製品の可能性もある。980は背面は自然面で、主剥離面の片側辺に大きめの剥離が見られる。981は薄めの縦長剥片両側面は鋭利で一部に連続する小剥離が見られる。982は厚めの剥片の4辺に自然面が残る。一側面に微細な剥離が見られる。984は薄手の縦長剥片の両側辺に微細な剥離が見られる。985は背面に多く自然面を残し、主に片側辺に微細剥離が見られる。

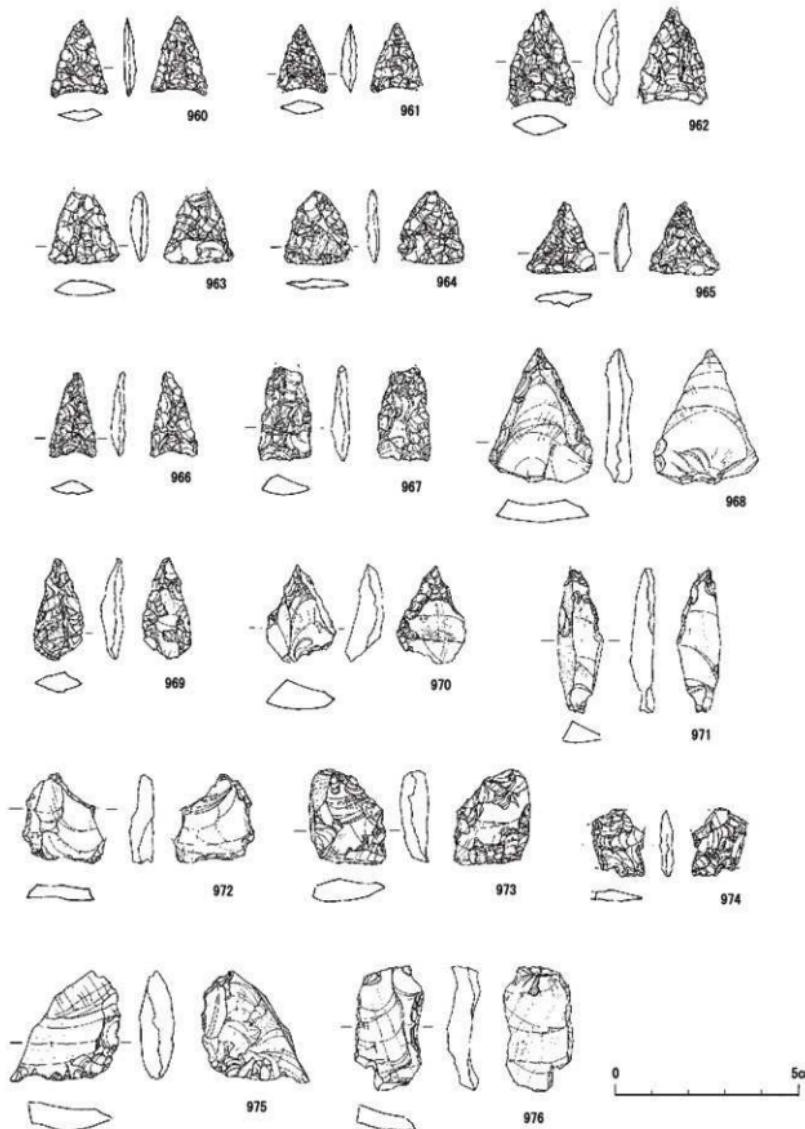


Fig. 95 石器実測図 3 (3/4)

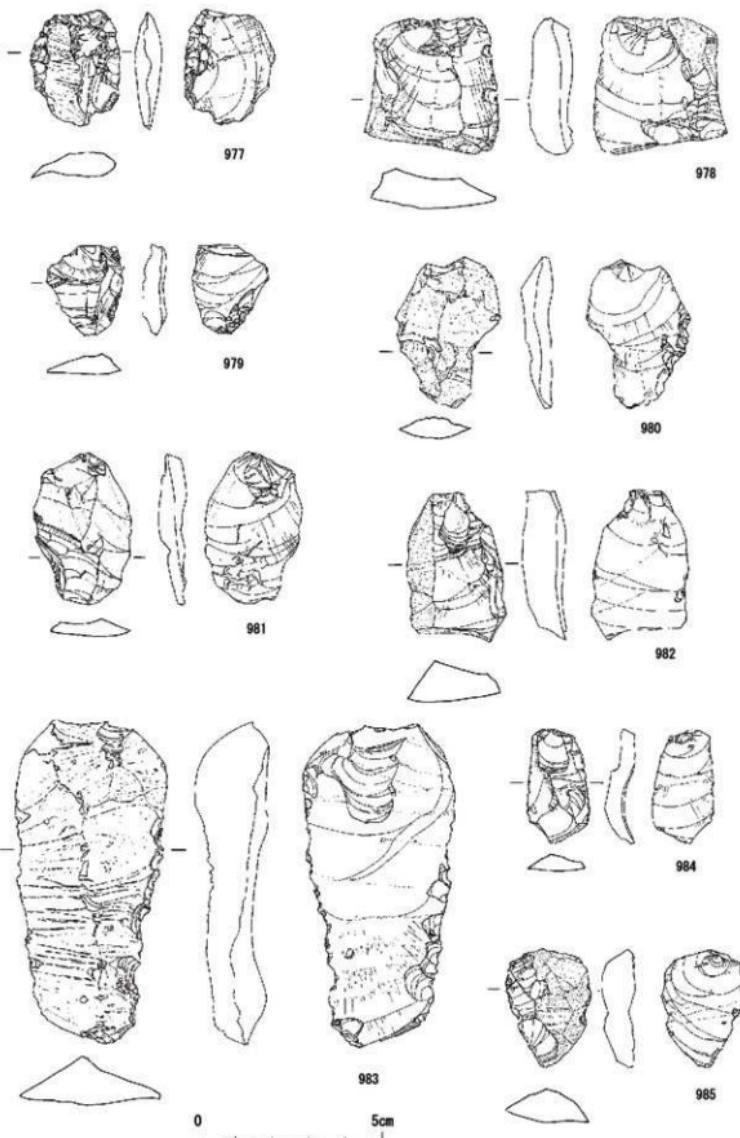


Fig. 96 石器実測図 4 (3/4)

表2 土製品、石器掲載一覧

標図番号	器種	出土グリッド	層	大きさ(cm)	重さ(g)	材質	標図番号	器種	出土グリッド	層	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
921	劫鉢車	CD6	6	53×48×7	26.1	鐵	954	石磚	Str		35×22×8	10.35	瓦列
922	劫鉢車			25×18×8	4.06	鐵?	955	瓦石	A6	7	37×25×7	8.25	瓦列
923	土鏡	AB7	7	33×25×8	9.88	鐵	956	瓦石	D	4	31×11×10	4.98	織物紋岩
924	円盤狀土製品	AB7	5	44×42×8	16.77	鐵	957	裏身貝		3	38×23×7	9.46	貝殻
925	円盤狀土製品	CD3	5	40×29×7	9.6	鐵	958	石磚	AB5	6	62×58×21	125.22	玄武岩
926	円盤狀土製品	AB5	6	55×43×7	20.9	鐵	959	石磚	AB5	5	112×71×27	305.29	玄武岩
927	円盤狀土製品	CD4	6	51×55×8	30.4	鐵	960	石磚	CD4	6	22×15×3	0.79	黑曜石
928	円盤狀土製品	CD5	6	42×44×9	22.31	鐵	961	石磚	AB7	5	19×14×4	0.74	黑曜石
929	円盤狀土製品	CD5	6	31×36×7	11.02	鐵	962	石磚	AB4	5	26×18×7	2.60	黑曜石
930	円盤狀土製品	CD5	6	35×44×8	12.6	鐵	963	石磚	Ntr	4	20×20×5	1.58	黑曜石
931	円盤狀土製品			42×39×6	10.61	鐵?	964	石磚	CD4	6	20×17×3.5	1.04	黑曜石
932	円盤狀土製品	BS	6	43×37×6	11.78	?	965	石磚	C1	6	20×19×4.5	1.00	黑曜石
933	円盤狀土製品	CD6	6	51×51×9	27.68	鐵	966	石磚	AB4	5	24×13×3.8	0.81	黑曜石
934	円盤狀土製品	CD5	6	44×34×9	17.66	鐵	967	石磚	AB4	5	25×13×5.0	1.68	黑曜石
935	円盤狀土製品	AB2		35×30×6	8.81	鐵	968	石磚	AB4	5	37×29×7.0	5.77	黑曜石
936	円盤狀土製品	CD3	6	50×47×6	17.98	鐵	969	石磚	Ntr	4	28×12×5.6	1.65	黑曜石
937	円盤狀土製品	CD4	6	26×26×6	6.16	鐵	970	石磚	AB4	5	27×19×7.5	2.99	黑曜石
938	円盤狀土製品	A2	8	48×39×4	11.02	鐵	971	石磚	CD4	6	29×12×6.2	2.49	黑曜石
939	円盤狀土製品	CD2		36×27×9	8.67	鐵	972	石磚	Str	5	24×22×6.5	3.16	黑曜石
941	石斧	AB2	3	145×68×48	755.47	玄武岩	973	石磚	AB6	4	25×29×6.5	4.06	黑曜石
942	石斧	CD5	6	54×30×39	77.96	玄武岩	974	石器	AB7		19×19×3.4	0.69	黑曜石
943	石斧?	AB3hr		38×33×6	13.1	質疑?	975	石器	Ntr	4	23×32×9.3	6.35	黑曜石
944	棒状	A6	7	49×33×12	24.12	砂岩	976	石器	CD4	6	34×19×6.8	4.75	黑曜石
945	敲打具	CD1	3	51×50×6	200.55	鐵	977	石器	AB4	5	32×25×7.2	4.79	黑曜石
946	敲打具	AB7	7	74×58×33	311.20	花崗岩	978	UF	AB1	8	27×36×10.7	36.46	黑曜石
947	敲打具	CD5	6	54×32×23	72	玄武岩	979	UF	CD2	3	25×20×6.8	2.06	黑曜石
948	敲打具	CD2	6	67×47×43	139.6	花崗岩	980	UF	AB7	5	41×29×8.5	6.74	黑曜石
949	敲打具	CD6	5	112×80×27	277.19	砂岩	981	UF	Etr		41×27×7.0	5.78	黑曜石
950	敲打具	A6	6	63×55×51	227.23	玄武岩	982	UF	A1-2	8	40×26×11.4	12.22	黑曜石
951	敲打具	A1	8	56×38×28	104.84	鐵	983	彫器	AB1	8	88×41×19.3	56.53	黑曜石
952	石錠	CD4	6	61×48×6	31.08	変成岩系	984	UF	AB3	5	31×17×5.5	2.52	黑曜石
953	石錠	B6	6	56×65×8	38.96	変成岩系	985	UF	B3	4	32×23×88	5.69	黑曜石

表3 刺片石器組成（安山岩以外は黒曜石）

刺片	碎片	UF	コア	石鑿	削器	錐	原石	安山岩	合計
3層	56	51	2	2			1		112
4層	15	22	4	7	1	2	1	1	53
5層	102	59	23	17	5	1	1		208
6層	142	111	39	29	2	1	1	3	331
7層	13	14	3	7					37
8層	11	6	6	8		1			32
9層				1					1
不明	147	46	11	7		1		1	213
合計	486	309	88	78	8	6	3	6	987
%	49.3	31.3	8.9	7.9	0.8	0.6	0.3	0.6	100

(4) 獣骨(図版17)

986、987は6層出土のイノシシの歯である。986は右下顎のM3奥側1/3ほどである。咬耗は進んでいない。淡茶色を呈す。CD1・2の6B層出土で弥生時代前期のものと考えられる。987は小片で表面が剥げた状態で位置等の詳細は不明である。CD4の6層下部の粗砂層出土でやはり弥生時代前期の可能性が高い。獣骨の記述にあたっては、本市教育委員会の屋山洋の教示を得た。

(5) 木器

調査区からは杭、板きれ、流木がしがらみ、杭列、包含層から出土した。杭は先を尖らせたものがほとんどで、中には先端を焼いているものが少量ながらあった。これらについて図化は行っていない。そのほかの製品はない。

5) 小結

2次調査では弥生前期から中期の河川SD01と東岸の微高地に堆積した包含層を検出した。

遺構、包含層の時期 河川SD01は5、6層がその堆積で、弥生時代前期を主体とし、若干の中期前半の土器が出土した。前期は刻目突帯文土器、板付I式から前期末まで全般におよんでいる。河川堆

積であり、遺物と遺構の関係は限定し難いが、東岸の包含層との連続も考慮して前期前半から中期前半までの幅の中で長期に存在した可能性を考えておきたい。

東岸で確認した8、9層はほぼ刻目突帯文土器のみが出土している。数個体がつぶれた状態で出土し、破片も大きなものが多い。廃棄後、あまり移動していない状況と考えられる。9層では板付I式と考えられる底部795が存在し、刻目突帯文土器は夜臼I式に遡るものは見られない。夜臼IIaからIIb式にかかる時期幅で形成されたものと考えられる。

遺構、遺跡の性格と広がり 8、9層形成期の夜臼II式から板付I式期には、東側の微高地に集落等の生活圏の存在が予想される。その規模を知る情報はないが、小規模なものと考えられる。前期ではSD01が流れ、3次調査で検出されたしがらみが構築されたと考えられる。また、西岸の粘質土10層も前期までの遺物が出土し、これに打ち込まれた杭列が存在する。約60m西の1次調査でも同様の粘質土に杭列が並び、これが一連のものであれば、水田が広い範囲に営まれた可能性が想定される。杭列の時期は弥生前期以降としか言えない。

石器 剥片石器は表3のように剥片、削片、石核が多い割に、製品の数が少ない。剥片は均整のとれた縦長剥片ではなく、小型で不整形なものが多い。出土した原石は最大で5cm大で剥片の大きさにも表れている。石材は安山岩が若干見られるが、ほとんどが黒曜石である。これらの特徴は刻目突帯文期から弥生前期に見られる状況と同様である。

赤色顔料 表1(37頁)のように壺、浅鉢の赤色顔料からベンガラ、水銀朱が検出された。また、今回は、器面が赤い壺(430)が、鉄分由来の発色であることが確認された。これが意識的に顔料、または化粧土として施されたのかは特定できない。石丸古川遺跡の報告では丹塗りの壺が報告されている。赤い発色の刻目突帯文土器が故意に制作されたものなのか興味深い。

年代測定 SK004で採集した炭化物の放射性炭素年代測定(表4、5)に加え、附編として土器付着炭化物の年代測定を掲載することができた。SK004は6層に帰属し、弥生前期以上の時期を限定することはできない。国立歴史民俗博物館での測定値では板付IIb式期に相当し、整合する。この時期の絶対年代は手がかりとなる資料が限られるが、測定値の増加、交差年代等の研究で議論が深まることが期待される。

表4 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	試料の質	樹種	補正年代BP	$\delta^{13}\text{C} (\text{‰})$	測定年代BP	Code. No.
004	炭化物	不明	2450 ± 40	-27.48 ± 0.84	2490 ± 30	IAAA-32015

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表5 暦年較正結果

試料番号	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)			相対比	Code No.
004	2451 ± 36	cal BC 758 - cal BC 685	cal BP 2,708 - 2,635	0.363	IAAA-32015	
		cal BC 659 - cal BC 646	cal BP 2,609 - 2,596	0.064		
		cal BC 543 - cal BC 480	cal BP 2,493 - 2,430	0.318		
		cal BC 469 - cal BC 447	cal BP 2,419 - 2,397	0.102		
		cal BC 443 - cal BC 412	cal BP 2,393 - 2,362	0.153		

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

福岡市西区福重稻木遺跡第2次調査出土の 弥生早期～前期土器に付着した炭化物の年代学的調査

国立歴史民俗博物館研究部 藤尾慎一郎・遠部慎

1 調査概要

福岡市西区石丸に所在する福重稻木遺跡第2次調査によって出土した弥生早期後半から前期後半にかけての夜臼IIb式、板付I式、IIa式、IIb～IIc式土器7点に付着した炭化物の炭素14年代を測定したところ、2600～2400 ^{14}C BP年代の測定値が出た。較正年代に直すと前9～前5世紀を中心とする点で、これまで国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が測定してきた当該期の土器の炭素14年代値と整合的であるものの、福岡平野における板付I式の炭素14年代としては初めて、2400 ^{14}C BP年代の測定値を得ることができた。また前期後半の福岡平野に出現する、有明海沿岸の亀ノ甲タイプの炭素14年代値もはじめて得ることができた。

2 調査の経過と資料の選定

福岡市埋蔵文化財センターの常松幹雄氏から西区福重稻木遺跡において弥生開始期の土器が出土し、炭化物が付着しているという情報を得た藤尾は、早速調査担当者の池田祐司氏に連絡を取り、2007年3月29日に福岡市教育委員会室見事務所を訪れた。

池田氏から遺跡概要の説明を受けた後、夜臼IIb式と板付I式を中心に27点の試料を採取したが、測定値を得たのは夜臼IIb式2点、板付I式2点、板付IIa式1点、板付IIb～IIc式2点のあわせて7点である。板付I式の資料は粗型壺と胴～底部破片なので、典型的な如意状口縁をもつ板付I式の測定値を得ることはできなかつた。また玄界灘沿岸地域では初めて前期後半の亀ノ甲タイプの測定値を得ることができた。

以下、試料を採取した土器の説明（藤尾）、前処理・測定方法（遠部慎）の順に述べ、最後に得られた測定値の意味（藤尾）することについて考察する。

3 測定土器の考古学的位置づけ（写真1）

測定した土器は基本的に包含層から出土したものである。

資料1 (FUFJ38-a, R132, 図701)

FUFJは歴博試料番号、真ん中は福岡市の取り上げ番号、図は報告書の図番号である。口縁端部からわずかに下がった位置に刻目突帯をもつ砲弾型一条壺である。ヨコナデを丁寧に加えると突帯は縫部に接することになる。夜臼IIb式に比定した。外面とも炭化物が付着していたが、量が多い胴部外面に付着していた炭化物を測定した。

資料2 (FUFJ41, R178, 図795)

底部に穿孔のある板付系壺の底部から胴部にかけての破片試料である。板付I式に比定した。胴部内面に付着した炭化物を測定した。帶状に水平に広がっていたもので煮焦げ系の炭化物と考えられる。

資料3 (FUFJ42, R170, 図706)

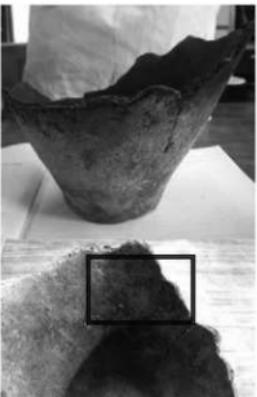
口縁部だけに刻目突帯をもつ砲弾型一条壺である。突帯は口縁端部に接しているが、刻目は大振りで古い特徴をもつ。器面調整が擦過痕であることなど総合的に判断して、夜臼IIa式に比定した。炭化物は突帯から胴部外面全体に付着したスヌ状の炭化物である。

資料4 (FUFJ51, AB7, 7層, 図678)

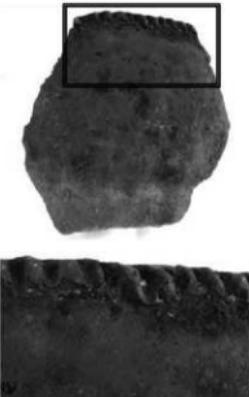
口縁部の外反が弱い板付粗型壺の口縁部破片である。刻目がまばらに施文されている点を重視して板付I式Aタイプに比定した。いわゆる粗型壺である。口縁部外面に炭化物がびっしりと付着していた。スヌと考えられる。



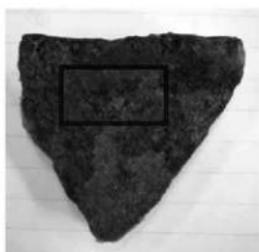
資料1 FUFJ38a、夜白Ⅱb式砲弾型一条壺（上）、胴部外面（下）



資料2 FUFJ41、板付Ⅰ式底部穿孔壺（上）、胴部内面（下）



資料3 FUFJ42、夜白Ⅱa式砲弾型一条壺（上）、口縁部外側（下）



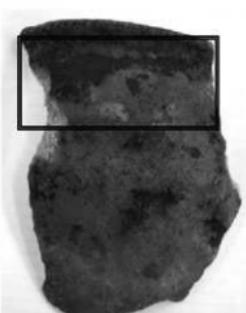
資料4 FUFJ51、板付粗型壺、口縁部外面



資料6 FUFJ54、亀ノ甲タイプ、口縁部外面



資料5 FUFJ53、亀ノ甲タイプ、口縁部外面



資料7 FUFJ55、板付Ⅱa式、口縁部外面

写真1 炭化物の採取箇所（四角く囲んだところ）縮尺不同

資料5 (FUFJ53, B4.6層、図317)

亀ノ甲タイプの口縁部破片である。口縁部だけに刻目突帯をもつ砲弾型一条壺で、大振りの突帯を貼り付ける。刻目は細く浅いヘラ状工具による。突帯の発達具合から板付Ⅱb式併行かやや下る時期に比定した。このタイプの壺の測定値としては玄界灘沿岸地域初となる。突帯の下から胴部に付着した炭化物を測定した。ススと考えられる。

資料6 (FUFJ54, CD4.6層、図340)

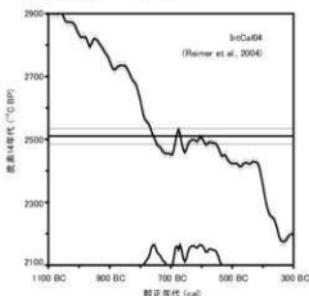
5と同じく亀ノ甲タイプの口縁部破片である。砲弾型一条壺で、突帯は4よりもさらに大きくなっていることから、板付Ⅱc式併行に近づいている。4と同じく、突帯の下にスス状の炭化物が付着していた。

資料7 (FUFJ55, AB5.6下層、図373)

外反口縁をもつ板付系壺である。口縁部の刻目が下端に偏っている

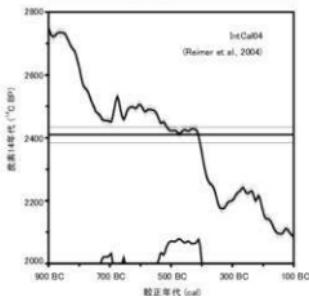
資料1 夜臼Ⅱb式

試料番号 PLFJ-36a
樹齢番号 PLD-9652
度量14年代 $2510 \pm 25 {}^{\circ}\text{C BP}$



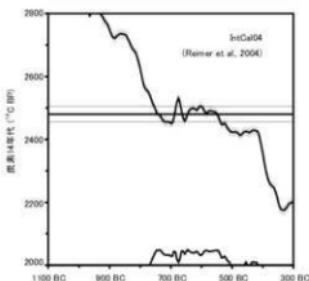
資料3 夜臼Ⅱa式

試料番号 PLFJ-42
樹齢番号 PLD-9654
度量14年代 $2410 \pm 25 {}^{\circ}\text{C BP}$



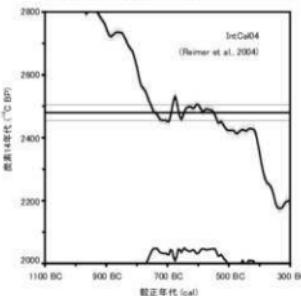
資料5 龜甲タイプ

試料番号 PLFJ-53
樹齢番号 PLD-9657
度量14年代 $2460 \pm 25 {}^{\circ}\text{C BP}$



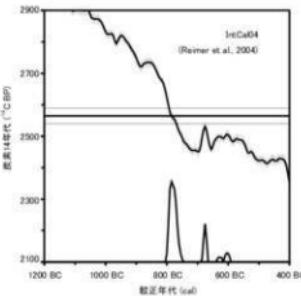
資料2 板付I式

試料番号 PLFJ-41
樹齢番号 PLD-9653
度量14年代 $2460 \pm 25 {}^{\circ}\text{C BP}$



資料4 板付粗型壺

試料番号 PLFJ-51
樹齢番号 PLD-9656
度量14年代 $2565 \pm 25 {}^{\circ}\text{C BP}$



資料6 龜甲タイプ

試料番号 PLFJ-54
樹齢番号 PLD-9658
度量14年代 $2510 \pm 25 {}^{\circ}\text{C BP}$

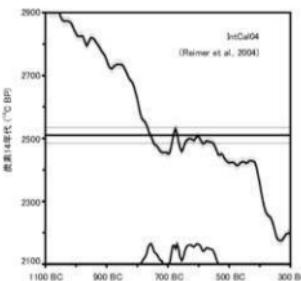


図1 測定試料の確率密度分布図（1）丸数字は資料番号

資料7 板付IIa式

試料番号 PUJ-35
機器番号 PLD-9650
炭素14年代 2640 ± 30 ^{14}C BP

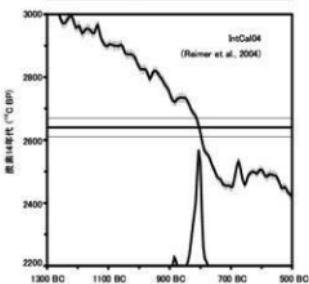


図2 測定試料の確率密度分布図(2)

② 測定結果と暦年較正

測定結果は、同位体効果を補正し ^{14}C 年代、較正年代を算出した。表2に測定結果を示すが、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は、加速器による同位体効果補正のための測定であり、試料自体の正確な値とは言えない。表2には参考値として括弧付きで記しておく。

表1 試料の重量(mg)と炭素含有率

試料番号	採取量(mg)	処理量(mg)	残量(mg)	回収量(mg)	回収/処理	前処理後	燃焼量(mg)	CO_2 (mg換算)	収率
PUFJ-38a	52.83	52.83	0	10.19	19.3%	良	6.15	2.11	34.30%
PUFJ-41	63.76	50.48	13.28	18.86	37.4%	良	2.90	1.34	46.21%
PUFJ-42	133.56	52.34	81.22	11.29	21.6%	良	2.80	1.35	48.21%
PUFJ-51	74.61	51.58	23.03	7.08	13.7%	良	4.00	1.58	39.50%
PUFJ-53	45.83	45.83	0	9.42	20.6%	良	5.41	2.10	38.82%
PUFJ-54	57.29	50.31	6.98	2.64	5.2%	良	2.21	0.77	34.84%
PUFJ-55	103.60	51.35	52.25	1.66	3.2%	良	1.10	0.31	28.18%

採取量：処理量・回収量・燃焼量は、炭化物の重量(mg)、ガスは二酸化炭素の炭素相当量(mg)、率は%、採取量および残量のaは未計量、回収率/処理量(%)、収率は燃焼量/ CO_2 (%)。

5 測定結果と暦年較正(表2)

測定結果を表2に示した。資料1は2510 ^{14}C BPで夜臼IIb式の炭素14年代値としては妥当である。資料2は、2480 ^{14}C BPで板付I式の炭素14年代値としては初の2400年台だが、誤差の範囲内なので整合的である。資料3は2410 ^{14}C BPで夜臼IIa式としては新しきぎ、仮に夜臼IIb式としても新しきぎのため、説明できない測定値である。資料4は、2565 ^{14}C BPで板付I式としては整合的な年代である。資料5と6の亀ノ甲タイプは、2480 ^{14}C BPと2510 ^{14}C BPであった。2400年問題の後半から前半に位置する本型式の測定値として2510年は古く出過ぎていると考えられるが、下限の部分でおさまっている。IntCal04上の位置を確定できない。資料7は、2640 ^{14}C BPで板付IIa式の集中する炭素14年代値である2300～2400年代からは大きく外れているが、板付IIa式が分布する前700年ごろには2600年台の測定値が日本産樹木の測定値の中にあるので、とくに矛盾する測定値ではない。

次に較正年代をみてみよう。資料1の夜臼IIb式は、785-715 cal BCが23.0%と低い確率であるが、これまでの測定例からみても前8世紀前半が妥当な年代である。資料2の板付I式は765-505 cal BCが93.1%でやはり8世紀前半で妥当な年代である。資料3の夜臼IIa式は、炭素14年代値のところでも述べたように説明できな

い結果となった。資料4の板付Ⅰ式は、800~750 cal BCが74.7%でもっとも高く妥当な年代である。資料5と6の亀ノ甲タイプのうち、板付Ⅱb~Ⅱc式併行ということで、確率密度は2.4%（1.9+0.5%）と低いものの5はかろうじて下限の部分が前5世紀後半に引っかかっている。しかし6は前6世紀の較正年代なので、IntCal04では照合できない結果となった。日本産樹木との照合でも難しい。資料7の板付Ⅱa式は、840~780 cal BCが93.3%と高い確率になっているが、これは夜臼Ⅱa式の較正年代にあたり、炭素14年代値のところでも指摘したように合わない結果となっている。ところが先述したように東広島市黄幡1号遺跡出土ヒノキ材から作った日本産樹木の炭素14年代値と照合すると、前7世紀前半とのところに、炭素14年代値が2600 ^{14}C BP台を示す数値がある。つまり板付Ⅱa式でも前700年ごろに2600 ^{14}C BP台の数値をもつことがわざかながらある。 δ ^{13}C からも海洋リーパー効果の影響を認められないにもかかわらず、2600 ^{14}C BP台の数値が得られたのは日本列島の地域効果が原因である可能性が高い。したがって日本産樹木の炭素14年代値と比較すれば板付Ⅱa式の較正年代は前7世紀前半という、きわめて整合的な値に落ち着くことがわかるのである。

表2 測定した試料の ^{14}C 炭素年代 (BP) と曆年較正年代 (Cal BC)

挿図番号	試料番号	測定機関番号	δ ^{13}C (‰)	^{14}C 年代 (BP)	曆年較正年代 (cal BC)	確密度分布 (%)
701	FUFJ-38a	PLD-9652	(-24.95 ± 0.16)	2510 ± 25	785~715	23.0%
					695~540	72.4%
795	FUFJ-41	PLD-9653	(-26.05 ± 0.22)	2480 ± 25	765~505	93.1%
					460~450 440~420	0.5% 1.9%
706	FUFJ-42	PLD-9654	(-24.58 ± 0.25)	2410 ± 25	745~685 665~645 590~580	8.3% 1.0% 86.2%
					800~750 685~665 635~615 615~590	74.7% 13.4% 2.6% 4.7%
678	FUFJ-51	PLD-9656	(-26.10 ± 0.18)	2565 ± 25	765~505	93.1%
					460~450 440~420	0.5% 1.9%
317	FUFJ-53	PLD-9657	(-26.79 ± 0.22)	2480 ± 25	785~715 695~540	23.0% 72.4%
					890~875	2.2%
340	FUFJ-54	PLD-9658	(-27.03 ± 0.2)	2510 ± 25	840~780	93.3%
373	FUFJ-55	PLD-9659	(-32.54 ± 0.21)	2640 ± 30		

6 年代的考察

① 全般

夜臼Ⅱa式から板付Ⅱb式に併行する亀ノ甲タイプの付着炭化物を測定した結果、資料3と6をのぞいて整合的な値を得ることができた。九州北部の弥生早期から中期末にかけての土器型式は、炭素14年代値がほぼ確定しており、それと比較することによっても今回得られたデータの整合性を確かめることはできるが、資料7の板付Ⅱa式のように、IntCal04とでは考古学的にみて矛盾する測定値であっても、日本産樹木で構築したDBと照合すれば、整合的な値が得られることもわかった。以下、今回の年代学的調査であらたにわかった点について考察する。

② 夜臼Ⅱb式・板付Ⅰ式の年代

今回の測定によってこれまでの5年間にわたって測定した夜臼Ⅱb式の数は21点、板付Ⅰ式は7点の測定値を得ることになった。夜臼Ⅱb式の下限は、今回の測定値の 2510 ± 25 ^{14}C BPがもっとも新しい。唐津市大江前遺跡の夜臼Ⅱb式のように 2400 ^{14}C BP台の夜臼Ⅱb式は福岡平野では未見である。 2510 ^{14}C BPと 2400 ^{14}C BP台は誤差の範囲とはいえ、中心値で比較するとこのような地域性がいえる。一方、今回資料2で得られた 2480 ± 25 ^{14}C BPという板付Ⅰ式の炭素14年代は、福岡平野においてもっとも若い測定値となった。一方もっとも

古い測定値は菸草遺跡の 2570 ± 40 ^{14}C BPであるが、壺底部なので、確実性の高さでいうと、今回測定した資料4の 2565 ± 25 ^{14}C BPがもっとも古い値となる。

板付I式が成立した遺跡をめぐっては福岡市博多区板付遺跡でしか最古式の板付I式が見られないことから、板付遺跡で創造されたと考えてきたが、今回の調査で最古の炭素14年代値を持つ板付I式が出土した福重縮木遺跡が所在する西区でも板付I式が創造された可能性が出てきたことになる。今後は、板付遺跡などで 2565 ^{14}C BPより古い炭素14年代値をもつ板付I式が見つかれば、板付I式が創造されたのはどこかをめぐる議論に年代面から寄与できると考えられる。

誤差の範囲とはいえ、福岡平野においては板付I式の方が夜臼IIb式よりもとまで残ることがわかった。しかし唐津平野の大江前遺跡のような周辺部の遺跡では、夜臼IIb式も同じくらい残存するので、夜臼IIb式と板付I式の下限問題は平野ごとに複雑な様相を帯びているといえよう。

③ 板付IIa式

板付IIa式の測定値は 2400 ^{14}C BPを出した福岡市博多区雀居遺跡4次出土の1点に加えて、今回新たに資料7の 2640 ± 25 ^{14}C BPを得ることができた。炭素年代ベースで 240 ^{14}C 年の開きがあり、IntCal04では理解しにくいものの、日本産樹木のDBをみれば一目瞭然のように、上下のピークに二つの値があたっていることがわかる。まだ2点なので、板付I式と板付IIa式との間の境界を統計的に求めることはできないが、これまで予測してきたとおり、前700～前650年の間に来ると考えている。今後も測定データの積み上げをおこなう予定である。

④ 亀ノ甲タイプ

雀居遺跡4次調査の6点に今回の2点を入れて板付IIb式および併行する土器の測定値は8点となった。このうち資料6は、整合的な値とはいえないでの外し、また雀居4次も同一個体で内外面をはかっているものがあるので、統計的に耐えられる個体数としては6点である。

板付IIb式の中心値をIntCal04上に落とすと前期末へと較正曲線が落ちてくる落ち際に集まる傾向を見せるのだが、日本産樹木のDBと照合すると、 2400 ^{14}C BP台は、前5世紀に中心値が多数分布することがわかる。したがって板付IIb式の較正年代は、現状では前500～前400年に集まる傾向が見られる。ただ前期末の板付IIc式の測定値が2点しかない現状において型式間境界を統計的に求めることはできない。

7まとめ

弥生時代前期の炭素14年代測定は、夜臼IIb式を中心に測定値の蓄積が進んでいるが、板付I式、板付IIa式、板付IIc式の測定値の蓄積はあまり進んでいない。そのため、統計処理を行はず、前期の型式間境界を統計的に求めることができない。今後もよりいっそうのデータの蓄積に努めたい。

本報告は1～3を藤尾、4を遠部、5～7を藤尾が執筆した。報告を記すにあたり、福岡市教育委員会の池田祐司氏にお世話になった。また試料の前処理、試料調整をおこなった歴博年代資料実験室の伊達元成氏にも感謝いたします。

この報告は、平成19年度文部科学省・科学研究費補助金学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア－炭素 14 年代測定による高精度編年体系の構築－」（研究代表者西本豊弘）の成果の一部である。

《参考文献》

Reimer, Paula J. et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0–26 Cal Kyr BP. Radiocarbon 46 (3), 1029–1058(30).

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) : INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000–0 cal BP. Radiocarbon, 40(1), 1041–1083.



(1) 調査区東半（南東から）



(2) AB1・2 8層遺物出土状況（南から）



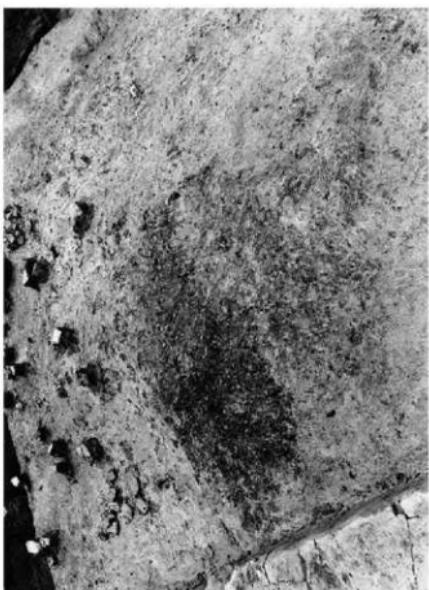
(5) 8層遺物出土状況



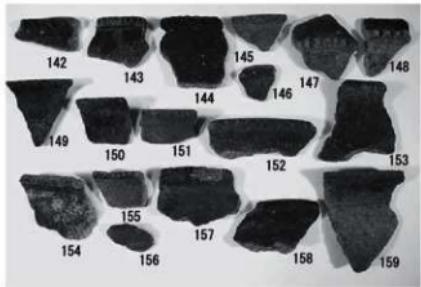
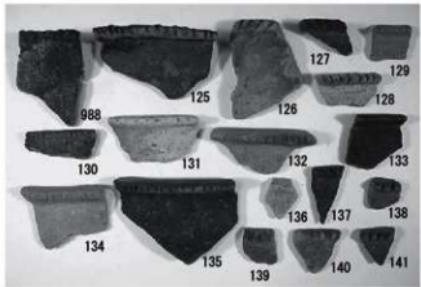
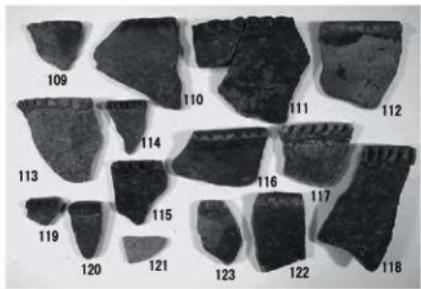
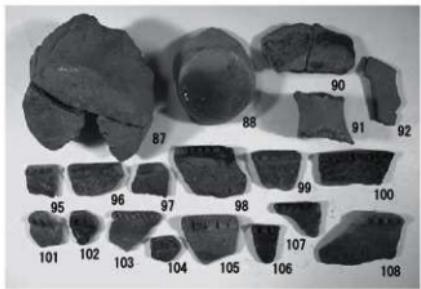
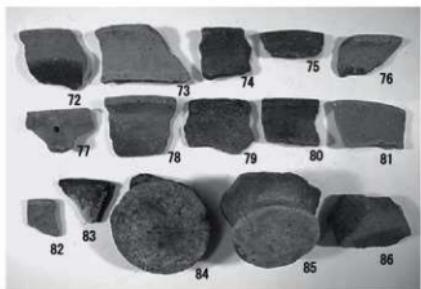
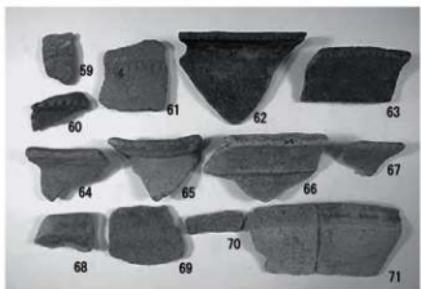
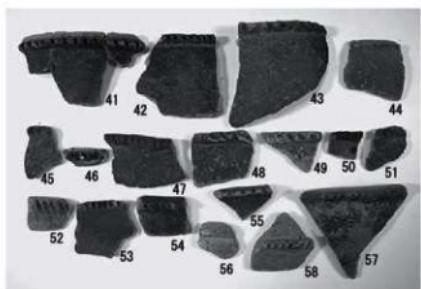
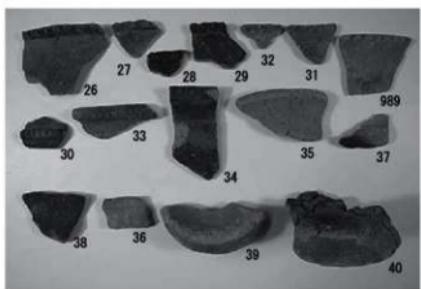
(6) 作業風景（北から）



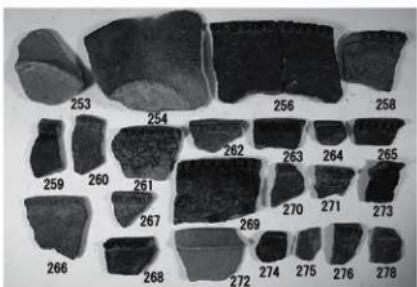
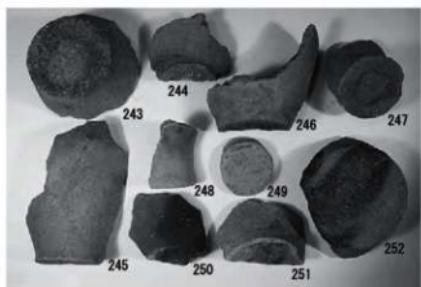
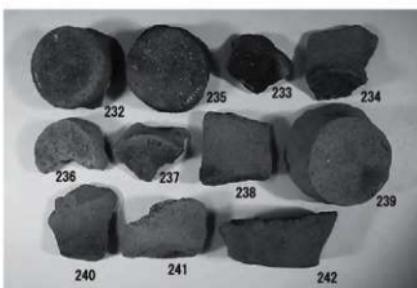
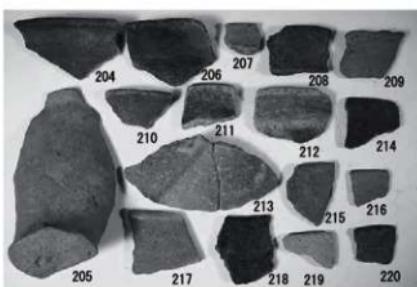
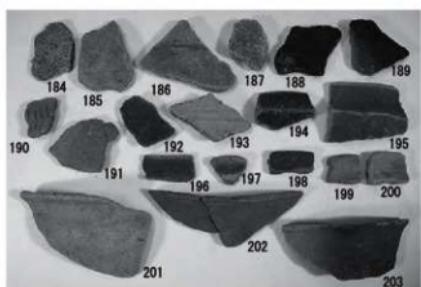
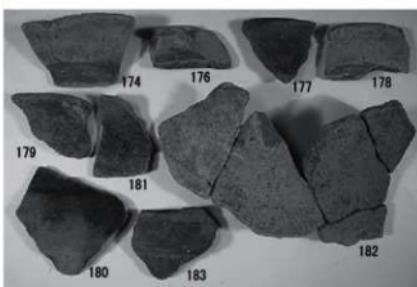
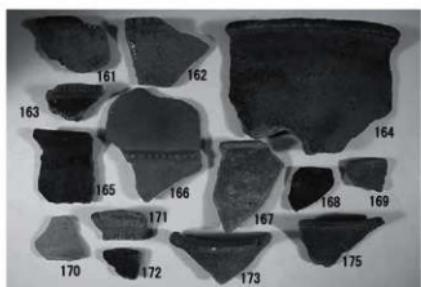
(3) 諸査区西半SD01 (南から)



(4) 崩落物004 (西から)



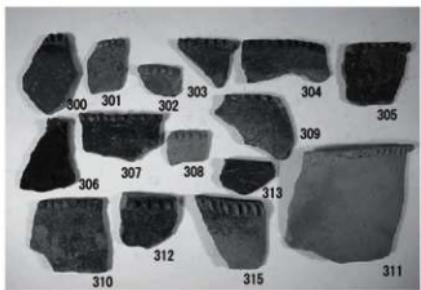
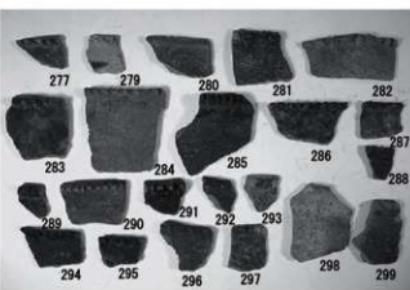
(7) 出土遺物 1



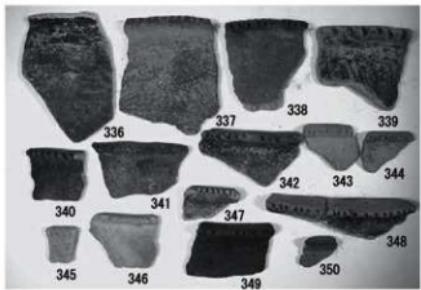
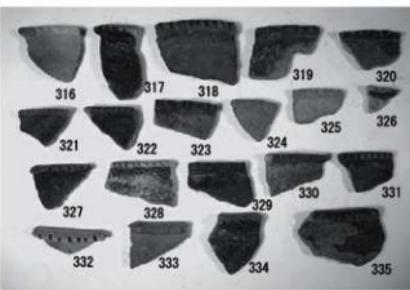
(8) 出土遺物 2



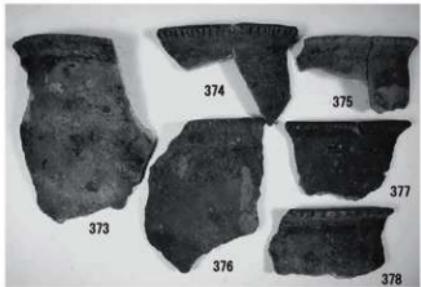
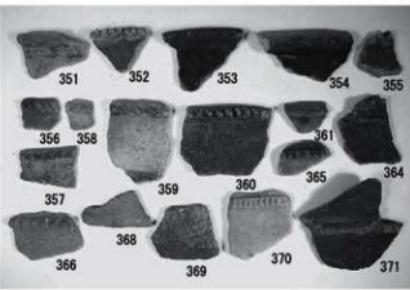
257



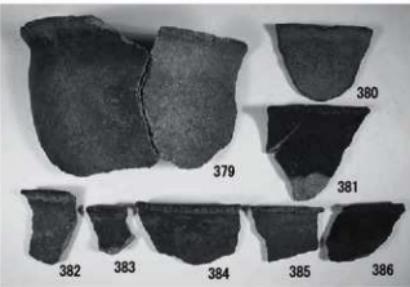
310



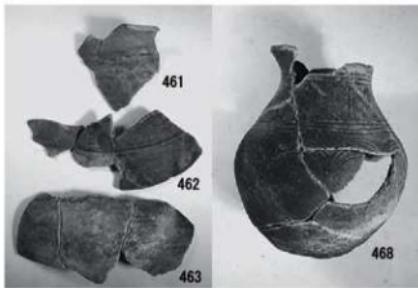
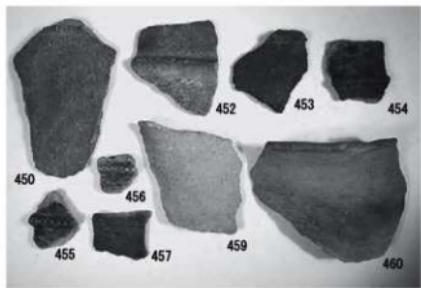
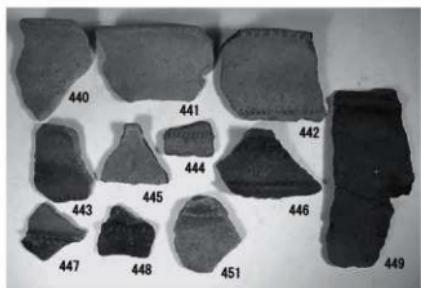
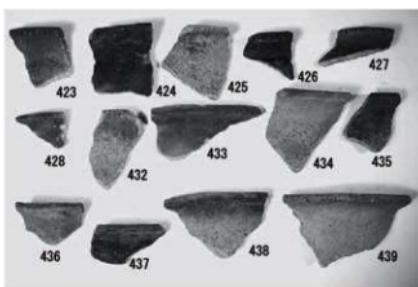
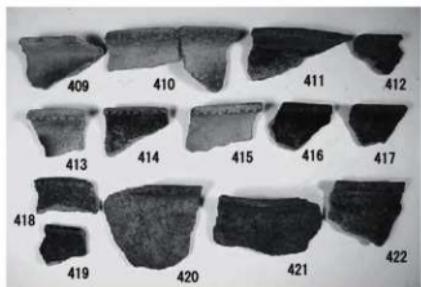
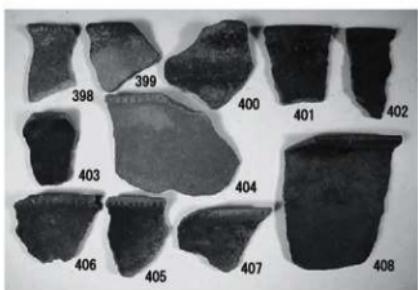
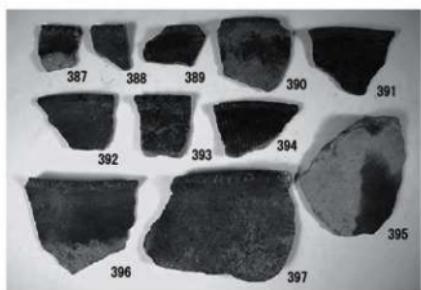
340



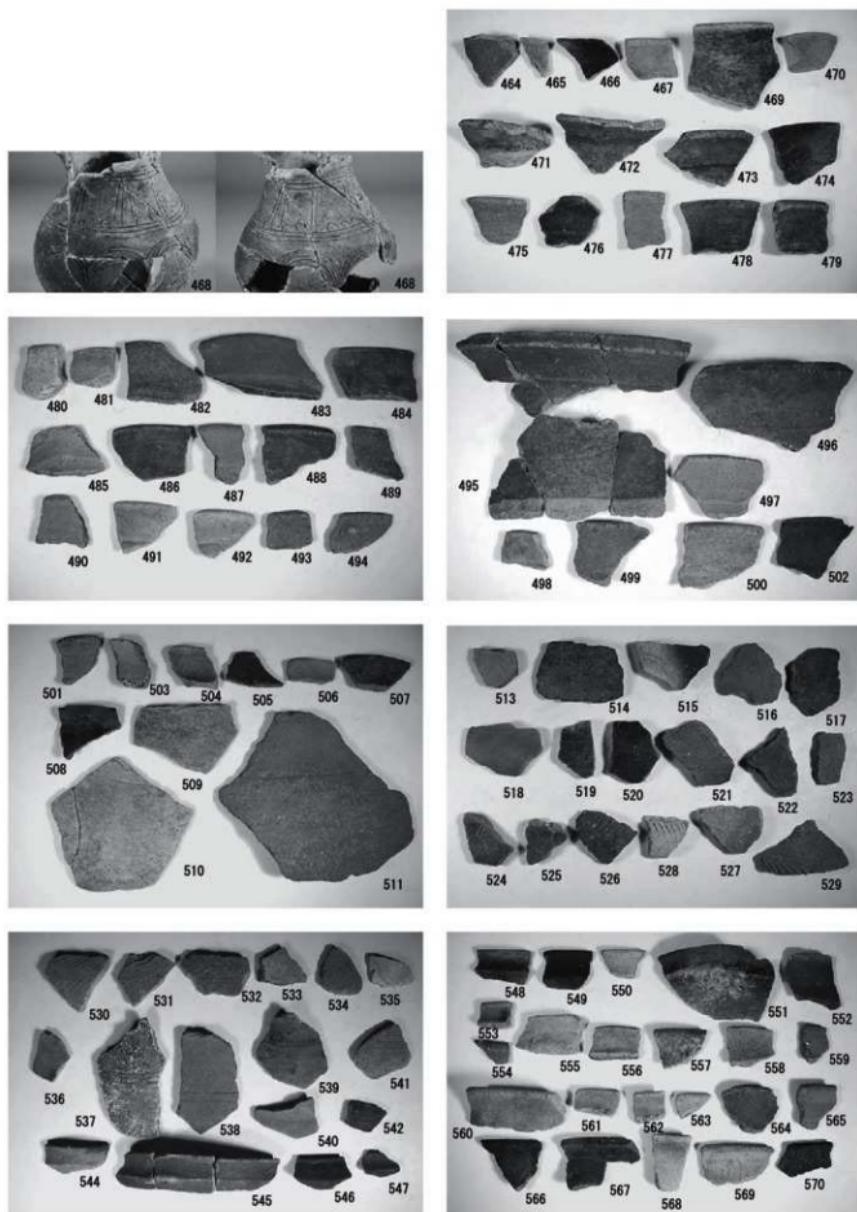
373



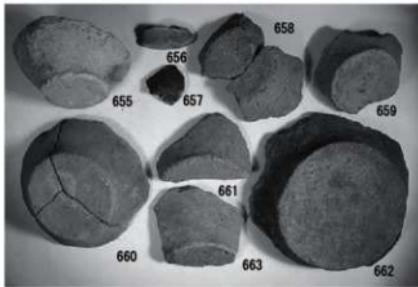
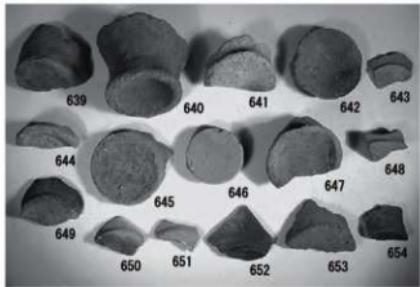
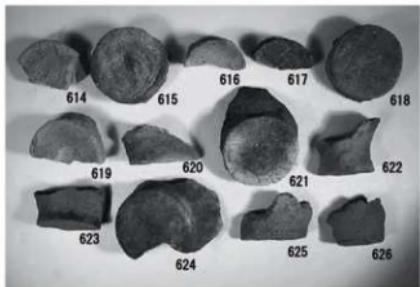
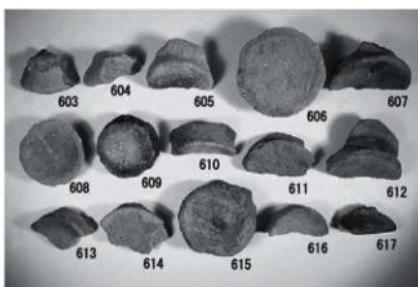
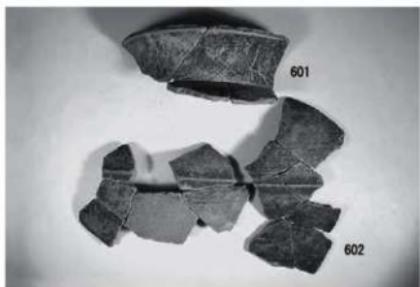
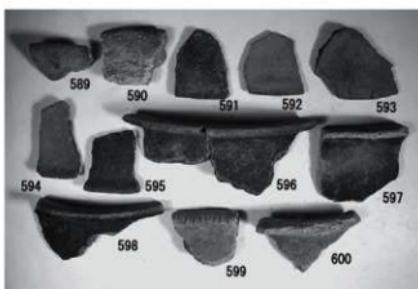
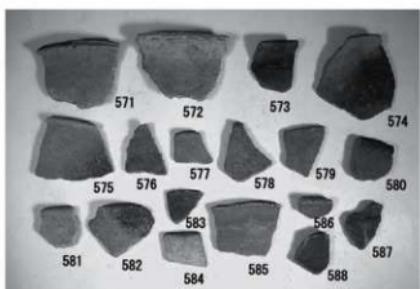
(9) 出土遺物 3



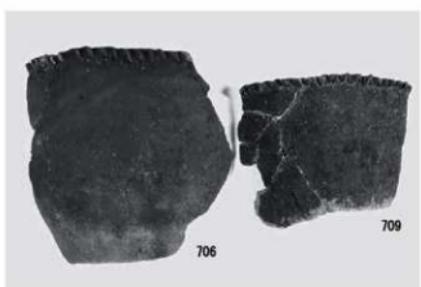
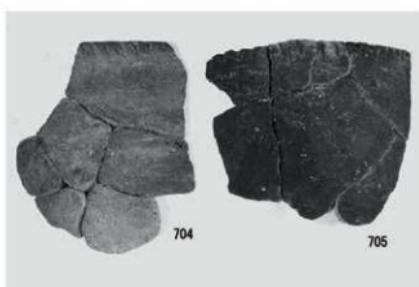
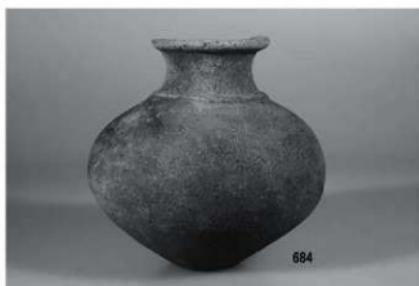
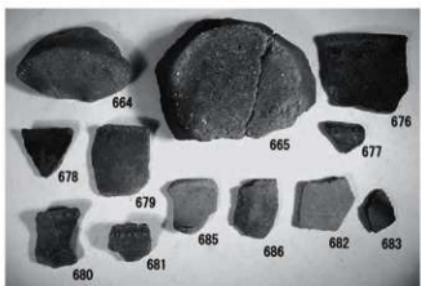
(10) 出土遺物 4



(11) 出土遺物 5



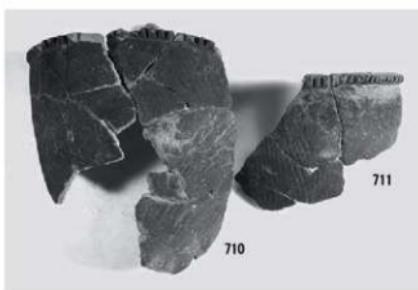
(12) 出土遺物 6



(13) 出土遺物 7

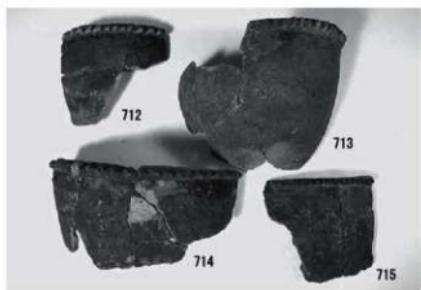


708



710

711

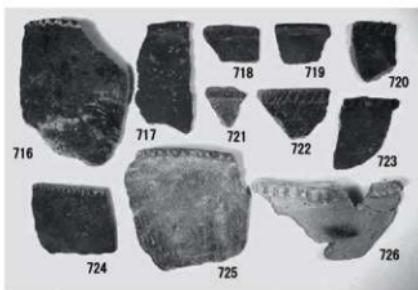


712

713

714

715



716

717

718
719

720

721

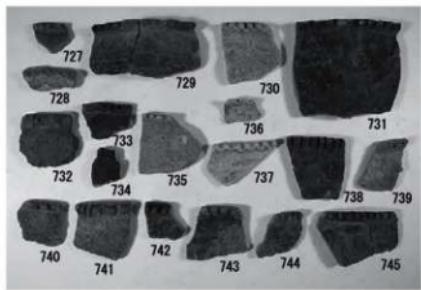
722

723

724

725

726



727

728

729

730

731

732

733

734

735

736

737

738

739

740

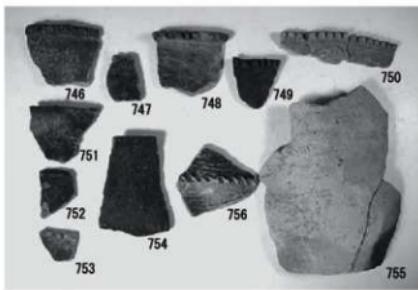
741

742

743

744

745



746

747

748

749

750

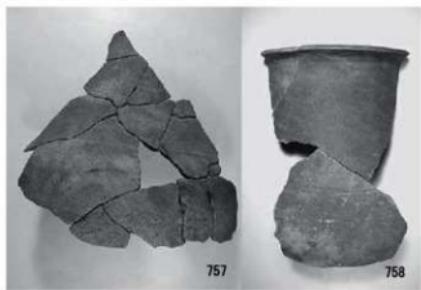
751

752

753

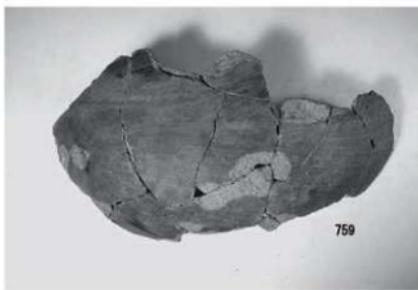
754

755



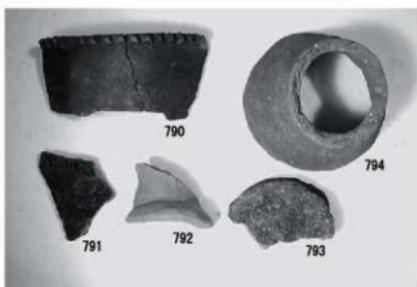
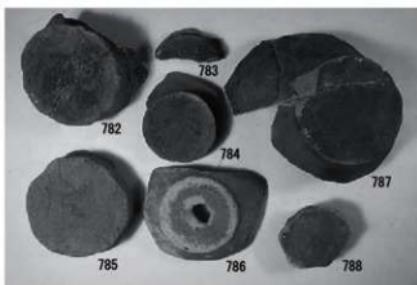
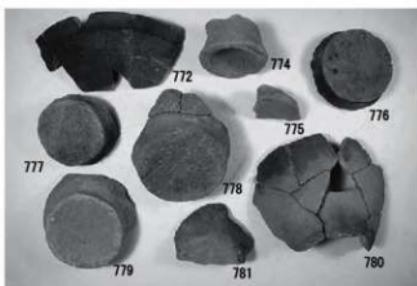
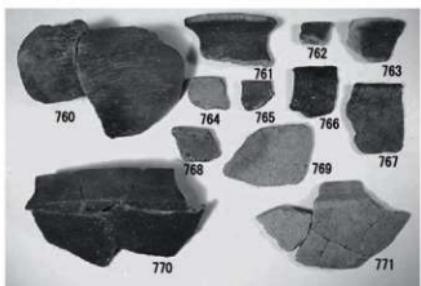
757

758

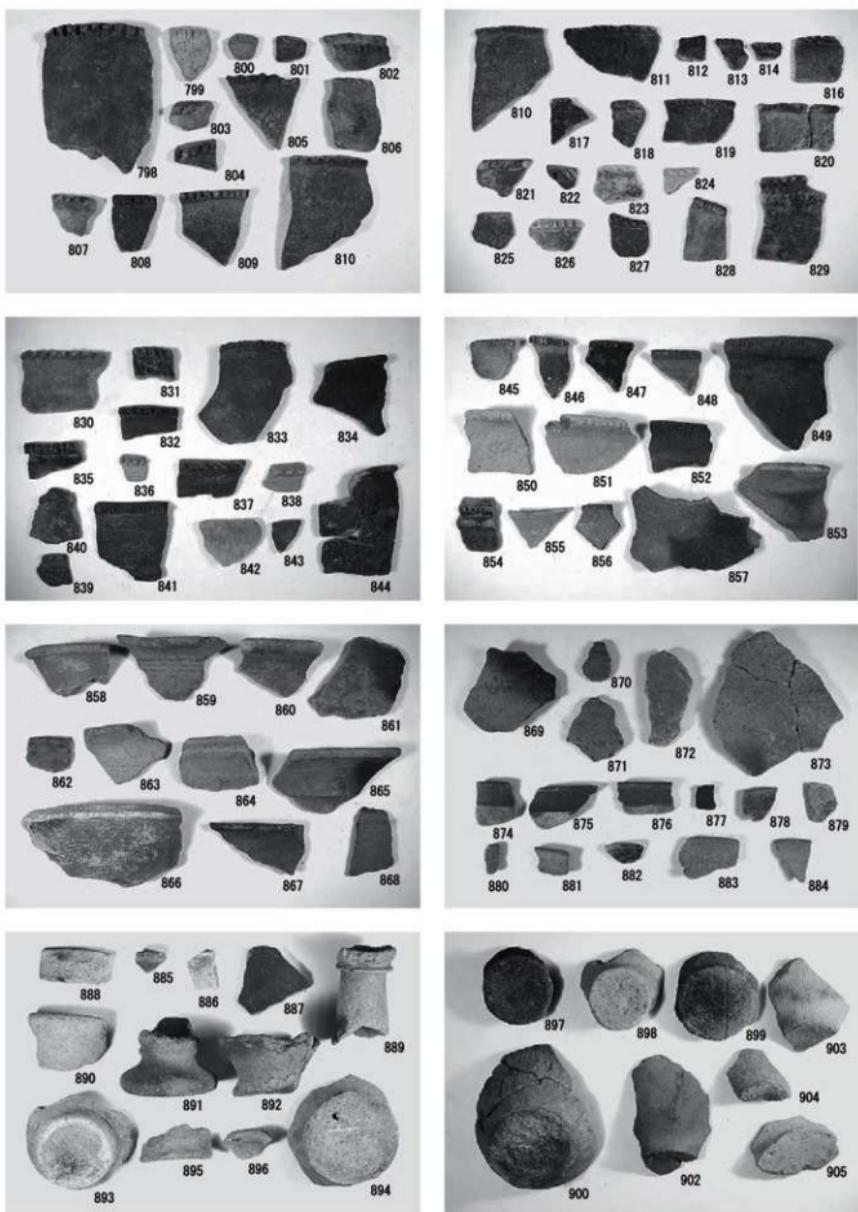


759

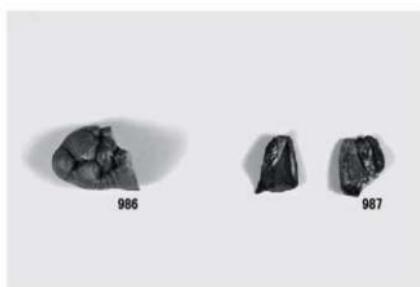
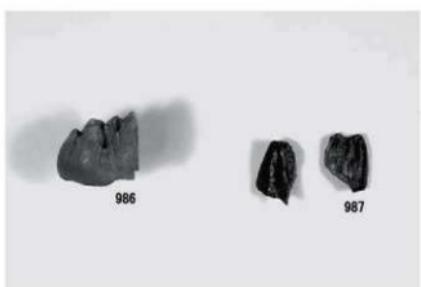
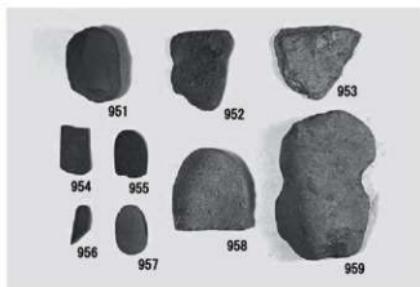
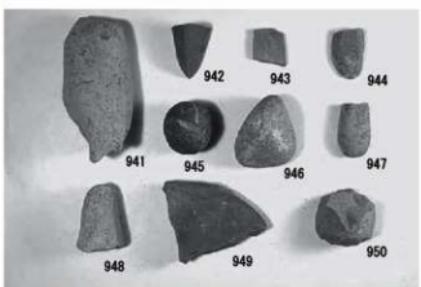
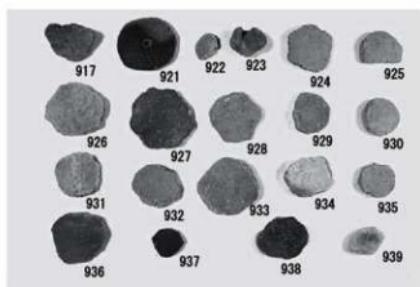
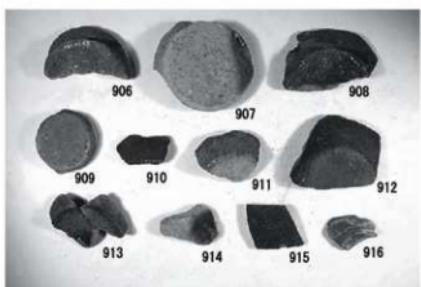
(14) 出土遺物 8



(15) 出土遺物 9



(16) 出土遺物10



(17) 出土遺物11

報告書抄録

ふりがな	ふくしげいなぎいせき		
書名	福重稻木遺跡2		
副書名	福重稻木遺跡第1次、第2次調査報告		
卷次	2		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1006		
編著者名	力武卓治 池田祐司		
編集機関	福岡市教育委員会		
発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	20080317		
作成法人ID	40137		
郵便番号	810-8621	電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神1-8-1		
市町村コード	40137		
遺跡番号	0382		

遺跡名	福重稻木遺跡1次			
遺跡所在地	福岡市西区福重二丁目283-21、外	北緯33°34'14"（世界測地系）東経130°19'21"（〃）		
調査期間	19771109～19771116	調査面積	31.35m ²	調査原因 宅地開発
種別	集落・遺物包含地	主な時代	弥生時代前期後半か	主な遺構 杭列（2条）
主な遺物	突帯文土器、板付式土器、陶磁器類など	石器（磨製石斧 打製石錐）		
概要	粘質土上面で杭列を検出し、粘質土からは弥生時代前期後半の遺物が多数出土した。			

遺跡名	福重稻木遺跡2次			
遺跡所在地	福岡市西区福重四丁目283-6、281-2	北緯33°34'14"（世界測地系）東経130°19'21"（〃）		
調査期間	20030924～20031014	調査面積	116m ²	調査原因 共同住宅建設
種別	集落・遺物包含地	主な時代	弥生時代前期	主な遺構 河川
主な遺物	刻目突帯文土器・前期土器・彩文壺・石斧・石包丁・叩き石・石錐・砾石・石織・石錐・擦器・獸齒			
概要	河川から弥生時代前期を中心とする遺物が多数出土し、東岸の微高地帯で刻目突帯文土器が良好な状態で出土した。			

福重稻木遺跡2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1006集

2008年（平成20年）3月17日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

(092)711-4667

印刷 魚住印刷

福岡市博多区大博町8番20号

(092)291-1946

